

茨城県教育財団文化財調査報告第204集

中山遺跡

国補緊道第14-03-620-0-051号
埋藏文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第204集

なか やま い せき
中山遺跡

国補緊道第14-03-620-0-051号
埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県全域にわたる調和のとれた発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めております。また、北関東圏内の流通の促進と発展を目指して、北関東自動車道の建設を図っております。

このたび、茨城県水戸土木事務所は、笠間市福原地区において、(仮)笠間インターチェンジ建設に伴う県道土浦笠間線のバイパス整備を計画いたしました。その予定地内には中山遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、平成13年9月から平成13年11月まで笠間市中山遺跡において発掘調査を実施いたしましたところ、貴重な遺構・遺物が検出されました。

本書は中山遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土への理解を深める手だてとして、また、教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大なる御協力を賜りましたことに対し、深く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成13年度に発掘調査を実施した、茨城県笠間市大字福原533番地の1ほかに所在する中山遺跡（なかつまのいづか）の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調 査 平成13年9月1日～平成13年11月30日
整 理 平成14年12月1日～平成15年3月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第1班長川津法伸、首席調査員荒井保雄、主任調査員成高一也、芳賀友博が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長瓦吹堅の指揮のもと、主任調査員成高一也が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際し、御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、X軸=+38400m、Y軸=+31100mの交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度に()を付して併記した。

3 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。(調査現場で調査を開始した時点での記号をそのまま使用している。)

遺構 住居跡-S I 掘立柱建物跡-S B 地下式竈-S K・S E 土壇墓-S K 土坑-S K
溝-S D 道路跡-S F
遺物 土器-P 土製品-D P 石器-Q 金属製品-M 拓本記録土器-T P 自然遺物-N
礫-S
土層 擾乱-K

4 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



●土器・拓本記録土器 □石器 - - - - - 硬化面

5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社)を使用した。

6 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は500分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺とした。
- (3) 遺構または遺物で、種類や大きさにより縮尺が異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

7 「主軸」は、住居跡については甕を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし、その他については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸(径)方向」は、主軸・長径が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例N-10°-E)。

8 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

- (1) 遺物の計測値の単位はcm・gである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- (2) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号については、土器、拓本記録土器、土製品、石器、金属製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

9 遺構一覧表の計測値の単位はm・cm・m²である。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺物	9
2 平安時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 土坑	38
(3) 遺構外出土遺物	40
3 中・近世の遺構と遺物	40
(1) 地下式墳	40
(2) 土墳墓	46
(3) 土坑	48
(4) 溝	64
(5) 道路跡	67
(6) 遺構外出土遺物	72
4 時期不明の遺構	72
(1) 掘立柱建物跡	72
第4節 まとめ	74
遺構一覧表	
写真図版	

抄 録

ふりがな	なかやまいせき							
書名	中山遺跡							
副書名	国補緊選第14-03-620-0-051号埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第204集							
著者名	成島一也							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587							
発行年月日	2003(平成15)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地							
中山遺跡	茨城県笠間市大字福原533番地の1ほか	08216 -125	36度 20分 36秒 (36度 20分 47秒)	140度 10分 55秒 (140度 10分 43秒)	71 ~ 89m	20010901 ~ 20011130	6,334.72㎡	一般県道土浦笠間線整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中山遺跡	包蔵地	縄文			縄文土器(深鉢) 石器(石鏃)		平安時代の集落跡と中世から近世にかけて形成された墓域と道路跡が中心。	
	集落跡	平安	竪穴住居跡 土坑	17軒 2基	土師器(坏,高台付坏,高台付碗, 小皿,甕,甌) 須恵器(坏,壺,甕,長頸瓶) 灰釉陶器(碗) 土製品(紡錘車) 石器(礫石)		平安時代前半の住居跡の竈の構築材に石材が使用されていた。	
	墓域	中世 ~ 近世	地下式横土壌墓 土坑 溝	5基 1基 80基 4条	土師質土器(小皿,内耳鍋,搦鉢) 陶器(皿) 磁器(高麗青磁・碗) 自然遺物(馬骨)		中世から近世にかけて、丘陵の中腹や斜面部に墓域が形成されている。	
	道路跡	近世以降	道路跡	4条	土師質土器(小皿,内耳鍋) 瓦質土器(火鉢) 陶器(碗,搦鉢,甕) 磁器(碗) 金属製品(鉄釘,銅銭,不明鉄製品)		地下式横と土壌墓も確認され、地下式横から馬骨、土壌墓から瀬戸・美濃系の甍骨が出土している。	
	その他	時期不明	独立柱建物跡 土坑 溝	1棟 94基 2条	鍛冶関連遺物(鉄滓)		また、近世から使用されている現在の県道土浦笠間線は三期にわたって改修されている。	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、茨城県笠間市福原において、主要地方道土浦笠間線の整備を進めている。

平成11年7月5日、茨城県水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長宛てに、主要地方道土浦笠間線道路新設工事地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会があった。

これに対して茨城県教育委員会は、平成12年7月12日に現地踏査を行い、平成12年10月31日と11月1日に試掘調査を実施した。そして、平成12年11月13日、茨城県教育委員会教育長から茨城県水戸土木事務所長宛てに、事業地内に中山遺跡が所在する旨回答した。

平成13年3月26日、茨城県水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長宛てに、文化財保護法第57条の3に基づく土木工事等の通知が提出された。平成13年3月27日、茨城県教育委員会教育長から茨城県水戸土木事務所長宛てに、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶことから、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成13年3月28日、茨城県水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長宛てに、事業地内における埋蔵文化財(中山遺跡)の取扱いについて協議書が提出された。

その結果、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査を実施することを決定し、平成13年3月28日、茨城県教育委員会教育長から茨城県水戸土木事務所長宛てに、事業地内における中山遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成13年9月1日から平成13年11月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

中山遺跡の調査は、平成13年9月1日から平成13年11月30日までの3か月間実施した。以下、調査の経過について、その概要を表で記載する。

作業項目		9月	10月	11月
調査準備 及び 表土除去	I 区	[進捗バー]		
	II 区	[進捗バー]		
	III 区	[進捗バー]		
	IV 区	[進捗バー]		
	V 区	[進捗バー]		
遺構調査	I 区	[進捗バー]		
	II 区	[進捗バー]		
	III 区	[進捗バー]		
	IV 区	[進捗バー]		
	V 区	[進捗バー]		
遺物洗 浄 写真 整理	[進捗バー]			
補足調 査 及び 搬出準備	[進捗バー]			

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中山遺跡は、茨城県笠間市大字福原533番地の1ほかに所在している。

笠間市は、茨城県のほぼ中央部に位置し、周辺は吾国山(518m)や仏頂山(430m)などに連なる山岳丘陵が多く、笠間盆地が形成されている。鶏足山塊と筑波山塊に囲まれたこれらの山岳丘陵の地質は、古期岩類と花崗岩類に大別され、「稲田石」と呼ばれる御影石の採掘が有名である。

遺跡周辺の地勢は、開析が進んだ山岳丘陵に囲まれた谷で、周囲1km以内の最高標高は約106m、最低標高は約65mである。地質をみると、第四紀洪積世(200～1万年前)に形成された洪積統が堆積しており、この谷の底部では38～24万年前に形成された成田層群の連続である砂礫層が標高100m付近まで分布している。また、この上部には洪積世後期に形成された関東ローム層(宝木ローム層、鹿沼軽石層、田原ローム層など)が堆積している。

当遺跡は、吾国山北麓にある丘陵の北端部上の標高71～89mに位置しており、低地との比高は19mほどである。遺跡周辺の土地利用状況は、主として畑地・山林であり、遺跡の現況も畑地と山林であった。

第2節 歴史的環境

中山遺跡が所在する笠間市福原付近は、山岳丘陵に囲まれた谷が入り組み、台地から急な斜面を伴った丘陵づたいに遺跡が分布し、古代から人々の生活の場であったことを示している。ここでは、当遺跡を中心に周辺の主な遺跡について述べることにする(表1, 第1回)。

旧石器時代の遺跡は、単独の遺跡としては未だ確認されていないが、縄文時代に比定される遺跡やその周辺から遺物が出土している。笠間市本戸地区では石碕遺跡<13>と本戸城跡<4>から細石刃、岩瀬町高輪地区から槍先形尖頭器がそれぞれ出土している。また、笠間市片庭地区の西田遺跡<2>から出土した石斧は「獅子柴型」石斧で、最終末期の所産であり、今後、新たな遺跡が確認される可能性は高い¹⁾。

縄文時代では、早期から晩期までの遺跡が笠間市内で71遺跡、岩瀬町内で19遺跡ほど確認されている。立地条件を見ると、笠間市内では早・前期の遺跡が市の北部や南部の丘陵部の標高75m以上の場所に立地しているのに比べ、中期以降は遺跡数が増加する傾向と同時に、標高50mから75mの開けた平地や台地上に立地する遺跡が多くなる。また、岩瀬町東部では、桜川とその支流域の沖積台地から入り込む谷津田や支谷に面した平地に多く分布している。

平成6・7年(1994・1995年)に、筑波大学により調査が行われた西田遺跡では、縄文時代中期から後期の住居跡4軒、集石遺構1基などが検出された。中期の阿玉台式・加曾利V式土器、耳飾、土偶、石棒、石鏃などが出土し、集落の中で祭祀的行為が行われていた可能性を窺わせる。また、岩瀬町磯部地区の磯部遺跡<14>からは、前期の諸磯式、中期の阿玉台式、後期の堀之内式の土器が出土し、隣接する磯部遺跡<21>からは中期五領ヶ台式から後期安行式までの土器が出土している。この付近では、長い時代に渡って人々が集落を形成していたものと考えられる²⁾。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、笠間街道沿いの谷津が形成される台地上から丘陵地帯に多く立地

している。弥生時代の遺跡は笠間市内に15遺跡、岩瀬町内に15遺跡が確認され⁸、古墳時代の遺跡は笠間市内に36遺跡（うち古墳群は11か所、古墳約56基）、岩瀬町内に56遺跡（うち古墳群27か所、古墳約146基）が確認されている。また、両時代にわたって形成された遺跡が15遺跡ほどであり、遺跡が古墳時代になって急速に増加する傾向にある。特に、古墳（群）は岩瀬町北東部に数多く構築されている。

岩瀬町の松田古墳群〈15〉では、平成14年（2002年）に北関東自動車道の建設に伴う発掘調査が行われ、弥生時代の住居跡14軒、古墳時代の住居跡16軒、前方後円墳1基、円墳3基などが調査された。特に、墳長約40mの前方後円墳の後円部墳頂付近と墳丘下からは、それぞれ粘土葺が確認され、墳頂部の葺内から五獣形鏡・直刀・ガラス玉などが検出され、墳丘下の葺内からは銅網が出土した。このように古墳を重複した構築方法や埋葬方法の類例は数少ない貴重な資料であり、被葬者の関係などこれからの調査研究によって解明されることを期待したい。また、同じく平成14年度に調査された高橋遺跡〈22〉では、弥生時代後期の住居跡4軒、古墳時代中期から後期の住居跡8軒が検出され、炉から竈に移り変わる初期竈が確認されている。さらに、鏡を模倣した双孔円板が出土していることから、集落の中で祭祀的な行為が行われたものと推定される。

奈良・平安時代になると、律令制の下、福原付近は新治郡巨神塚に属することとなる。この時代の遺跡は、笠間市内に93遺跡、岩瀬町内に10遺跡が確認されており、標高70mほどの斜面が広がる台地から河川によって形成された沖積地にかけて多く存在している。特に、古代新治郡衙は現在の協和町吉郡に所在し、当遺跡から西に約9kmほどである。また、新治郡内の駅家と伝えられる大神駅が周辺に位置していたと推定されている⁹。さらに、笠間市内の大瀬窯跡群や岩瀬町内の堀の内古窯跡群などの須恵器窯跡が数多く確認されており、古代から郡の中心であったことが窺える。

周辺の遺跡としては、隣接する丘陵地に平成3年度の発掘調査において8世紀後葉の住居跡4軒が確認された福原原遺跡〈11〉が所在する。また、岩瀬町内の磯部遺跡では、住居跡6軒と掘立柱建物跡1棟が確認されている。集落は古墳時代中期から奈良・平安時代にかけてのもので、特に掘立柱建物跡は高床式の構築物と考えられ、稲村神社の元宮との関連が指摘されている。間中遺跡〈24〉は、標高78mの台地上に位置する平地に立地しており、住居跡22軒、溝跡1条が確認された奈良から平安時代にかけての集落跡で、多数の墨書された須恵器¹⁰や装身具・鍛冶関連遺物などが出土している。

中世になり、律令制の崩壊とともに地方武士が台頭して力を持つようになると、宇都宮氏一門の笠間氏と家臣の福原氏によってこの地方は治められるようになる。笠間氏は鎌倉時代初頭にこの地を領有し、豊臣秀吉の小田原攻めの際に北条方に付いたことから、小田原城陥落後に攻められて滅亡した。一方、平安時代末期に京都蓮華王院の荘園領となった「中郡庄」（現岩瀬町）では、地頭職の中郡氏・安達氏がその基盤を固め、勢力を拡大したのち、鎌倉・室町幕府の直轄領になった。

近世になると、福原周辺は笠間藩に所属することになる。笠間藩領は領主が松平氏から牧野氏まで交代することはあったが、明治維新まで現在の市域の大部分を所領とし、城下町や街道の整備が行われて発展した。

中世から近世にかけての遺跡としては、城跡、館跡、塚（塚群）などがあげられ、笠間市内に43遺跡、岩瀬町内に14遺跡を数える。特に、流通路としての重要性が高い笠間街道に沿った丘陵地帯には、領内の防衛的役割を持つ居城や砦が数多く築かれ、福原城跡〈5〉や稲田城跡〈10〉など笠間市内に13か所、岩瀬町内に12か所が確認されている¹¹。また、笠間市内では近世初頭の塚と考えられる福原打越塚群〈3〉、中世から近世にかけての墓塚が検出している福原原遺跡など塚や墓域も多く確認されている¹²。また発掘調査が行われていない遺跡が多く、今後の調査研究が期待されるところである。

※文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 平成14年度、茨城県教育財団の調査によって、福原打越塚群からは旧石器時代と縄文時代の遺物が、松田古墳群から旧石器時代の遺物がそれぞれ出土している。後日、報告書が刊行される予定である。
- 2) その他に発掘調査された遺跡としては松田古墳群や高幡遺跡がある。松田古墳群では中期の住居跡15軒が確認され、高幡遺跡では中期の阿玉台式から後期の加曾利B式までの土器が出土し、陥し穴が確認されている。
- 3) 笠間市内には、足洗式と並行する鋸歯状の沈線文が施された土器が出土している蔵後遺跡(12)や十王台式土器が出土した後久保遺跡などがあり、岩瀬町では南飯田地区などから十王台式土器が出土している。
- 4) 大神駅については、茨城都安後駅から下野国府に通じる官道上に位置していると考えられ、新治郡内の大郷戸説や福田説がある。
- 5) 須恵器の坏に「家」「水宝」「井刀」「林家」「栗大」「守前家」「太」「洗原」などが書かれており、岩瀬町内に確認されている堀の内古窯跡・上野原瓦窯跡との関連が注目されている。
- 6) 周辺の城館跡としては、飯岡館跡(8)、羽黒山城跡(16)、棟塚城跡(20)などがあげられる。
- 7) 笠間市内では、5つの塚群を含め、約50基の塚が確認されている。

参考文献

- ・ 蜂須紀夫ほか『茨城県 地理のガイド』1986年
- ・ 茨城県『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』1979年
- ・ 茨城県『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』1995年
- ・ 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年
- ・ 笠間市史編さん委員会『笠間市遺跡分布調査報告書』笠間市史資料 第5集 1992年
- ・ 笠間市史編さん委員会『笠間市史 上巻』笠間市 1993年
- ・ 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史 通史編』岩瀬町 1987年
- ・ 西野元、加藤博文ほか『笠間市西田遺跡の研究—縄文時代における石製の制作と流通に関する研究—平成6・7年度文部省特定研究経費による調査研究概要』筑波大学史学・考古学研究調査報告7 筑波大学歴史・人類学系1996年
- ・ 萩原義典『福原原遺跡』笠間市埋蔵文化財調査報告書8集 笠間市教育委員会 笠間市福原原遺跡発掘調査会 1995年

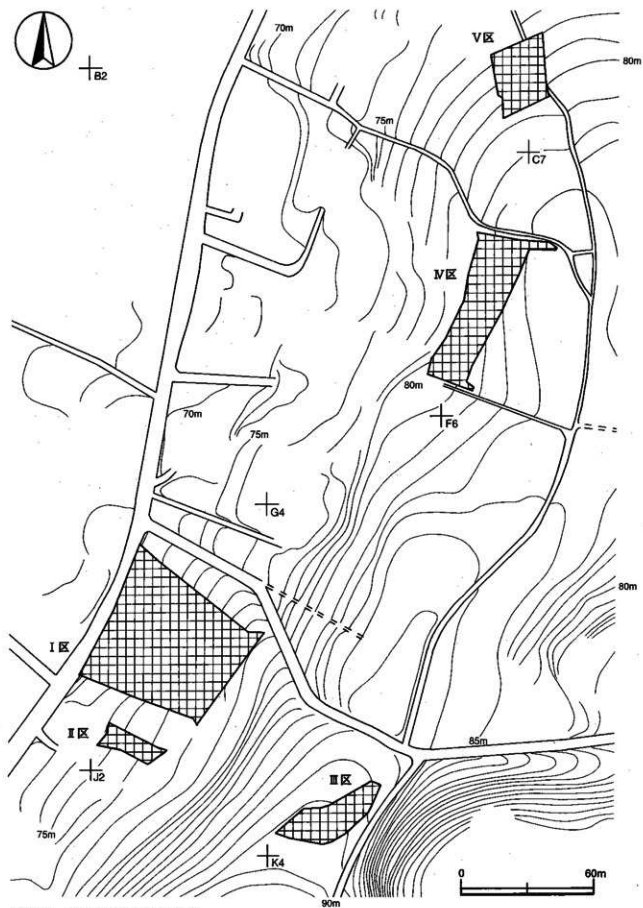
表1 中山遺跡周辺遺跡一覧表(第1図中の●は古墳・古墳群, ▲は城館を示す。)

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世
1	中山遺跡	○			○	○	○	13	石崎遺跡	○	○			○		
2	西田遺跡	○	○		○			14	織部遺跡	○		○				
3	福原打越塚群	○	○			○	○	15	松田古墳群	○	○	○			○	
4	本戸城跡	○	○			○		16	羽黒山城跡						○	
5	福原城跡						○	17	曾根東台遺跡	○	○					
6	大郷戸新谷東遺跡	○			○			18	加茂遺跡	○	○	○				
7	追越遺跡	○			○			19	松田遺跡	○						
8	飯岡館跡						○	20	棟塚城跡						○	
9	森川遺跡							21	裏山遺跡	○	○	○	○			
10	稲田城跡						○	22	高幡遺跡	○	○	○				
11	福原原遺跡	○	○		○	○		23	月山寺東遺跡	○	○					
12	蔵後遺跡	○	○	○	○			24	間中遺跡					○		



第1図 中山遺跡周辺遺跡位置図

河上隆夫、佐藤隆夫、山崎隆夫、山崎隆夫



第2図 中山遺跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

中山遺跡は、縄文時代と平安時代から近世までの複合遺跡である。調査前の現況は畑・山林で、調査面積は6,334.72㎡である。

今回の調査によって検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡17軒、土坑2基、中世から近世にかけての地下式墳5基、土壇墓1基、土坑80基、溝4条、道路跡4条、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑94基、溝2条である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で18箱分が出土した。縄文時代の遺物は早期後半から後期までの土器と石器、平安時代の遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品など、中世から近世の遺物は土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、高麗青磁、古銭などがそれぞれ出土している。

第2節 基本層序

調査I区のH3J7区と調査IV区のD6b0区にテストピットを設定し、約1.2~1.8m掘り下げて基本土層の観察を行った。両テストピットともに、今市・七本桜軽石層、田原ローム、第1黒色帯(BB I、第1ブラックバンド)、AT(始良Tn火山灰)層、第2黒色帯(BB II、第2ブラックバンド)は確認されなかった。これは、調査区が斜面部で土が堆積しにくい状況であったことと、耕作等の掘削によって削平されてしまったことが原因と考えられる。

まず調査I区の土層について述べる(第3図)。

第1層は暗褐色の表土層であり、ローム中ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含んでいる。若干の締まりがあり、層厚は23~47cmである。

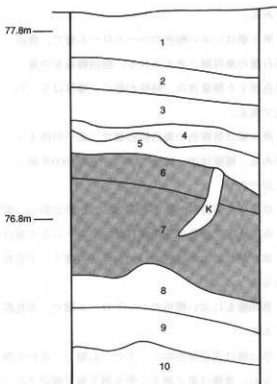
第2層はにぶい黄褐色のハードローム層であり、粘性は弱い。層厚は20~24cmであり、この層以下が宝木ロームと考えられる。

第3層もにぶい黄褐色のハードローム層であり、若干の粘性を帯びている。層厚は10~20cmである。

第4層もにぶい黄褐色のハードローム層であり、白色スコリアと赤色粒子を含み、第3層よりも締まりが弱い。層厚は5~14cmである。

第5層は黄褐色のハードローム層で、鹿沼軽石(KP)層の漸移層と考えられる。鹿沼軽石を多量に含み、粘性が弱く、あまり締まっていない。層厚は4~15cmである。

第6層は明黄褐色の鹿沼軽石層で、若干の締ま



第3図 調査I区基本土層図

りがある。層厚は7~17cmであり、約30,000年前に比定できる。

第7層は黄色の鹿沼軽石層で、層厚は40~53cmである。

第8層はにぶい黄橙色のハードローム層で、白色スコリアを少量含み、強い粘性を帯びている。層厚は15~25cmである。

第9層もにぶい黄橙色のハードローム層で、白色スコリアと黒色粒子を少量含み、強い粘性を帯びている。層厚は14~25cmである。

第10層は明黄褐色のハードローム層で、白色スコリアと砂粒を微量含み、強い粘性を帯びている。層厚は16cm以上である。

なお、遺構は第2層から第5層上面で確認され、第2層から第6層上面にかけて掘り込まれている。

次に調査IV区の土層について述べる(第4図)。

第1層は暗褐色の表土層であり、ローム中ブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含んでいる。あまり締っており、層厚は14~20cmである。

第2層は第2黒色帯下に位置する褐色のハードローム層であり、粘性は弱い。層厚は8~16cmであり、この層以下が宝木ロームと考えられる。

第3層も褐色のハードローム層で白色スコリアを少量含み、若干の粘性を帯びている。層厚は20cmほどである。

第4層も褐色のハードローム層で、黒色粒子を含み、第3層よりも締っている。層厚は7~15cmである。

第5層はにぶい褐色のハードローム層で、鹿沼軽石層の漸移層と考えられる。鹿沼軽石を中量、黒色粒子を微量含み、粘性が弱い。層厚は5~15cmである。

第6層は黄橙色の鹿沼軽石層で、若干の締まりがある。層厚は20~28cmであり、約30,000年前に比定できる。

第7層も黄橙色の鹿沼軽石層で、粘性が弱い。層厚は16~24cmである。

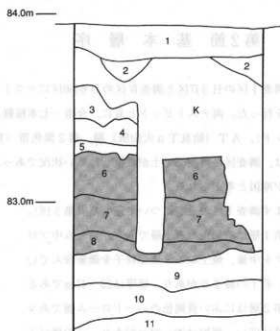
第8層も黄橙色の鹿沼軽石層で、ロームを少量含んでいる。層厚は4~14cmである。

第9層はにぶい橙色のハードローム層で、赤色粒子を少量含み、強い粘性を帯びている。層厚は12~15cmである。

第10層もにぶい橙色のハードローム層で、赤色粒子と砂粒を微量含み、粘性を帯びている。層厚は11~22cmである。

第11層は浅黄橙色のハードローム層で、砂粒を微量含み、粘性を帯びている。層厚は19cm以上である。

なお、遺構は第2層から第5層上面で確認され、第2層から第6層上面にかけて掘り込まれている。



第4図 調査IV区基本土層図

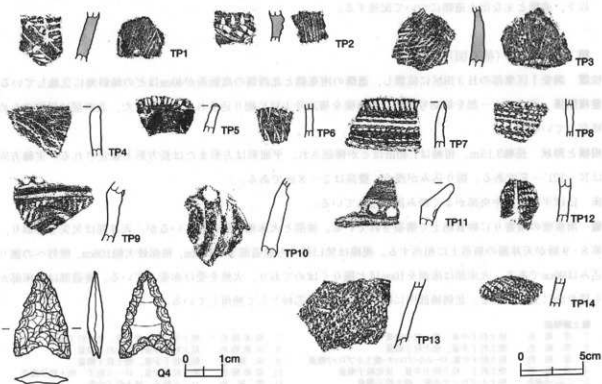
第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺物

今回の調査では、縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代早期から後期までの土器片49点(深鉢)、石鏝1点、碎片1点が出土した。土器の出土地点を調査区別で見ると、調査Ⅰ区6点、調査Ⅲ区33点、調査Ⅳ区1点、調査Ⅴ区9点で、調査Ⅲ区の中央部に集中し、チャート製の石鏝と碎片も調査Ⅲ区から出土している。

また、土器を時期別に見ると、早期後半7点、前期後葉6点、中期1点、後期初頭3点、後期8点、不明24点である。

以下、主な出土遺物(第5図)について記載する。



第5図 遺構外出土遺物(縄文時代)実測図

遺構外出土遺物(縄文時代)観察表(第5図)

番号	時期	容体	文様の特徴	出土位置	備考
TP1~TP3	縄文時代 早期後半	深鉢	1・2は半截竹管による押圧と条痕文が施され、3は表裏面に条痕文が施されている。いずれも胴部片で、胎土中に繊維を含んでいる。	1・2はⅢ区表土、 3はⅠ区表土	条痕文系土器群 PL17
TP4~TP6	縄文時代 前期後葉	深鉢	4は口辺部片で、貝殻縁文が施されている。5は口辺部片で、口唇部に刷みを有し、貝殻波状文が施されている。6は胴部片で、貝殻波状文が施されている。	Ⅲ区表土	浮橋式 PL17
TP7・TP8	縄文時代 中期	深鉢	7は口辺部片で、口唇部に刷みを有し、半截竹管による押し引き文が施されている。8は胴部片で、貝殻縁線による結節状波状文が施されている。	Ⅲ区表土	典津式 PL17
TP9	縄文時代 後期初頭	深鉢	胴上部片で、頸部に隆帯と棒状工具による押圧文、下位は横位の沈線区画内に、R Lの単節縄文が施されている。	Ⅰ区表土	加賀利E式 PL17
TP10~TP12	縄文時代 後期	深鉢	10は口辺部片で、隆帯を貼付け、棒状工具による押圧が施されている。11は口辺部片で、棒状工具による押圧が施されている。12は胴部片で、沈線区画内にR Lの単節縄文が充填されている。	10はⅤ区表土 11はⅠ区表土 12はⅢ区表土	網取Ⅰ~Ⅲ之内 I式 PL17
TP13・TP14	縄文時代 後期	深鉢	いずれも胴部片で、単節縄文が施されている。	13はⅠ区表土 14はⅢ区表土	粗製土器 PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特 徴	出土位置	備考
Q4	石 鏝	2.3	1.6	0.4	0.88	チャート	両面押圧削離。基部の狭りは深く、割縁は直線的。	Ⅲ区表土	PL17

2 平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

調査の結果、平安時代の住居跡は調査Ⅰ区から10軒、調査Ⅳ区から1軒、調査Ⅴ区から6軒の計17軒が検出された。ほとんどが斜面部に位置して、覆土が浅いため、残存率は低かった。

住居跡の時期区分は、9世紀後葉が3軒、10世紀前葉が5軒、10世紀後葉が3軒、9世紀代から10世紀代と考えられる住居跡が1軒、10世紀代と考えられる住居跡が2軒、10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる住居跡が2軒、11世紀前葉が1軒である。

以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

第1号住居跡（第6図）

位置 調査Ⅰ区東部のH3f8区に位置し、遺構の南東側と北西側の高低差が40cmほどの傾斜地に立地している。
重複関係 東コーナー部を第38号土坑、南西壁を第39号土坑に掘り込まれている。また、北西部は斜面のため残存していない。

規模と形状 長軸3.15m、短軸は1.46mほどが確認され、平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-121°-Eである。掘り込みが浅く、壁高は2～8cmである。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 南東壁の南寄りに砂質粘土で構築されている。袖部と火床部が残存しているが、天井部は欠失しており、第8・9層が天井部の崩落土に相当する。規模は焚口部から煙道部まで120cm、袖部最大幅106cm、壁外への掘り込みは90cmである。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受け赤変している。煙道部は火床部から穏やかに立ち上がる。北側袖部内に礫を埋め込んで芯材として使用している。

覆土層解説

1 黒褐色	粘土粒子中量、焼土粒子微量	7 暗赤褐色	焼土小ブロック少量、粘土粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子少量、粘土粒子微量	8 灰黄褐色	粘土粒子多量、焼土粒子微量
3 黒褐色	粘土粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック微量	9 灰褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量
4 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	10 暗赤褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
5 濃い赤褐色	粘土小ブロック中量、焼土粒子微量	11 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
6 暗赤褐色	粘土粒子中量、焼土小ブロック微量		

ピット 確認されていない。

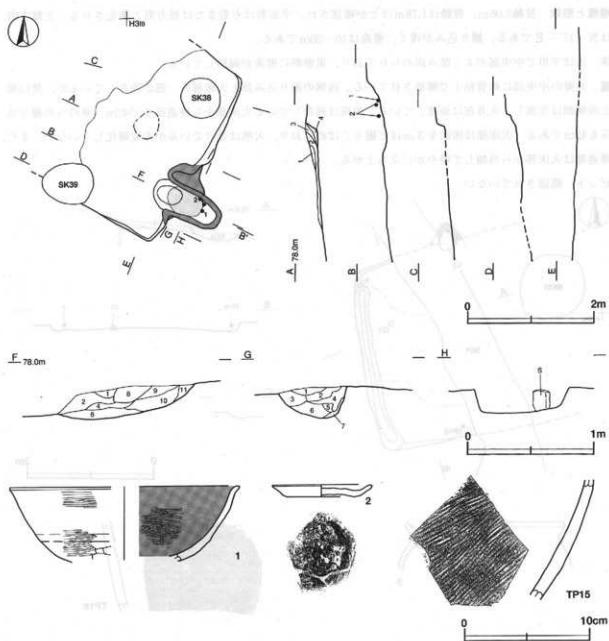
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片19点（坏4、小皿2、甕13）、須恵器片1点（甕）、鉄滓2点、礫1点が竈内を中心に出土している。第6図1・2は竈内、TP15は覆土中からそれぞれ出土している。TP15は胎土中にガラス質の物質が高温で溶けた時にできる黒色粒子を多く含むことから、堀の内古窯跡産と考えられ、流れ込んだ可能性が高い。

所見 鉄滓が出土しているが、焼土塊などは確認されていないので、鍛冶関連の遺構の可能性は少なく、混入したと考えられる。時期は、出土土器及び遺構の形態から11世紀前葉と考えられる。



第6図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土器	高台竹罎	[18.4]	(5.9)	—	長石、雲母	にぶい橙	普通	体部外面下縁ヘラ削り、内・外面ヘラ磨き	竈内	15% 内面黒色処理
2	土器	小皿	7.9	1.0	5.6	長石、石英、 片、赤鉄粒子	浅黄橙	普通	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	竈内	75% PL18
TP15	須恵器	葉	—	(9.6)	—	長石、石英	灰	普通	平行印き	覆土	5% 外面自然釉

第2号住居跡 (第7図)

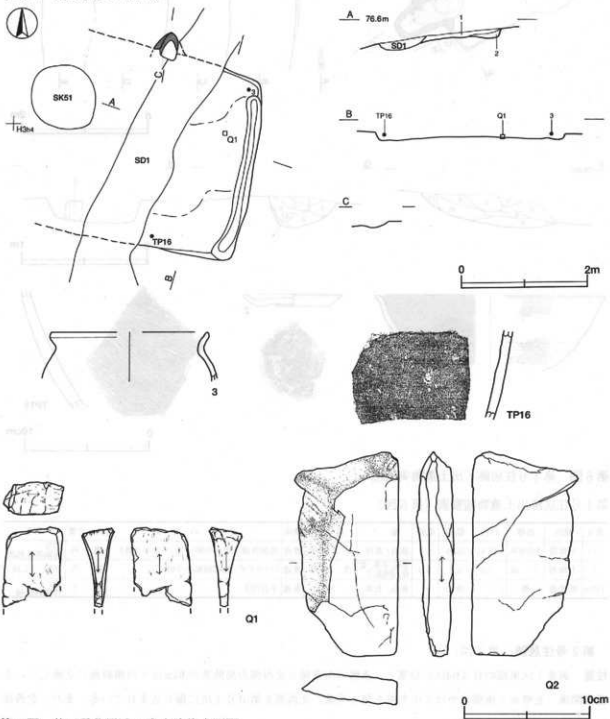
位置 調査I区東部のH3h4区に位置し、遺構の南東側と北西側の高低差が30cmほどの傾斜地に立地している。
重複関係 北壁から南壁にかけて中央部を第1号溝、北西部を第51号土坑に掘り込まれている。また、北西部は斜面のため残存していない。

規模と形状 長軸3.06m，短軸は1.78mほどが確認され，平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-17°-Eである。掘り込みが浅く，壁高は10~20cmである。

床 ほぼ平坦で中央部がよく踏み固められており，東壁際に壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されている。西側の掘り込み部と火床部の一部が残存しているが，焚き口と両袖部は欠落し，天井部は崩落している。規模は残存している火床部から煙道部まで42cm，壁外への掘り込みも42cmである。火床部は床面を3cmほど掘りくぼめており，火熱は受けているが赤変硬化していない。また，煙道部は火床部から外傾して穏やかに立ち上がる。

ピット 確認されていない。



第7図 第2号住居跡・出土遺物実測図

覆土 2層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片13点(坏4, 鉢1, 甕8), 石器2点(砥石), 礫6点, 炭化材が覆土下層から出土している。第7図3は北東コーナー部から逆位, TP16は南壁際から正位, Q1は東壁寄りからそれぞれ出土している。所見 炭化材が出土しているが, 焼土塊や焼土痕は確認されていないので, 焼失住居の可能性は少なく, 流れ込んだと考えられる。時期は, 出土土器及び遺構の形態から10世紀代と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第7図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	小形甕	[12.4]	(3.9)	-	雲母, 長石	にぶい濁	普通	口縁部織ナデ	北東コーナー部 覆土下層	5%, 外周割落 二次焼成
TP16	土師器	鉢	-	(7.0)	-	灰石, 石灰質	にぶい濁	普通	ロクロナデ	南壁下層 覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(6.3)	(4.8)	2.6	(56.0)	凝灰岩	五面使用	東壁寄り 覆土下層	
Q2	砥石	(16.4)	(8.4)	(3.0)	(443.0)	雲母片岩	一面使用	覆土	

第3号住居跡(第8図)

位置 調査I区東部のH3g7区に位置し, 遺構の南東側と北西側の高低差が52cmほどの傾斜地に立地している。重複関係 南コーナー部を第62号土坑に掘り込まれている。また, 北西部は斜面のため残存していないことから, 第63号土坑との新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸3.73m, 短軸は2.12mほどが確認され, 平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-118°-Eである。掘り込みが浅く, 壁高は5~10cmである。

床 ほぼ平坦で, 竈手前から中央部にかけて踏み固められている。また, 中央部に焼土塊が確認されているが, 床面は赤変硬化しておらず, 竈の灰などを廃棄したものと考えられる。

竈 南東壁の中央部に砂質粘土で構築される。両袖部, 火床部が残存しているが, 天井部は崩落している。規模は竈口部から煙道部まで120cm, 袖部最大幅92cm, 壁外への掘り込みは46cmである。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変している。煙道部は火床部から外傾して穏やかに立ち上がる。

土層解説

1 黒褐色

焼土粒子・粘土粒子微量

5 暗赤褐色

焼土粒子少量, 粘土粒子微量

2 暗赤褐色

焼土粒子・粘土粒子少量

6 暗赤褐色

焼土粒子中量, 粘土粒子少量

3 黒褐色

焼土粒子少量, ローム粒子微量

7 暗褐色

ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量

4 黒褐色

粘土粒子少量, 焼土粒子微量

8 暗赤褐色

焼土粒子多量

ピット 確認されていない。

覆土 3層からなり, レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色

ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量

3 暗褐色

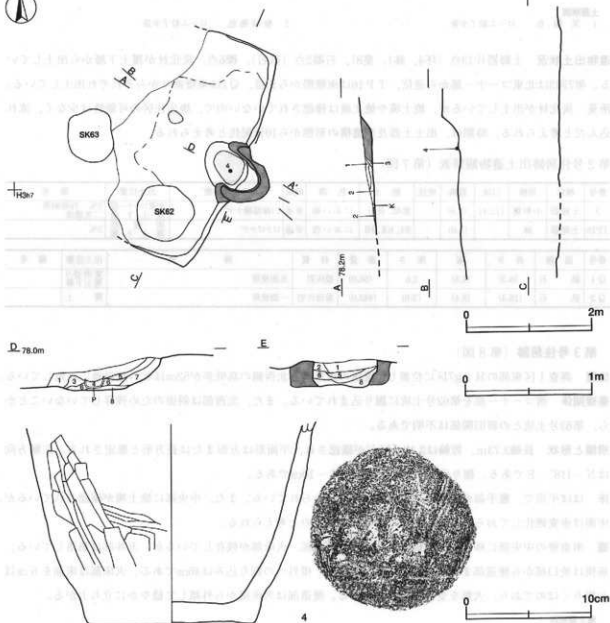
ローム粒子・粘土粒子少量

2 黒褐色

粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片24点(坏5, 甕19)が竈付近を中心に出土している。第8図4は竈火床部から出土し, 火熱を受けて器面が弱碱している。また, 出土した土師器坏は, 内面または外面に黒色処理とヘラ磨きが施されている。

所見 出土土器及び遺構の形態から時期についての詳細は不明であるが, 第1・5・6号住居跡とはほぼ同じ主軸方向で構築されていることから, 10世紀後葉から11世紀前葉の可能性が高い。



第8図 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	土器部	壺	-	(16.1)	13.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り	竈大床部	20% 外面剥落 僅行着

第4号住居跡 (第9図)

位置 調査I区南部のI 3c3区に位置し、傾斜の少ない部分に立地している。

重複関係 中央部から南コーナー部にかけて第55・93・94号土坑にそれぞれ掘り込まれている。また、耕作による攪乱を全面に受けている。

規模と形状 平面形は長軸3.60m、短軸は2.80mの長方形で、主軸方向はN-58°-Wである。壁高は9~13cmほどで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、特に踏み固められていない。

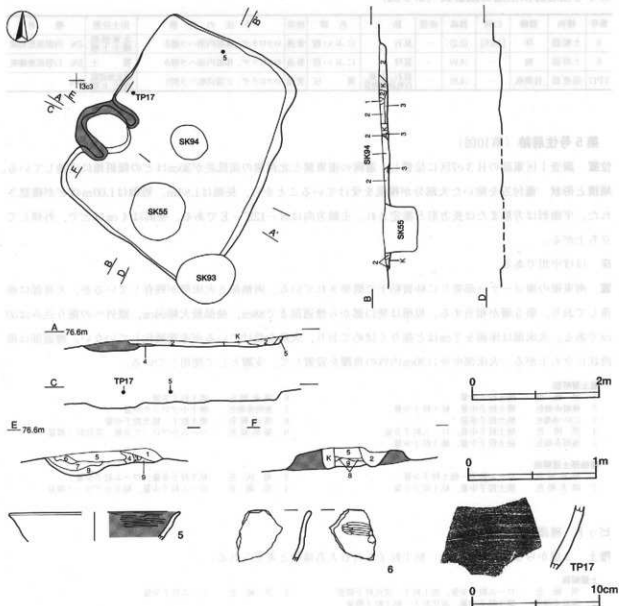
竈 北西壁の西コーナー部寄りに砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが、天井部は崩落しており、第5層が相当する。規模は焚口部から煙道部まで92cm、袖部最大幅100cm、壁外への掘り込みは24cmである。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受けているが赤変硬化していない。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	6 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・砂粒少量	7 暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂粒微量	8 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量
4 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・砂粒微量	9 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量、粘土粒子微量
5 褐色	砂粒多量、ローム粒子中量、焼土小ブロック・粘土粒子少量		

ピット 確認されていない。

覆土 5層からなる。暗褐色を基調として、ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と



第9図 第4号住居跡・出土遺物実測図

考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム小ブロック少量	5 暗褐色	ローム小ブロック中量
3 暗褐色	ローム中ブロック少量		

遺物出土状況 土師器片14点(坏7, 高台付坏1, 甕6), 須恵器片1点(長頸瓶), 礫2点, 炭化材が出土している。第9図5は北東壁際の覆土上層, TP17は竈北袖部島の覆土上層からそれぞれ出土している。出土した土師器坏は内面または外面に黒色処理とヘラ磨きが施され, 土師器甕は脆弱な状態である。また, TP17の長頸瓶は胎土中に白色針状物質を含むことから, 木葉下窯跡産の須恵器の可能性が高い。

所見 炭化材が出土しているが, 焼土塊や焼土痕は確認されていないことから, 埋め戻された時に廃棄されたもので, 焼失住居の可能性は低い。時期は, 出土土器及び遺構の重複関係から10世紀代と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	坏	[13.6]	(2.2)	-	長石	にぶい橙	普通	ロクロナア, 体部内面ヘラ磨き	北東壁際 覆土上層	5% 内面黒色処理
6	土師器	甕	-	(4.0)	-	雲母	にぶい橙	普通	ロクロナア, 体部内面ヘラ磨き	覆土	5% 口唇縁磨削
TP17	須恵器	長頸瓶	-	(4.9)	-	長石, 石英, 白色針状物質	黄 灰	普通	ロクロナア, 下面回転ヘラ磨り	竈北袖部島 覆土上層	5%

第5号住居跡(第10図)

位置 調査I区東部のH3e7区に位置し, 遺構の南東側と北西側の高低差が30cmほどの傾斜地に立地している。規模と形状 竈付近を除いた大部分が攪乱を受けていることから, 長軸は1.84m, 短軸は1.00mほどが確認された。平面形は方形または長方形と推定され, 主軸方向はN-122°-Eである。壁高は4cmほどで, 外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦である。

竈 南東壁の南コーナー部寄りに砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが, 天井部は崩落しており, 第5層が相当する。規模は焚口部から煙道部まで88cm, 袖部最大幅94cm, 壁外への掘り込みは50cmである。火床部は床面を2cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けているが赤変硬化していない。煙道部は階段状に立ち上がる。火床部中央に30cm内外の角礫を設置して, 支脚として使用している。

覆土層解説

1 黒褐色	焼土粒子少量	6 暗赤褐色	焼土粒子少量
2 暗暗赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子少量	7 暗暗赤褐色	焼土小ブロック中量
3 にぶい赤褐色	焼土粒子多量	8 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子中量
4 黒褐色	焼土粒子中量, ローム粒子少量	9 暗暗褐色	ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
5 暗暗赤褐色	粘土粒子中量, 焼土粒子少量		

竈袖部土層解説

1 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	3 黒 灰 色	粘土粒子多量, ローム粒子少量
2 暗赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子少量	4 黒 褐 色	ローム粒子少量, 粘土小ブロック微量

ピット 確認されていない。

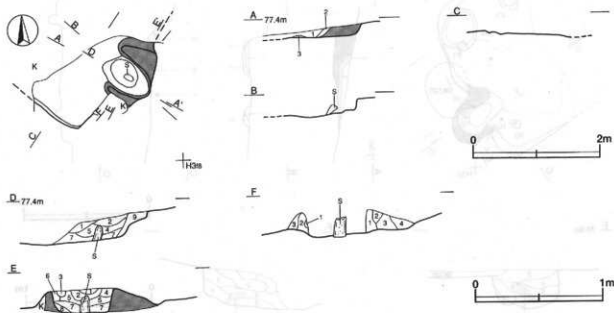
覆土 3層からなる。焼土粒子・粘土粒子を含む人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	3 黒褐色	ローム粒子少量
2 暗暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子・粘土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片3点(葉), 礫1点が出土しているが, 細片のため図示できなかった。

所見 出土土器及び遺構の形態から時期についての詳細は不明であるが、第1・3・6号住居跡とはほぼ同じ主軸方向で構築されていることから、10世紀後葉から11世紀前葉の可能性が高い。



第10図 第5号住居跡実測図

第6号住居跡 (第11図)

位置 調査I区中央部のH3II区に位置し、遺構の南東側と北西側の高低差が43cmほどの傾斜地に立地している。重複関係 竈の北側を第120号土坑に掘り込まれている。また、北西部は斜面のため残存していない。

規模と形状 長軸2.74m、短軸は1.61mほどが確認され、平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-123°-Eである。壁高は19~24cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 南東壁の南コーナー部寄りに砂質粘土で構築されている。北側袖部と火床部が残存しているが、南側袖部は欠失し、天井部は崩落している。規模は笑口部から煙道部まで92cm、袖部最大幅80cm、壁外への掘り込みは50cmである。火床部は床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受けているが赤変硬化していない。中央に30cm内外の角礫を設置して、支脚として使用している。煙道部は緩やかに外傾したのち、垂直に立ち上がる。また、両袖部にも角礫を埋め込み、芯材として使用している。

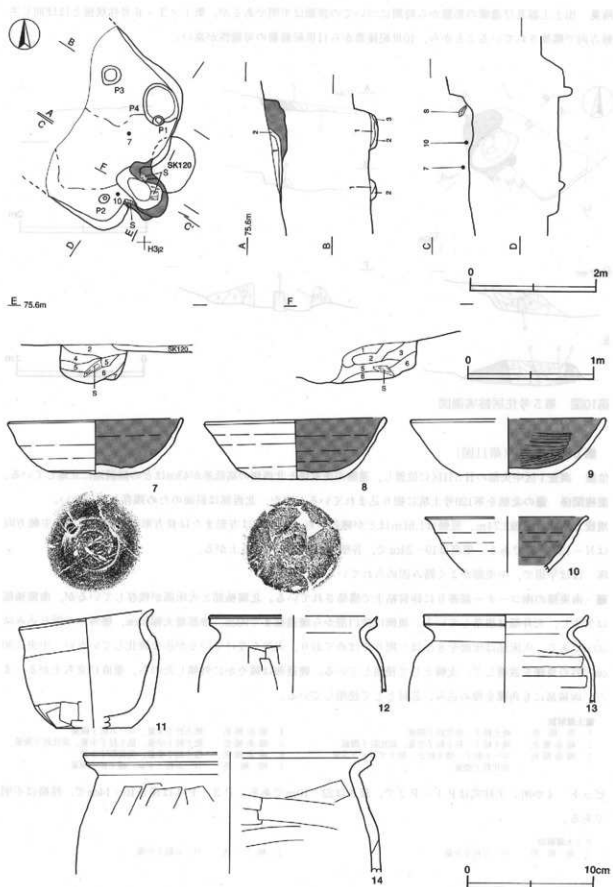
竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子少量 |
| | | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

ピット 4か所。主柱穴はP1・P2で、深さは22・10cmである。P3・P4は深さ10・14cmで、性格は不明である。

P3土層解説

- | | | | |
|-------|---------|------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 2 褐色 | ローム粒子中量 |
|-------|---------|------|---------|



第11图 第6号住居跡・出土遺物実測図

P4土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム小ブロック少量

- 3 褐色 ローム粒子多量

覆土 2層からなる。ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片69点（坏25、高台付坏1、甕43）、礫3点が甕付近を中心に出土している。第11図7は中央部東寄りの覆土中層、10は甕南袖部脇の覆土下層、11・14は甕内からそれぞれ出土している。出土した土器の多くは器面が剥落している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から10世紀後葉と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器様	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師器	坏	13.7	4.5	7.8	石英、重母、小礫	灰白	普通	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	中央部東寄り 覆土中層	80% 内面黒色処理 外面黒色 PL18
8	土師器	坏	14.5	4.9	7.2	石英、重母	橙	普通	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	覆土	70% 内面黒色処理 内・外面剥落 PL18
9	土師器	坏	[15.6]	4.5	[7.6]	石英、重母、赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロナデ、体部内面ヘラ磨き	覆土	30% 内面黒色処理 内面剥落
10	土師器	碗	[12.8]	(4.4)	-	長石、石英、重母、小礫	にぶい橙	普通	ロクロナデ、体部内面ヘラ磨き	甕南袖部脇 覆土下層	20% 内面黒色処理 内面剥落
11	土師器	小形甕	10.7	9.5	[6.4]	長石、石英、重母、小礫	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ磨り	甕内	70% 内・外面剥落 二次焼成 PL18
12	土師器	小形甕	[13.6]	(6.1)	-	長石、石英	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ磨り	覆土	10% 内・外面剥落
13	土師器	小形甕	13.1	(7.0)	-	長石、石英、重母、小礫	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ、体部内面ヘラ磨り	覆土	20% 係付者
14	土師器	甕	[23.2]	(9.7)	-	長石、石英、重母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ヘラナデ	甕内	30% 内面剥落 係付者

第7号住居跡（第12図）

位置 調査I区南部のI3a1区に位置し、遺構の南東側と北西側の高低差が40cmほどの傾斜地に立地している。
重複関係 第8号住居跡の甕を含む南東部を掘り込んでいる。また、北西部は斜面のため残存しておらず、耕作による攪乱を全面に受けている。

規模と形状 長軸3.34m、短軸は2.36mほどが確認され、平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-23°-Eである。壁高は21~30cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

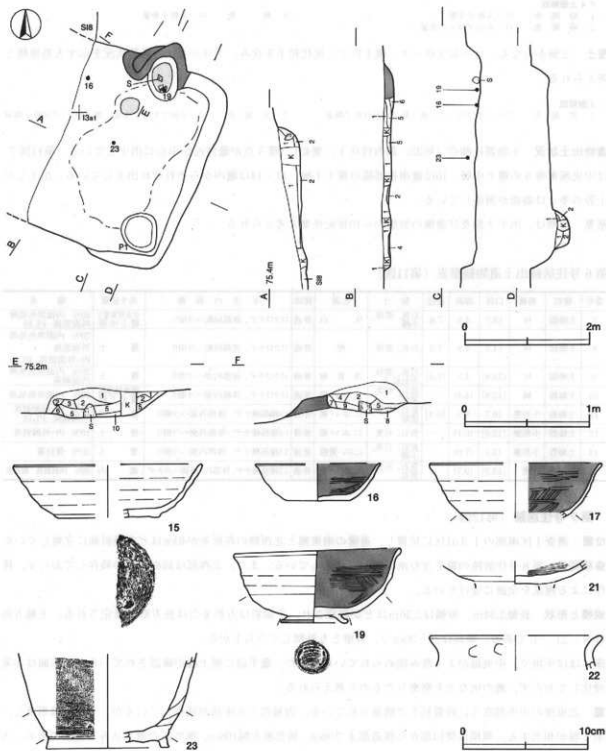
床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。また、甕手前に焼土塊が確認されているが、床面は赤変硬化しておらず、甕の灰などを廃棄したものと考えられる。

竈 北東壁の中央部寄りに砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが、天井部は崩落し、第2層が相当する。規模は突口部から煙道部まで96cm、袖部最大幅108cm、壁外への掘り込みは38cmである。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。中央に30cm内外の角礫を設置して、支脚として使用している。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2 灰黄褐色 粘土粒子多量
3 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色 粘土粒子少量
5 極暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量

- 6 黒褐色 ローム小ブロック微量
7 黒褐色 粘土粒子少量
8 極暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
9 黒褐色 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
10 極暗赤褐色 焼土小ブロック少量、炭化粒子微量



第12図 第7号住居跡・出土遺物実測図

ビット 1か所。P1は深さは22cmで、性格は不明である。

P1土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子中量

覆土 6層からなる。ロームブロックと粘土粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、住居廃絶時に埋め戻されたと思われる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4	極暗褐色	ローム粒子中量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量	5	黒褐色	粘土粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
3	褐色	ローム中ブロック微量	6	褐色	ローム中ブロック・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片208点(坏81, 高台付碗5, 甕122), 須恵器片1点(長頸瓶), 灰釉陶器片1点(椀), 鉄滓1点, 多量の礫が甕手前を中心に出土しており, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。第12回16は中央部北西寄りの床面直上, 17は竈内, 19は竈火床部の支脚の前から正位でそれぞれ出土している。中央部の覆土中層から出土した23は胎土中に白色針状物質を含むことから, 木葉下窯跡産の可能性が高く, 流れ込みと考えられる。土師器坏はほとんどが内面に黒色処理とヘラ磨きを施され, 口縁部が弱く外反するものである。また, 土師器甕は器面が剥離し, 脆弱な状態で出土している。さらに, 灰釉陶器の椀片は猿投窯産(黒徑90号式)のものである。多量の礫のうち拳大より大きいものは35点で, そのうち火熱を受けているものは16点, 半数近くが雲母片岩である。

所見 鉄滓が出土し, 焼土塊が確認されているが, 羽口や鍛造剥片などの遺物は確認されておらず, 鍛冶関連の遺構の可能性は少ない。また, 第8号住居跡の竈を破壊して構築されているが, それほど時期差はないと思われる。時期は, 出土土器及び遺構の形態から10世紀前葉と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表(第12回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	坏	[15.2]	4.3	[8.0]	石英, 雲母, 赤色粒子	灰黄褐	普通	ロクロナデ, 底部回転糸切り	覆土	50% 内・外黒色処理 内面剥離
16	土師器	坏	[10.2]	8.0	[5.2]	長石	にぶい褐	普通	ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き	中央部西側の 床直直上	20% 内面黒色処理
17	土師器	碗	[14.0]	(4.5)	-	長石, 雲母	にぶい褐	普通	ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き	竈内	5% 内面黒色処理
19	土師器	高台付碗	13.3	6.1	5.2	長石, 石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き	竈火床部	80% 内・外 内面黒色処理
21	土師器	高台付碗	-	(1.9)	-	石英, 雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き, 高台部貼付け	覆土	5%
22	土師器	小形甕	[13.8]	(2.8)	-	長石, 石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部内・外面ナデ	覆土	5%
23	須恵器	長頸瓶	-	(7.7)	[10.0]	長石, 白色針状物質	黄灰	普通	ロクロナデ, 体部下端回転ヘラ磨り	中央部 覆土中層	10%

第8号住居跡(第13回)

位置 調査I区南部のH2J0区に位置し, 遺構の東側と西側の高低差が40cmほどの傾斜地に立地している。

重複関係 第7号住居跡に竈を含む南東部を掘り込まれている。また, 北西部は斜面のため残存しておらず, 耕作による攪乱を全面に受けている。

規模と形状 長軸3.46m, 短軸は2.70mほどが確認され, 平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-94°-Eである。壁高は6~10cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 は平坦で, 中央部がよく踏み固められている。

竈 東壁の中央部寄りに砂質粘土で構築されている。火床部が残存しているが, 袖部は欠失し, 天井部は崩落している。規模は焚口部から煙道部まで86cm, 最大幅50cm, 壁外への掘り込みは48cmである。火床部は床面を7cmほど掘りくはめており, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。

甕土層解説

1	暗赤褐色	焼土小ブロック微量	3	極暗褐色	焼土小ブロック少量, 炭化粒子微量
2	暗赤褐色	焼土小ブロック少量	4	褐色	ローム粒子中量

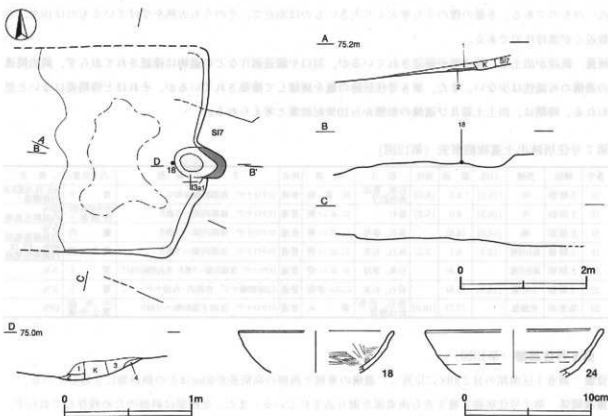
ピット 確認されていない。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片85点(坏42, 甕43), 礫4点が竈周辺を中心に出土している。第13図18は竈突口部, 24は竈内からそれぞれ出土している。出土している土師器坏は内面に黒色処理を施されているものが多い。また, 土師器甕は竈内から出土しており, 火熱を受けている。
 所見 第7号住居跡に掘り込まれているが, 時期差はあまりないと思われ, 出土土器及び遺構の形態から9世紀後葉と考えられる。



第13図 第8号住居跡・出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表(第13図)

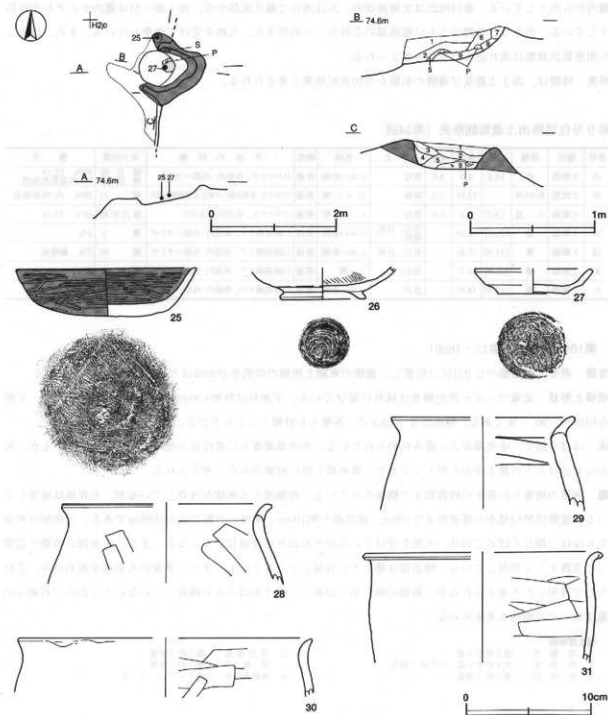
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	土師器	坏	[12.4]	G3.3	-	雲母	に深い赤褐色	普通	ロクロナデ, 体部内面へラ磨き	竈突口部	10%
24	土師器	坏	[14.2]	G3.8	-	石丸, 赤色粒子	淡黄緑	普通	ロクロナデ	竈内	10%

第9号住居跡(第14図)

位置 調査I区南部のH2J0区に位置し, 遺構の東側と西側の高低差が13cmほどの傾斜地に立地している。
 規模と形状 斜面に立地していることから竈付近を除いて残存しておらず, 平面形・規模ともに不明である。
 主軸方向はN-90°-Eである。壁高は6cmほどで, 外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、電手前がよく踏み固められている。

竈 東壁の中央部に砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが、天井部は崩落しており、第1・2層が相当する。規模は焚口部から煙道部まで108cm、袖部最大幅116cm、壁外への掘り込みは50cmである。火床部は床面を12cmほど掘りくぼめており、火熱を受けているがそれほど赤変硬化していない。また、中央には土師器小皿を逆位に設置し、支脚として使用している。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。また、北側袖部に角礫と土師器杯を逆位で埋め込み、芯材として使用している。



第14図 第9号住居跡・出土遺物実測図

甌土層解説

1	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量	6	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
2	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	7	黒褐色	焼土小ブロック少量
3	黒褐色	焼土小ブロック中量, 炭化粒子微量	8	黒褐色	焼土粒子少量, 粘土小ブロック微量
4	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9	赤褐色	焼土粒子多量
5	黒褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子微量			

ピット 確認されていない。

覆土 黒褐色土を基調としているが、ほとんど残存しておらず、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片48点(坏7, 高台付坏1, 小皿1, 甌38, 甌1), 須恵器片1点(長頸瓶), 礫2点が竈内から出土している。第14図25は北側袖部内, 27は逆位で竈火床部中央, 26・30・31は竈内からそれぞれ出土している。出土した角礫はともに竈袖部の芯材として利用され, 火熱を受けて赤変している。また, 出土した須恵器長頸瓶は流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器及び遺構の形態から10世紀後葉と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
25	土師器	坏	14.4	4.0	4.6	雲母	にぶい赤褐色	普通	ロクロナデ, 体部内・外面ヘラ磨き	竈北側袖部内	95% PL18 内・外面黒色処理
26	土師器	高台付坏	—	(2.6)	7.0	雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き, 底部回転糸切り	竈内	20% 内・外面剥落
27	土師器	小皿	[9.2]	2.0	5.6	雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ, 底部回転糸切り	竈火床部	60% PL18
28	土師器	甌	[16.0]	(6.5)	—	長石, 石英, 雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ, 体部内・外面ヘラナデ	覆土	5%
29	土師器	甌	[14.9]	(7.5)	—	長石, 石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ, 体部内・外面ヘラナデ	竈内	5% 輪積痕
30	土師器	甌	[23.8]	(4.7)	—	長石	褐色	普通	口縁部横ナデ, 体部内・外面ヘラナデ	竈内	5%
31	土師器	甌	[18.8]	(8.9)	—	長石	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ, 体部内・外面ヘラナデ	竈内	5%

第10号住居跡(第15・16図)

位置 調査I区北部のG3J1区に位置し, 遺構の東側と西側の高低差が20cmほどの傾斜地に立地している。

規模と形状 北東コーナー部が調査区域外に延びている。平面形は長軸4.84m, 短軸3.56mの長方形で, 主軸方向はN-90°-Wである。壁高は4~13cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほは平坦で, 中央部がよく踏み固められている。中央部東寄りに炭化材と焼土塊が確認されているが, 床から9cmほど上の覆土中から出土しており, 埋め戻し時に投棄されたと考えられる。

竈 西壁の南寄りに若干の砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが, 天井部は崩落している。規模は突口部から煙道部まで128cm, 袖部最大幅100cm, 壁外への掘り込みは88cmである。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けているがそれほど赤変硬化していない。また, 中央部に角礫を設置して支脚として利用している。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。また, 多量の大形礫を埋め込み, 芯材として使用したと考えられるが, 袖部の張り出しが短く, 粘土がほとんど残存していないことから, 石組みの竈であった可能性も考えられる。

甌土層解説

1	暗褐色	焼土粒子少量	4	暗赤褐色	焼土粒子少量
2	黒褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量	5	黒褐色	焼土粒子微量
3	暗褐色	焼土粒子微量	6	暗赤褐色	焼土小ブロック少量

ピット 確認されていない。

覆土 5層からなる。黒褐色土を基調とし、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積で、住居廃絶時に埋め戻されたと考えられる。

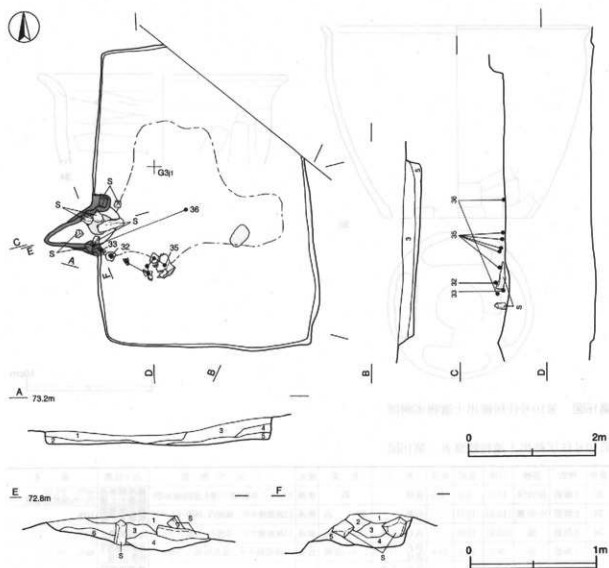
土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5 黒褐色	ローム粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量		

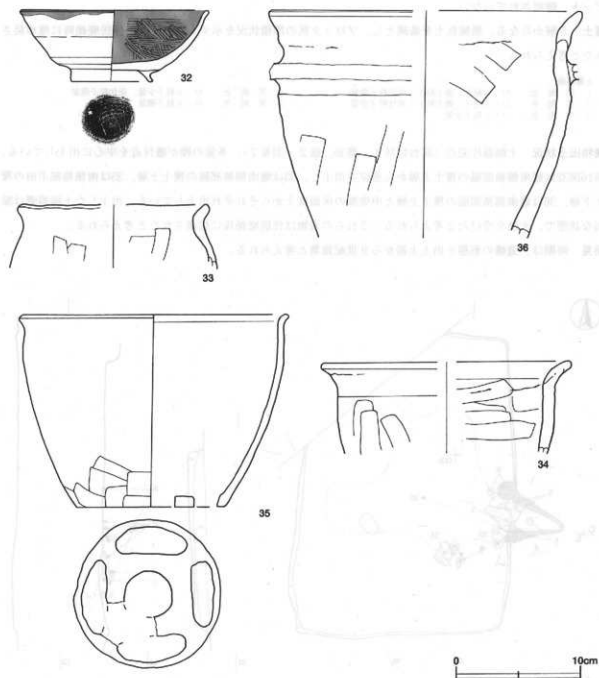
遺物出土状況 土師器片52点（高台付坏4，甕39，甌2，羽釜7），多量の糠が甕付近を中心に出土している。

第16図32は甕南側袖部脇の覆土上層から逆位で出土し，33は甕南側袖部脇の覆土下層，35は南側袖部手前の覆土下層，36は甕南側袖部脇の覆土上層と中央部の床面直上からそれぞれ出土している。出土した土師器甕は脆弱な状態で，火熱を受けたと考えられる。これらの遺物は住居廃絶後に投棄されたと考えられる。

所見 時期は，遺構の形態と出土土器から9世紀後半と考えられる。



第15図 第10号住居跡実測図



第16図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
32	土師器	高台付鉢	15.2	5.8	6.5	雲母	橙	普通	ロクロナデ、体部内面ヘラ懸し、底面緑釉未削	甕南縁部底 蓋覆土上層	90% PL19 内・外面黒色処理
33	土師器	小形甕 [15.2]	(5.2)	-	石英	褐 灰	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ヘラナデ	甕南縁部底 蓋覆土下層	10%	
34	土師器	甕 [26.0]	(9.8)	-	長石、石英、 雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ヘラナデ	甕南縁部底 蓋覆土上層	10%	
35	土師器	甕	28.3	20.9	15.8	長石、石英、 雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り	甕南縁部底 蓋覆土上層	80% PL18
36	土師器	羽釜 [25.0]	(18.5)	-	長石、石英、 雲母、赤色 粒子	橙	普通	体部外面横ナデ、一部ヘラナデ	甕南縁部底 覆土上層・ 中央部底面直上	20% PL18	

第11号住居跡 (第17図)

位置 調査Ⅳ区南西部のE 6 d2区に位置し、遺構の南東側と北西側の高低差が18cmほどの傾斜地に立地している。重複関係 北東部を第1号土壇墓にそれぞれ掘り込まれている。また、耕作による攪乱を全面に受けていることから、第124号土坑と重複しているかどうか不明である。

規模と形状 多数のトレンチャーによる攪乱と床がほとんど露出している状態で確認されたため、長軸は3.28m、短軸は3.20mほどの方形と推定される。主軸方向はN-111°-Eで、壁高は1cmほどである。

床 はほぼ平坦と推定される。

竈 南東壁の中央部に砂質粘土で構築されていたと推定される。両袖部の痕跡と赤変硬化した火床部が残存しているが、ほとんどは欠失している。規模は焚口部から煙道部まで66cm、袖部最大幅72cm、壁外への掘り込みは20cmと推定される。火床部は床面をほとんど掘りくぼめず、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部の立ち上がりは不明である。

ピット 1か所。P1は深さ50cmで、北西壁寄りの中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。

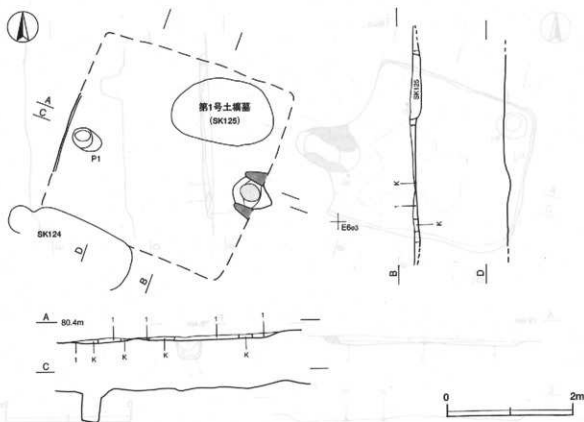
覆土 単一層で、ほとんど残存していないことから、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック少量

遺物出土状況 土師器片6点(坏4, 壺1)が出土している。細片のため図示することはできなかったが、出土した土師器坏はロクロ整形で、体部内面にヘラ磨きが施されている。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から9世紀から10世紀代と考えられる。



第17図 第11号住居跡実測図

第12号住居跡 (第18・19図)

(国訂準) 磁器土器 11種

位置 調査V区中央部のB6c9区に位置し、遺構の南側と北側の高低差が16cmほどの傾斜地に立地している。
規模と形状 平面形は長軸2.86m、短軸2.68mの方形で、主軸方向はN-73°-Eである。壁高は3~13cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 東壁の南東コーナー部寄りに砂質粘土で構築されている。両袖部の痕跡と火床部が残存しているが、天井部は崩落している。規模は突口部から煙道部まで106cm、袖部最大幅82cm、壁外への掘り込みは76cmである。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けているがほとんど赤変硬化していない。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。

ピット 1か所。P1は深さ32cmで、性格は不明である。

P1土層解説

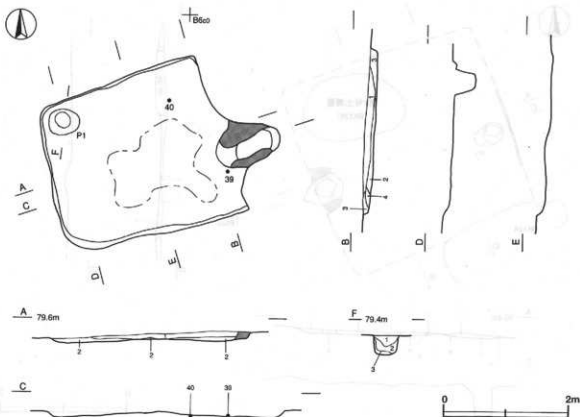
- | | | | |
|-------|------------|-------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 3 灰褐色 | ローム大ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | | |

覆土 4層からなる。ロームブロック・粘土粒子を含み、2層と4層の層位の逆転がみられることから、人為堆積と考えられ、住居廃絶後に埋め戻されたと思われる。

土層解説

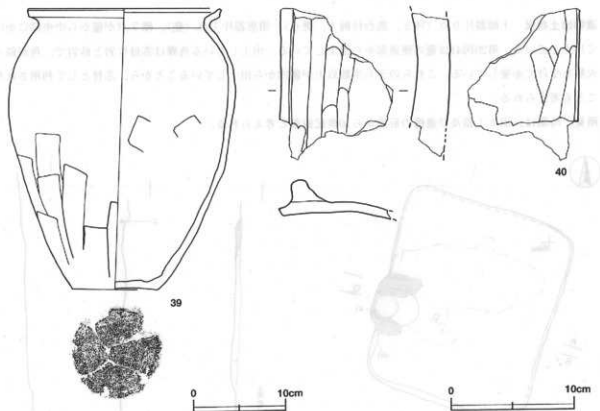
- | | | | |
|-------|-------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック少量 | 4 暗褐色 | 粘土粒子中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片18点(坏13, 高台付坏2, 甕1, 瓶1, 置籠1), 須恵器片1点(甕), 礫10点が出土している。第19図39は竈手前の床面直上, 40は北東コーナー部付近の床面直上からそれぞれ出土している。出土した土師器高台付坏は内面に黒色処理が施され、足高の高台部を持つものである。また、須恵器甕は埋め戻



第18図 第12号住居跡実測図

された時に流れ込んだものと考えられる。襖は火熱を受けて赤変していることから、竈との関連が窺える。
 所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から10世紀前葉と考えられる。



第19図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
39	土器	壺	21.0	30.7	9.2	長石、石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ヘラナデ、外側下縁ヘラ削り	竈手前 北面直上	95% PL19
40	土器	器	—	(12.5)	—	石英、赤褐色微粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面横ナデ、一部ヘラナデ	北面一部 床面直上	10% PL19

第13号住居跡 (第20図)

位置 調査V区中央部のB 6b0区に位置し、遺構の南側と北側の高低差が14cmほどの傾斜地に立地している。
 規模と形状 平面形は長軸3.30m、短軸2.80mの長方形で、主軸方向はN-72°-Eである。壁高は3~6cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。

竈 東壁の南東コーナー部寄りに砂質粘土で構築されている。両袖部の一部と火床部が残存しているが、袖部の先端は欠失し、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙道部まで74cm、袖部最大幅100cm、壁外への掘り込みは10cmである。火床部は床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、硬化していない。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

2 暗褐色 焼土中ブロック・ローム小ブロック少量

ピット 確認されていない。

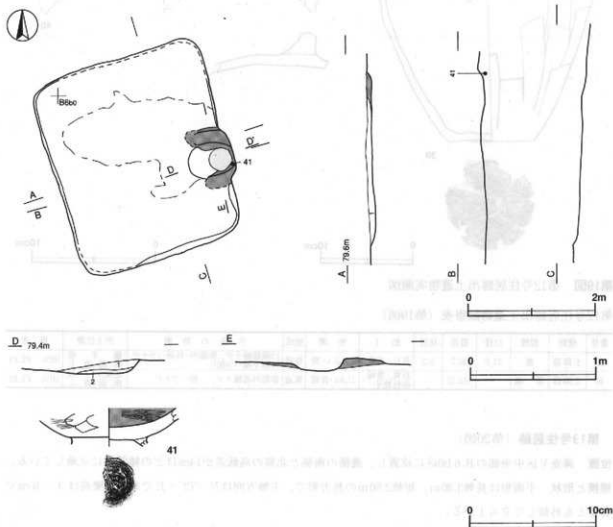
覆土 単一層で、覆土が浅いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片9点(坏2, 高台付碗1, 甕6), 須恵器片1点(甕), 礫7点が竈から中央部にかけて出土している。第20図41は竈の煙道部から出土している。出土している角礫は雲母片岩と砂岩で、角が鋭く、火熱を受けて赤変している。これらのうち半数以上が竈内から出土していることから、芯材として利用されたことも考えられる。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から10世紀前半と考えられる。



第20図 第13号住居跡・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表(第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の等級	出土位置	備考
41	土師器	高台付碗	-	(3.0)	-	石英、雲母	にがい赤褐色	普通	体部外面へつ削り様、内・外面へつ削り	竈煙道部	20% 内面黒色焼埋 底部外周割削[土]

第14号住居跡(第21・22図)

位置 調査V区中央部のB 6 a9区に位置し、遺構の南側と北側の高低差が24cmほどの傾斜地に立地している。

規模と形状 平面形は長軸2.77m、短軸2.66mの方形で、主軸方向はN-63'-Eである。壁高は5~27cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。床はほぼ平坦で、北西壁側と中央部から南東壁にかけての一部を除いて、よく踏み固められている。北東壁の東コーナー部寄りに砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが、天井部は崩落し、第3・4層が相当する。規模は焚口部から煙道部まで78cm、袖部最大幅84cm、壁外への掘り込みは42cmである。火床部は床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。火床部奥に設置された角礫は、火熱を受けて赤変していることから、支脚として使用したと考えられる。煙道部は外傾して立ち上がる。また、土層解説は第1~7層が竈の覆土、第8~15層が袖部の土層である。

竈・袖部土層解説

1 灰褐色	ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	9 灰褐色	焼土粒子・砂粒微量
2 褐色	ローム粒子少量、砂粒微量	10 褐色	ローム大ブロック微量
3 灰褐色	ローム小ブロック・砂粒少量	11 褐色	ローム中ブロック・砂粒少量、焼土粒子微量
4 暗褐色	粘土大ブロック・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量	12 褐色	ローム小ブロック・砂粒微量
5 暗褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・砂粒微量	13 暗褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・砂粒微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、砂粒微量	14 暗褐色	ローム中ブロック少量、砂粒微量
7 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂粒微量	15 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
8 灰褐色	砂粒中量、ローム粒子微量		

ピット 2か所。P1は深さ17cm、P2は深さ12cmで、性格は不明である。

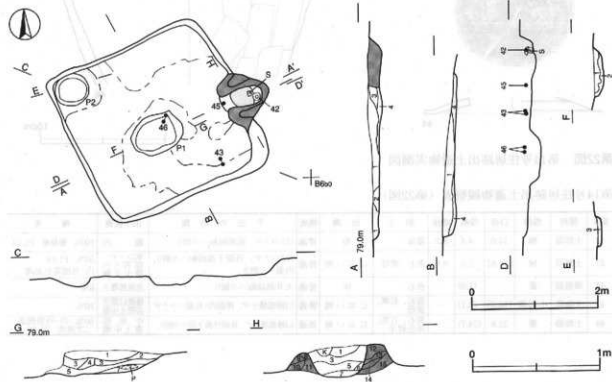
ピット土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック少量	3 暗褐色	ローム小ブロック少量
2 暗褐色	ローム中ブロック中量		

覆土 4層からなり、ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。住居廃絶後に意図的に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

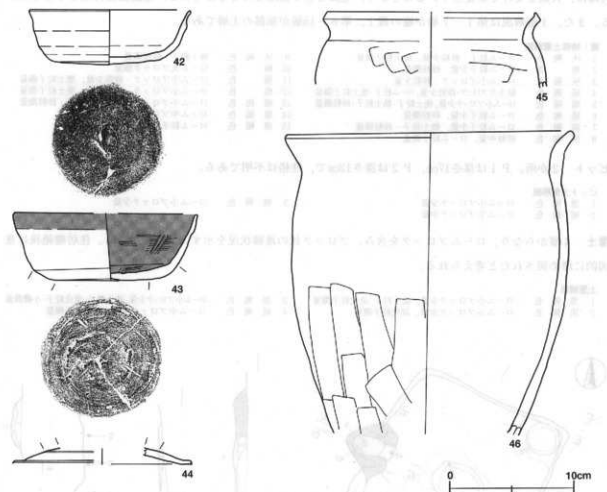
1 黒褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 黒褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・小礫微量
2 黒褐色	ローム小ブロック少量、炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム中ブロック中量、粘土粒子微量



第21図 第14号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片79点(坏8, 高台付坏3, 寛68), 須恵器片3点(坏2, 蓋1), 礫1点が中央部の覆土下層を中心に出土している。第22図42は竈内から逆位で出土し, 43は東コーナー寄りの覆土下層, 45は竈の焚口部手前の覆土中層, 46は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。竈の火床部奥に設置された角礫の上に逆位で置かれた42は, 二次焼成を受けていないことから, 支脚として使用された可能性より祭祀的な目的に使用された可能性が高く, 住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器及び遺構の形態から10世紀前葉と考えられる。



第22図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	土師器	碗	13.0	4.4	8.2	雲母	橙	普通	ロクロナデ, 底部回転ヘラ切り	竈内	100% 竈祭祀 PL19
43	土師器	碗	[14.6]	5.5	8.9	長石, 雲母	にぶい褐	普通	ロクロナデ, 外面下端回転ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	東コーナー寄りの覆土下層	50% PL19 内・外面黒色処理
44	須恵器	蓋	-	(1.0)	-	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	北東部覆土	5%
45	土師器	小形甕	[16.8]	(6.1)	-	長石, 石英, 雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ, 体部内・外面ヘラナデ	竈焚口部手前覆土中層	10%
46	土師器	壺	22.8	(24.7)	-	長石, 石英, 赤色鉄子	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面下位ヘラ削り	中央部覆土中層	50% 内・外面割落 二次焼成 PL19

第15号住居跡 (第23図)

位置 調査V区中央部のA 6J9区に位置し、遺構の南東側と北西側の高低差が20cmほどの傾斜地に立地している。

重複関係 西壁寄りを第168号土坑に掘り込まれている。また、第7号溝との新旧関係は不明である。

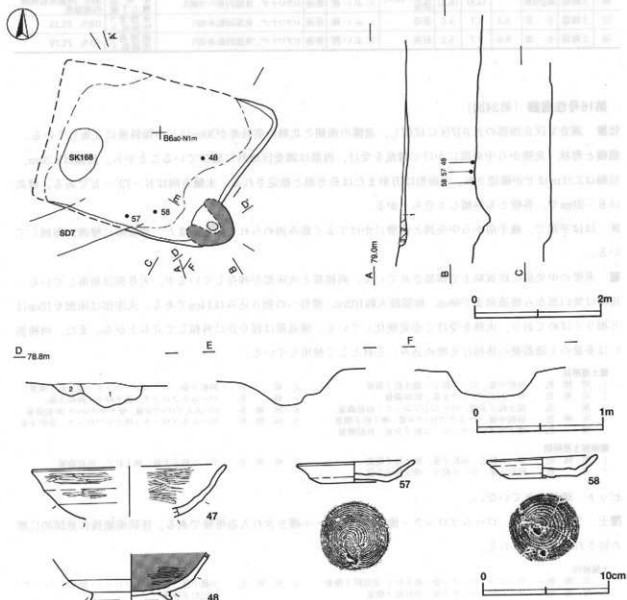
規模と形状 北壁と西壁付近は床の硬化面が露出していることから、長軸は3.40m、短軸2.47mほどが確認され、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-107°-Eである。壁高は9~12cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 南東コーナー部に砂質粘土で構築されている。火床部は残存しているが、袖部は欠失して粘土痕を残し、天井部は崩落している。竈の粘土材が脆弱な状態で散在していたことから、意図的に壊された可能性がある。規模は焚口部から煙道部まで70cm、袖部最大幅76cm、壁外への掘り込みは40cmである。火床部は床面を24cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部はほぼ垂直に立ち上がる。

竈土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック中量、ローム中ブロック・炭化粒子微量 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量



第23図 第15号住居跡・出土遺物実測図

ピット 確認されていない。

覆土 3層からなり、ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説			
1	黒褐色	ローム中ブロック・焼土中ブロック少量	3層褐色 ローム中ブロック少量
2	黒褐色	ローム大ブロック・焼土粒子微量	

遺物出土状況 土師器片15点(坏8, 高台付碗2, 小皿2, 甕3), 礫4点, 粘土塊が竈から中央部にかけて出土している。第23図48は中央部の覆土下層, 57は逆位, 58は正位で南壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。粘土塊は竈手前から多量に出土している。

所見 時期は, 出土土器及び遺構の形態から10世紀後葉と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
47	土師器	坏	[15.4]	(4.1)	—	雲母, 小礫	ぶい橙	普通	ロクロナデ, 体部内・外面へう磨き	覆土	10%
48	土師器	高台付碗	—	(3.8)	[6.2]	雲母, 石英, 雲母	ぶい橙	普通	ロクロナデ, 体部内面へう磨き	中央部 覆土下層	20% 内面黒色染理 内面潤滑
57	土師器	小皿	9.3	1.7	5.5	雲母	ぶい橙	普通	ロクロナデ, 底部回転未切り	南壁寄り 床面直上	100% PL19
58	土師器	小皿	8.6	1.7	5.2	石英	ぶい橙	普通	ロクロナデ, 底部回転未切り	南壁寄り 床面直上	80% PL19

第16号住居跡(第24図)

位置 調査V区北西部のA 6 J7区に位置し, 遺構の南側と北側の高低差が30cmほどの傾斜地に立地している。

規模と形状 北壁から中央部にかけて攪乱を受け, 西部は調査区域外に延びていることから, 長軸は3.20m, 短軸は2.21mほどが確認され, 平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-72°-Eである。壁高は6~21cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で, 竈手前から中央部と南壁にかけてよく踏み固められている。また, 南壁際に壁溝が周囲している。

竈 東壁の中央部に砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが, 天井部は崩落している。規模は笑口部から煙道部まで88cm, 袖部最大幅102cm, 壁外への掘り込みは14cmである。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。また, 両袖部には多量の土師器甕の体部片を埋め込み, 芯材として使用している。

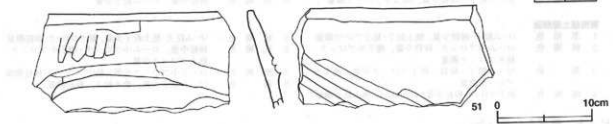
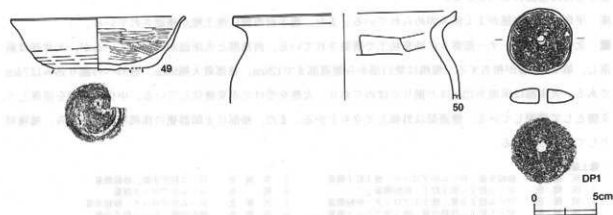
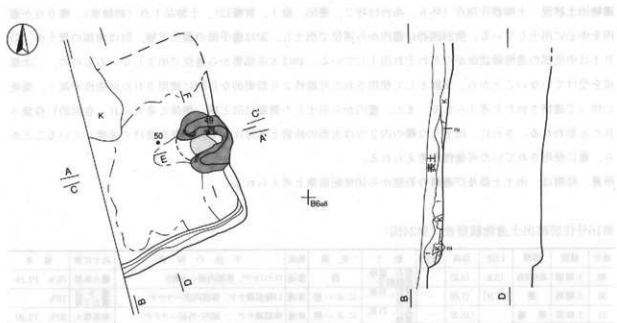
覆土層解説			
1	暗褐色	砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子微量	6 褐色 砂粒少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量
2	暗褐色	ローム小ブロック少量, 砂粒微量	7 褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
3	褐色	焼土粒子少量, ローム小ブロック・砂粒微量	8 灰褐色 ローム大ブロック少量, 焼土小ブロック・砂粒微量
4	灰褐色	砂粒中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量	9 灰褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック・砂粒少量
5	褐色	焼土中ブロック・ローム粒子少量, 砂粒微量	

竈袖部土層解説			
1	暗褐色	ローム粒子・砂粒少量, 焼土粒子微量	3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・砂粒微量
2	褐色	砂粒中量, ローム粒子少量	

ピット 確認されていない。

覆土 3層からなり, ロームブロック・焼土ブロック・小礫を含む人為堆積である。住居廃絶後に意図的に埋め戻されたと考えられる。

土層解説			
1	黒褐色	ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	3 黒褐色 小礫中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム中ブロック少量・炭化粒子微量	



第24図 第16号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片78点(坏8, 高台付坏2, 甕55, 甌1, 置甕12), 土製品1点(紡錘車), 礫9点が竈内を中心に出土している。第24図49は竈内から逆位で出土し, 50は竈手前の覆土下層, 51は南部の覆土中, D P 1は中央部の遺構確認面からそれぞれ出土している。49は火床部奥から逆位で出土しているもの、二次焼成を受けていないことから、支脚として使用された可能性より祭祀的な目的に使用された可能性が高く、廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。また、竈内から出土した置甕は51と同一個体と考えられ、意図的に投棄されたと思われる。さらに、出土した礫の内2つは大形の砂岩と雲母片岩で、火熱を受けて赤変していることから、竈に使用されていた可能性が考えられる。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から10世紀前葉と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
49	土師器	高台付甕	13.8	(4.2)	—	長石、磁石、赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ、体部内面へツ磨き	竈火床部	75% PL19
50	土師器	甕	[17.9]	(7.0)	—	長石、石英、磁石	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部内面へツナデ	竈手前覆土下層	10%
51	土師器	甕	—	(10.2)	—	長石、石英、磁石	にぶい橙	普通	体部横ナデ、一部内・外面へツナデ	南部覆土	30% PL20

番号	器種	上面径	下面径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	紡錘車	5.1	5.1	1.2	0.8	33.0	土製	ナデ	中央部遺構確認面	100% PL20

第17号住居跡(第25図)

位置 調査V区南部のB 6 e0区に位置し、丘陵台地上の緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 竈の北部を第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 竈と北壁・西壁の一部を除いて調査区域外に延びることから、長軸は1.60m, 短軸は0.92mほどが確認され、平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-15°-Wである。壁高は30~34cmで、各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部がよく踏み固められている。また、竈手前西側に焼土塊が確認されている。

竈 北壁の北西コーナー部奇りに砂質粘土で構築されている。両袖部と火床部が残存しているが、天井部は崩落し、第7・8層が相当する。規模は焚口部から煙道部まで128cm, 袖部最大幅96cm, 壁外への掘り込みは74cmである。火床部は床面を12cmほど掘りこぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。中央に角礫を設置し、支脚として使用している。煙道部は外傾して立ち上がる。また、袖部に土師器製の体部片を埋め込み、補強材として使用している。

竈土層解説

1	灰褐色	砂粒少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量	5	黒褐色	ローム粒子少量, 砂粒微量
2	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量	6	褐色	ローム小ブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土小ブロック・砂粒微量	7	灰褐色	ローム小ブロック・砂粒少量
4	暗褐色	ローム粒子・砂粒少量, 焼土中ブロック微量	8	暗褐色	砂粒中量, ローム粒子少量

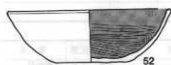
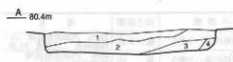
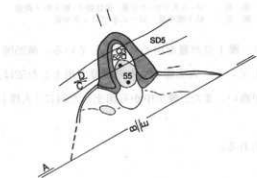
竈袖部土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・砂粒少量, 焼土粒子・粘土ブロック微量	5	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土ブロック・砂粒微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・砂粒少量, 焼土中ブロック・粘土ブロック微量	6	灰褐色	砂粒中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・粘土ブロック少量
3	褐色	ローム粒子・砂粒・粘土ブロック少量, 焼土小ブロック微量	7	暗褐色	ローム小ブロック少量, 粘土ブロック・砂粒微量
4	暗褐色	粘土ブロック・砂粒少量, ローム粒子・焼土粒子微量	8	褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・砂粒微量

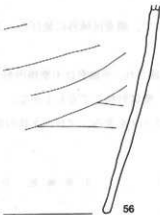
ビット 確認されていない。



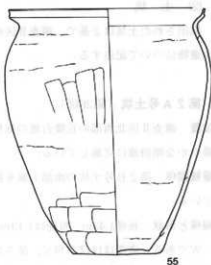
B7e1



54



56



55



第25图 第17号住居跡・出土遺物実測図

覆土 4層からなり、ロームブロック・粘土塊を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。住居廃絶後に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
 3 暗褐色 ローム大ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
 4 暗褐色 粘土塊中量、ローム小ブロック少量

遺物出土状況 土師器片38点(坏9, 高台付坏3, 甕25, 瓶1), 漆1点が甕を中心に出土している。第25図52・55・Q3は甕内の火床部, 53・56は甕内からそれぞれ出土している。火床部中央から逆位で出土した52は, 二次焼成を受けていることから, 支脚として使用された可能性が高い。また, 覆土中から出土した54に「大伴」の墨書が見られる。なお, Q3は観察表と写真のみ掲載した。

所見 時期は, 出土土器及び遺構の形態から9世紀後半と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
52	土師器	坏	12.8	4.2	6.0	石英, 雲母	にぶい褐色	普通	ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き	甕火床部	100% 内面黒色処理 内・外両面磨き 二次焼成 PL20
53	土師器	高台付坏	15.0	(4.9)	-	長石, 石英, 雲母	灰黄褐色	普通	ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き	甕内	80% 内面黒色処理 外周割厚 PL20
54	土師器	高台付坏	-	(2.8)	-	長石, 雲母	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ	覆土	10% 内面黒色処理 墨書「大伴」 PL20
55	土師器	甕	21.0	26.4	9.2	長石, 石英, 小雲母	淡黄褐色	普通	口縁部接子ナデ, 体部外面ヘラナデ, 支脚ヘラ磨き	甕火床部	80% PL20
56	土師器	瓶	-	(16.7)	(19.0)	石英, 雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外周ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	甕内	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	角礫	14.5	11.0	11.1	2310.0	砂岩	台形状, 上面は土器を乗せられるように凹状に加工	甕火床部	支脚転用 PL20のみ掲載

(2) 土坑

検出された土坑は2基で, 調査Ⅱ区の西北部で確認され, 時期は平安時代前期である。以下, 遺構と主な出土遺物について記述する。

第2A号土坑(第26図)

位置 調査Ⅱ区西北部の丘陵台地の裾付近, I2f4区に位置し, 遺構の南東側と北西側の高低差が10cmほどの緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2B号土坑の南部上面を掘り込んで, 調査区域外に延びる。また, 耕作による擾乱を全面に受けている。

規模と形状 長径1.43m, 短径は1.13mほど確認され, 平面形は不整形円形と推定される。長径方向はN-51°-Wである。底面はほぼ平坦で, 深さは34cm, 壁は外傾して立ち上がる。

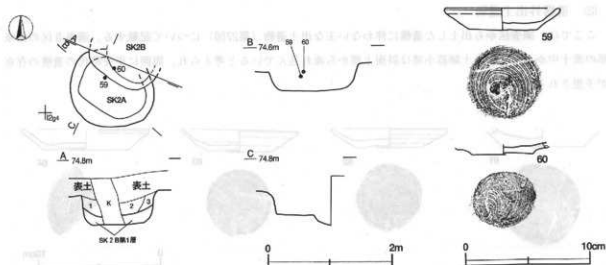
覆土 3層に分層される。炭化物とロームブロックを含み, ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ, 遺構廃絶時に埋め戻されたと思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化物微量
 2 黒褐色 ローム小ブロック中量, 炭化物少量
 3 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片24点(坏9, 高台付坏1, 小皿2, 甕12)が出土している。第26図59・60は中央部の覆土上層から中層にかけてそれぞれ出土している。出土した土師器坏と高台付坏は内面に黒色処理とヘラ磨きが施されている。

所見 時期は, 遺構の重複関係と出土遺物から10世紀後半と考えられる。



第26図 第2 A・2 B号土坑, 出土遺物実測図

第2 A号土坑出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	容積	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手続の特徴	出土位置	備考
59	土師器	小皿	9.2	2.0	5.6	黒母	にじい黄褐色	普通	ロクロナデ, 底部回転未切り	覆土中層	100% PL20 内・外面黒直
60	土師器	小皿	—	(0.9)	4.8	黒母, 赤色粒子	にじい橙	普通	ロクロナデ, 底部回転未切り	覆土上層	50%

第2 B号土坑 (第26図)

位置 調査Ⅱ区北西部の丘陵台地の裾付近, I 2 f4区に位置し, 遺構の南東側と北西側の高低差が10cmほどの緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2 A号土坑に南部上面を掘り込まれている。また, 北部は調査区域外に延び, 耕作による攪乱を全面に受けている。

規模と形状 長径1.20m, 短径は0.35mほど確認され, 平面形は不整楕円形と推定される。長径方向は不明である。底面はほぼ平坦で, 深さは48cm, 壁は外傾して立ち上がる。

覆土 単一層である。炭化物和ロームブロックを含む人為地積と考えられ, 遺構廃絶時に埋め戻されたと思われる。

土層解説

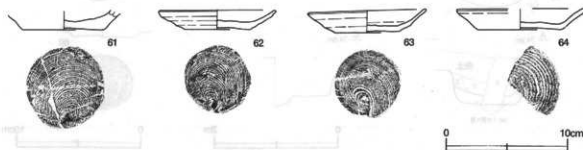
- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 須恵器片3点(壺)が出土している。出土した壺は体部片で, その内の2点は胎土中にガラス質の物質が高温で溶けた時にできる黒色の粒子を含むことから, 壺の内古窯跡産の須恵器の可能性が高い。また, 残る1点は胎土中に白色針状物質を含み, 2mm以上の長石を数点含むことから, 木葉下窯産と益子窯産の特徴を併せ持つが, 詳細は不明である。なお, これらの須恵器は第2 A号土坑の覆土中から出土したものであるが, 他の出土遺物と時代が一致しないことから, 本遺構が掘り込まれたのち, 第2 A号土坑が埋め戻された時に混入したと考え, 本跡に伴う遺物と判断した。

所見 時期は, 遺構の重複関係と出土遺物から9世紀後葉以前と考えられる。

③ 遺構外出土遺物

ここでは、調査区から出土した遺構に伴わない主な出土遺物(第27図)について記載する。調査Ⅱ区の南東部の表土中から出土した土師器小皿は斜面上部から流れ込んでいると考えられ、周囲に平安時代の遺構の存在が予想される。



第27図 遺構外出土遺物(平安時代)実測図

遺構外出土遺物(平安時代)観察表(第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
61	土師器	環	—	(1.6)	6.6	石灰、雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ、底部回転糸切り	I区表土	50%
62	土師器	小皿	9.5	1.6	5.4	雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ、底部回転糸切り	Ⅱ区表土	95% PL20
63	土師器	小皿	9.6	1.9	5.2	雲母	浅黄橙	普通	ロクロナデ、底部回転糸切り	Ⅱ区表土	90% PL20
64	土師器	小皿 [10.4]	1.7	[7.0]	長石、雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ、底部回転糸切り	Ⅱ区表土	30%	

3 中・近世の遺構と遺物

(1) 地下式墳

調査の結果、調査Ⅰ区とⅣ区から地下式墳5基が検出された。地下式墳は中世の溝によって区画された地区に構築され、墓壇の可能性がある土坑と隣接している。遺物はあまり出土していないが、土師質土器片(小皿、指鉢、内耳鍋)などが確認された。また、第1号地下式墳については、当初に井戸として調査したため、遺構番号にはSEの記号を用いている。

以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

第1号地下式墳(第28図)

位置 調査Ⅰ区北西部H3g1区の丘陵の裾付近に位置し、遺構確認面の北東側と南西側の高低差が38cmほどの傾斜地に立地している。鹿沼軽石層を掘り込んで構築されている。

竪坑 上面は長径1.20m、短径0.96m、底面は長径1.11m、短径0.85mのいずれも楕円形を呈し、主室南西側の西コーナー部寄りに構築され、主軸上に位置している。確認面からの深さは110cmで、主室の底面より22cm高く、底面は主室に向かって傾斜している。

主室 平面形の上面は長軸3.38m、短軸1.95m、底面は長軸2.90m、短軸1.79mのいずれも長方形を呈し、長軸方向はN-65°-Eである。主室の天井部は崩落している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは158cm、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 堅坑は6層、主室は10層に分層される。全体的に締まりがなく、鹿沼バミスが含まれ、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。主室部の第1～4層が天井部の崩落土に相当する。

堅坑土層解説

- | | |
|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック少量、鹿沼バミス微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・鹿沼バミス微量 |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック中量、鹿沼バミス少量 |

- | | |
|-------|--------------------|
| 4 黒褐色 | ローム中ブロック中量、鹿沼バミス微量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック中量、鹿沼バミス少量 |
| 6 黒褐色 | 鹿沼バミス少量、ローム小ブロック微量 |

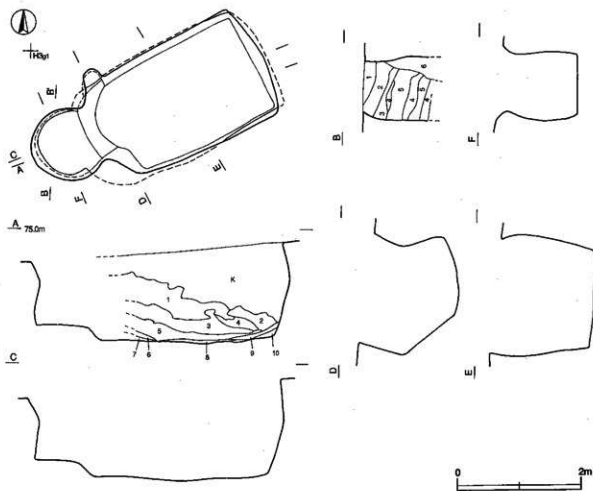
主室土層解説

- | | |
|--------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック・鹿沼バミス中量 |
| 3 明黄褐色 | 鹿沼バミス多量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック少量、鹿沼バミス微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 |

- | | |
|-------|------------|
| 6 褐色 | ローム粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 8 褐色 | ローム小ブロック微量 |
| 9 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 10 褐色 | ローム小ブロック微量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 当初、堅坑部分のみが確認されたため、井戸として調査を開始したところ、北側の擾乱部分の下から主室が検出された。性格については遺物が出土しておらず詳細は不明であるが、周囲に土墳墓と考えられる土坑と地下式横が位置して、墓域が形成されていると考えられることから、埋葬に関連する遺構と思われる。時期は、遺構の形態と隣接する第2号地下式横の時期から15世紀代の可能性が高い。



第28図 第1号地下式横実測図

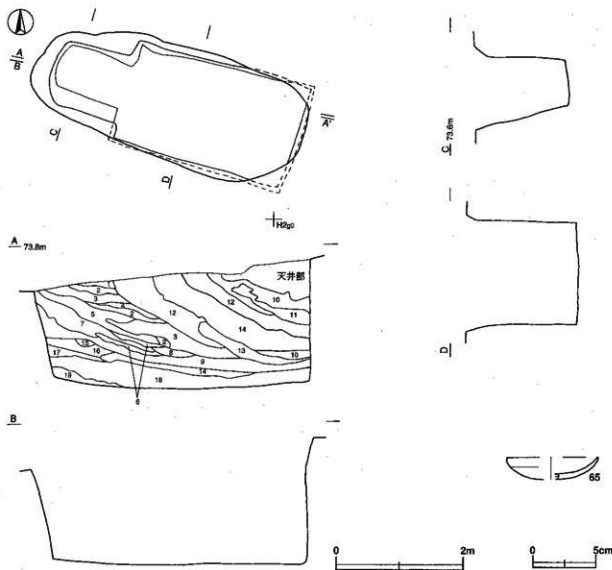
第2号地下式墳 (第29図)

位置 調査I区北西部H2f9区の丘陵の裾付近に位置し、遺構確認面の南東側と北西側の高低差が56cmほどの傾斜地に立地している。鹿沼軽石層を掘り込んで構築されている。

竪坑 上面は長径1.65m、短径1.49mの楕円形、底面は長軸1.09m、短軸0.73mの長方形を呈し、主室北西壁の中央部に構築され、主軸上に位置している。確認面からの深さは140cmで、主室の底面より12cm高く、底面は主室に向かって緩やかに傾斜している。

主室 平面形の上面は長径2.93m、短径1.85mの楕円形、底面は長軸2.92m、短軸1.74mの長方形を呈し、長軸方向はN-77°-Wである。主室の天井部は南東部の一部が残存しているが、他は崩落している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは177cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 19層に分層される。全体的に締まりがなく、鹿沼バミスが含まれ、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。第11・14層が天井部の崩落土で、主室中央には、竪坑閉塞時に埋め戻された土が流入して堆積している。



第29図 第2号地下式墳・出土遺物実測図

主室土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム中ブロック少量、粘土粒子微量
3	黒褐色	ローム小ブロック少量、鹿沼バミス・粘土粒子微量
4	暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム小ブロック少量
5	黒褐色	ローム小ブロック中量、鹿沼バミス少量
6	黒褐色	鹿沼バミス多量、ローム粒子微量
7	暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
8	にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量
9	暗褐色	ローム小ブロック中量、鹿沼バミス少量
10	黒褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量、粘土粒子微量

11	黒褐色	鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
12	黒褐色	ローム小ブロック・鹿沼バミス微量
13	にぶい褐色	鹿沼バミス少量
14	暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム小ブロック少量
15	黒褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
16	褐色	ローム小ブロック・鹿沼バミス少量
17	暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
18	褐色	鹿沼バミス微量
19	褐色	鹿沼バミス少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、鏝2点が出土している。第29図65は覆土下層から出土している。同じく覆土下層から出土した鏝には加工痕や被熱痕は確認できなかった。

所見 少数の遺物しか出土しておらず、性格についての詳細は不明であるが、一定間隔を置いて第1・3号地下式墳が隣接し、周囲が墓域として利用されていた可能性が高いことから、埋葬に関連する遺構と考えられる。時期は、出土遺物及び遺構の形態から15世紀代である。

第2号地下式墳出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	釉薬	出土位置	産地年代	備考
66	土師質土器	小皿	[7.2]	1.7	[2.4]	口縁部織ナデ、体部内面ナデ	砂粒	明赤褐色	-	覆土下層	15世紀	30%

第3号地下式墳(第30図)

位置 調査I区北西部H2c6区の丘陵の裾付近に位置し、遺構確認面の東側と西側の高低差が38cmほどの傾斜地に立地している。

重複関係 第116号土坑に南西コーナー部を掘り込まれている。また、第118号土坑との新旧関係は不明である。

竪坑 上面は長軸0.78m、短軸0.77mの不定形、底面は長径0.82m、短径0.67mの楕円形を呈し、主室南壁の南西コーナー部寄りに構築され、他の地下式墳とは異なり短軸上に位置している。確認面からの深さは82cmで、主室の底面より30cm高く、底面は主室に向かって緩やかに傾斜したのち、階段状に下がる。

主室 平面形の上面は長軸2.66m、短軸1.73mの不整形長方形、底面は長軸2.46m、短軸1.58mの長方形を呈し、長軸方向はN-17°-Eである。主室の天井部は完全に崩落している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは127cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 12層に分層される。全体的に締まりがなく、鹿沼バミス・粘土粒子が含まれ、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第5・7・8層が天井部の崩落土に相当する。竪坑閉塞時に流入した土は確認できなかった。

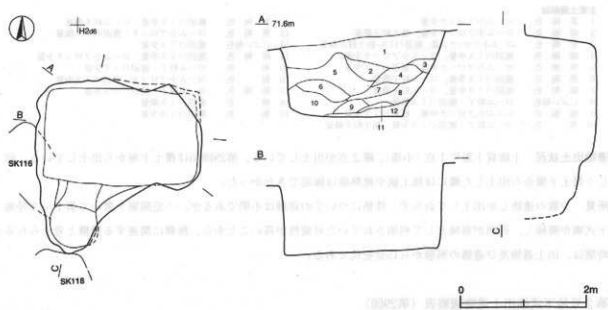
主室土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム中ブロック少量、粘土粒子微量
3	黒褐色	ローム小ブロック少量、鹿沼バミス・粘土粒子微量
4	暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム小ブロック少量
5	黒褐色	ローム小ブロック中量、鹿沼バミス少量
6	黒褐色	鹿沼バミス多量、ローム粒子微量

7	暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
8	にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量
9	暗褐色	ローム小ブロック中量、鹿沼バミス少量
10	黒褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量、粘土粒子微量
11	暗褐色	ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
12	黒褐色	粘土粒子中量

遺物出土状況 馬骨と鏝3点が出土している。馬骨は下顎の部分で、竪坑の覆土中層から出土している。

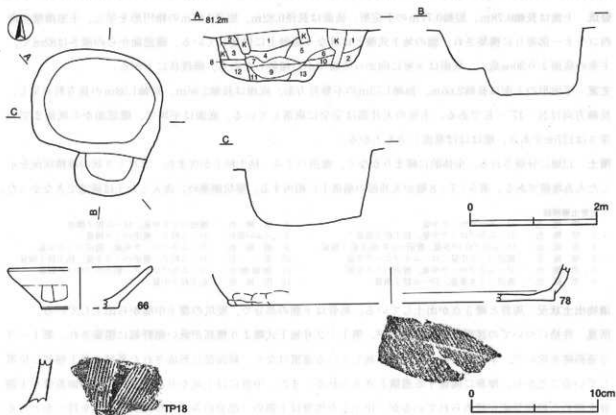
所見 性格についての詳細は不明であるが、第1・2号地下式墳より標高が低い裾野部に構築され、第1~3号道路跡を除いて、本跡より低い位置に立地している遺構はなく、斜面部に形成された墓域の最下層部に位置していることから、埋葬に関連する遺構と考えられる。また、中世には土坑や井戸などに牛馬の頭蓋骨や下顎骨を納める動物祭祀が認められているが、出土した馬骨は下顎の一部のみで、祭祀的な意味を持つかどうかは不明である。時期は、遺構の形態と第1・2号地下式墳の時期から15世紀代と思われる。



第30図 第3号地下式墳実測図

第4号地下式墳 (第31図)

位置 調査IV区中央部のE 6 a4区に位置し、遺構確認面の東側と西側の高低差が28cmの傾斜地に立地している。竪坑 上面は長径1.11m、短径0.64m、底面は長径0.77m、短径0.41mのいずれも楕円形を呈し、主室南壁の南東コーナー部寄りに構築され、他の地下式墳とは異なり短軸上に位置している。確認面からの深さは60cmで、



第31図 第4号地下式墳・出土遺物実測図

主室の底面より48cm高く、底面は主室に向かって急に傾斜している。

主室 平面形の上面は長径2.16m、短径1.77m、底面は長径1.78m、短径1.33mのいずれも楕円形を呈し、長径方向はN-0°である。主室の天井部は一部を残して崩落している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは104cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 13層に分層される。全体的に鹿沼パミスが含まれ、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第4・5・7層が天井部の崩落土に相当する。主室中央には、堅坑閉塞時に埋め戻された土が流入して堆積している。

土層解説

1 暗褐色	鹿沼パミス中量、ローム小ブロック少量	8 黒褐色	ローム小ブロック少量、鹿沼パミス微量
2 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	9 暗褐色	ローム中ブロック・鹿沼パミス少量
3 暗褐色	ローム小ブロック・鹿沼パミス少量	10 暗褐色	ローム小ブロック・砂粒少量
4 黒褐色	ローム粒子・砂粒少量	11 暗褐色	ローム中ブロック少量、鹿沼パミス微量
5 暗褐色	ローム大ブロック少量	12 暗褐色	ローム小ブロック・鹿沼パミス微量
6 暗褐色	ローム大ブロック中量	13 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
7 褐色	ローム小ブロック・砂粒少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師質土器片3点(小皿、播鉢、内耳鍋)、礫22点が出土している。第31図66・78・T P 18は主室の覆土中からそれぞれ出土している。多数出土した礫は、加工痕や被熱痕は確認されず、用途は不明である。

所見 少数の遺物しか出土しておらず、性格についての詳細は不明であるが、第5号地下式墳が隣接し、周囲が墓域として利用されていた可能性が高いことから、埋葬に関連する遺構と考えられる。時期は、出土遺物及び遺構の形態から16世紀代と考えられる。

第4号地下式墳出土遺物観察表(第31図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	釉薬	出土位置	産地年代	備考
66	土師質土器	小皿	[11.4]	3.3	[6.0]	クロナデ、体部外麗ナデ	灰石、雲母	明赤褐色	-	覆土	16世紀	20%
78	土師質土器	内耳鍋	-	(2.9)	(26.6)	体部外麗指頭取、底部守のこ状の仕度	灰石、石英、雲母	にじみ褐色	-	覆土	16世紀以降	5% 外面窪付着
T P 18	土師質土器	播鉢	-	(3.8)	-	縦方向に9本単位の溝目	灰石、石英、雲母	灰褐色	-	覆土	-	5%

第5号地下式墳(第32図)

位置 調査IV区中央部のD 63区に位置し、遺構確認面の南北側の高低差が24cmほどの傾斜地に立地している。堅坑 西側の半分が調査区域外に延びていることから、確認された上面は長軸1.31m、短軸0.40m、底面は長軸1.22m、短軸0.29mのいずれも長方形と推定される。主室北壁に構築され、主軸上に位置している。確認面からの深さは48cmで、主室の底面より36cm高く、底面は主室に向かって階段状に下がる。

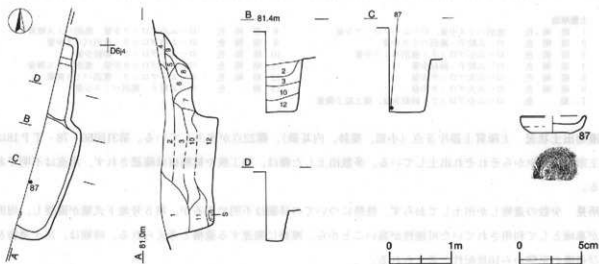
主室 確認された平面形の上面は長軸2.04m、短軸0.61m、底面は長軸1.75m、短軸0.55mのいずれも長方形と推定される。長軸方向はN-16°-Eである。主室の天井部は崩落している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは84cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 12層に分層される。全体的にロームブロックと鹿沼パミスが含まれ、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第11層が天井部の崩落土に相当する層と考えられる。堅坑閉塞時に主室に流入した土の堆積は確認していない。

土層解説

1 暗褐色	ローム中ブロック多量	7 暗褐色	ローム中ブロック中量、粘土大ブロック少量
2 黒褐色	ローム小ブロック少量、鹿沼パミス微量	8 暗褐色	ローム小ブロック・粘土大ブロック少量
3 黒褐色	ローム中ブロック・鹿沼パミス少量	9 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
4 暗褐色	ローム小ブロック・鹿沼パミス微量	10 黒褐色	ローム大ブロック・鹿沼パミス少量
5 褐色	ローム小ブロック少量	11 暗褐色	ローム小ブロック少量
6 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	12 暗褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、礫2点が出土している。第32図87は主室南部の覆土下層から出土している。覆土下層から出土した角礫は、加工痕や被熱痕は確認できず、用途は不明である。主室
 所見 少数の遺物しか出土しておらず、性格についての詳細は不明であるが、第4号地下式墳が隣接し、周囲
 が墓域として利用されていた可能性が高いことから、埋葬に関連する遺構と考えられる。時期は、出土遺物及
 び遺構の形態から16世紀から17世紀代と考えられる。



第32図 第5号地下式墳・出土遺物実測図

第5号地下式墳出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	釉薬	出土位置	産地年代	備考
87	土師質	小皿	[5.2]	1.4	3.3	ロクロナデ、底部回転糸切り	黄土	赤色粒子	焼	主室南側 覆土下層	16世紀 ~17世紀	60%

(2) 土壌墓

調査IV区の南西部から土壌墓1基が検出された。覆土はほとんど残存せず、人骨も出土していないが、出土
 遺物と周囲の遺構との関係から想定して、埋葬するために使われた土壌墓と判断した。

以下、遺構と出土遺物について記述する。

第1号土壌墓(第33図)

位置 調査IV区南西部のE6d2区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 第11号住居跡の北東部を掘り込んでいる。また、耕作による攪乱を全面に受けている。

規模と形状 多数のトレンチャーによる攪乱と床がほとんど露出している状態で確認されたが、長径1.60m、
 短径1.00mの楕円形と推定される。長軸方向はN-84°-Wである。底面はほぼ平坦で、深さは12cmである。攪
 乱によって一部でしか確認できなかったが、壁は緩やかに立ち上がる。

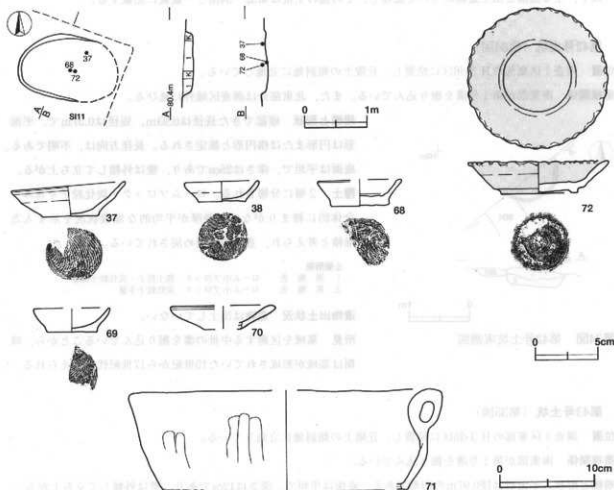
覆土 単一層で、遺物が投棄されていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム小ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片27点(小皿23, 搔鉢1, 内耳鍋3), 陶器1点(菊皿), 礫1点が出土している。第33図37は北部, 68・72は中央部の覆土下層からそれぞれ出土し, 他の小皿片の細片は中央部の西側から出土している。また, 正位で出土した72の菊皿は完形で, 瀬戸・美濃系のものである。

所見 陶器の菊皿や土師質土器の小皿などがまとめて出土し, 周囲は地下式墳や溝などが配置された墓域と考えられることから, 埋葬が行われた土壌墓と思われる。形態から屈葬と考えられるが, 棺を伴っていたかは不明である。時期は, 出土遺物から16世紀後半から17世紀前半と考えられる。



第33図 第1号土壌墓・出土遺物実測図

第1号土壌墓出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	釉薬	出土位置	産地年代	備考
37	土師質土器	小皿	9.0	2.8	4.4	ロクロナデ, 底部回転糸切り	長石, 石英, 雲母, 赤色粘土	にぶい橙	-	北 部 覆土下層	16世紀	80% PL21
38	土師質土器	小皿	5.8	1.7	3.8	ロクロナデ, 底部回転糸切り	長石, 雲母	橙	-	中央部西 覆土下層	16世紀?	95% PL21
68	土師質土器	小皿	[6.6]	2.1	[4.8]	ロクロナデ, 底部回転糸切り	長石, 雲母	にぶい橙	-	中央部 覆土下層	16世紀	35%
69	土師質土器	小皿	[6.0]	1.9	[4.0]	ロクロナデ, 底部回転糸切り	石英, 雲母, 赤色粘土	にぶい橙	-	中央部西 覆土下層	16世紀	30%
70	土師質土器	小皿	[8.0]	1.9	[2.9]	ロクロナデ	長石, 石英, 赤色粘土	にぶい橙	-	中央部西 覆土下層	17世紀	10%
71	土師質土器	内耳鍋	[33.4]	10.9	[26.0]	ロクロナデ, 体部外面ヘラナデ	長石, 石英, 雲母	にぶい赤黒	-	覆 土	17世紀後半	20% PL21 内・外面黒付着
72	陶 器	菊皿	10.2	2.6	6.0	見込み磨胎, 高台部刮り出し	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰ナリブ	中央部 覆土下層	16世紀 瀬戸・美濃系	100% PL21

(3) 土坑

検出された土坑のうち、出土遺物・遺構の形態・重複関係から、中・近世と判断した土坑は80基である。

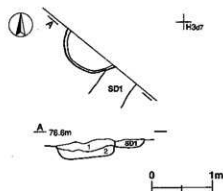
調査Ⅰ区では、丘陵の北西向き急斜面に、溝を南北に3条走らせて区画し、その区画内に地下式墳が3基と円形や楕円形の土坑が集中している。さらに、調査Ⅳ区では、中央部に位置する溝によって区画された範囲に第1号土墳墓と第4・5号地下式墳が位置し、これを中心に円形や方形の土坑が集中している。いずれも典型的な墓域を形成していると考えられ、土坑はほとんどが中世から近世にかけての土墳墓の可能性が高い。

以下、主な遺構と出土遺物について記述し、その他の土坑は第52～54図と一覽表に記載する。

第42号土坑（第34図）

位置 調査Ⅰ区東部のH3d6区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

重複関係 南東部が第1号溝を掘り込んでいる。また、北東部分は調査区域外に延びる。



第34図 第42号土坑実測図

規模と形状 確認できた長径は0.93m、短径は0.37mで、平面形は円形または楕円形と推定される。長径方向は、不明である。底面は平坦で、深さは25cmであり、壁は外傾して立ち上がる。覆土 2層に分層される。ロームブロック・炭化粒子を含み、全体的に締まりがない。層厚が平均的な堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 墓域を区画する中世の溝を掘り込んでいることから、時期は墓域が形成されていた15世紀から17世紀代と考えられる。

第43号土坑（第35図）

位置 調査Ⅰ区東部のH3d6区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

重複関係 南東部が第1号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は径0.97mの円形である。底面は平坦で、深さは12cmであり、壁は外傾して立ち上がる。

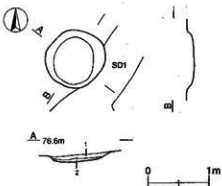
覆土 2層に分層される。層厚が平均的な堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------|------------|
| 1 黒色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒色 | ローム小ブロック少量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 径1mほどの円形で人為堆積であることから、性格は屈葬による土墳墓の可能性が高い。墓域を区画する中世以降の溝を掘り込んでいることから、時期は墓域が形成されていた15世紀から17世紀代と考えられる。



第35図 第43号土坑実測図

第53号土坑 (第36図)

位置 調査1区南東部のH313区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

重複関係 南東部が第1号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は径0.98mの円形である。底面は平坦で、深さは8cmであり、壁は緩やかに立ち上がる。

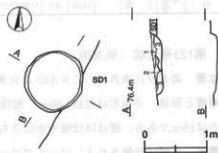
覆土 3層に分層される。ロームブロックを含み、全体的に締まりがない。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 3 | 褐色 | ローム中ブロック少量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 径1mほどの円形が人為堆積であることから、埋葬による土壌墓の可能性もある。また、墓域を区画する中世以降の溝を掘り込んでいることから、時期は墓域が形成されていた15世紀から17世紀代と考えられる。



第36図 第53号土坑実測図

第73号土坑 (第37図)

位置 調査1区中央部のH312区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

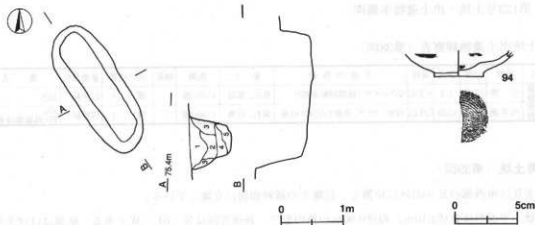
規模と形状 平面形は長径2.22m、短径0.84mの楕円形で、長径方向はN-35°-Wである。底面は平坦で、深さは67cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 5層に分層される。ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミスを含み、硬く締まっている。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 | 極暗褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子微量 | 5 | 極暗褐色 | 鹿沼バミス少量、焼土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)が出土している。第37図94は覆土中から出土し、油煙が付着していることから、灯明皿として利用されていたと思われる。



第37図 第73号土坑・出土遺物実測図

短径30cmの楕円形、深さ54cmで、埋葬施設の一部と考えられる。

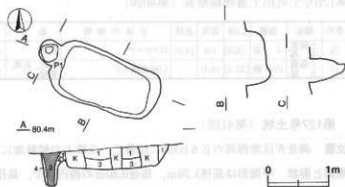
覆土 ビットの土層を含めて4層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。第2層は墓標の抜き取り痕と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム大ブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 3 | 褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 第1号土墳墓に隣接して、第123号土坑とはほぼ同軸であり、長径2mほどの楕円形で人為堆積であることから、土墳墓の可能性が高いが、棺を伴っていたかどうか不明である。確認されたビットは木製塔婆などの墓標として使用された可能性があり、時期は17世紀代と考えられる。



第39図 第124号土坑実測図

第126号土坑 (第40図)

位置 調査IV区南西部のE6c3区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

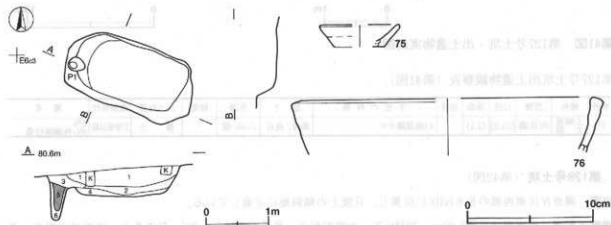
規模と形状 平面形は長径2.19m、短径1.04mの不整楕円形で、長径方向はN-58°-Wである。底面はほぼ平坦で、深さは27cmであり、壁は外傾して立ち上がる。北西端部にビットが1か所確認されている。ビットは長径28cm、短径22cmの楕円形、深さ72cmで、埋葬施設の一部と考えられる。

覆土 ビットの土層を含めて6層に分層される。ロームブロック・鹿沼パミスを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。第5層は墓標の抜き取り痕と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--------------------|---|-----|-----------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム中ブロック少量、鹿沼パミス微量 | 4 | 黒褐色 | 鹿沼パミス中量、ローム粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム小ブロック・鹿沼パミス少量 | 5 | 暗褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・鹿沼パミス少量 | 6 | 褐色 | ローム小ブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(小皿、内耳鍋)が出土している。第40図75・76は覆土中からそれぞれ出土している。



第40図 第126号土坑・出土遺物実測図

所見 第123・126号土坑と主軸差はほとんどなく、長径2mほどの楕円形で人為堆積であることから、土壌墓の可能性が高いが、棺を伴っていたかどうか不明である。確認されたピットは木製塔婆などの墓標として使用された可能性があり、時期は出土遺物から17世紀代と考えられる。

第126号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	釉薬	出土位置	産地年代	備考
75	土師器	小皿	[6.3]	1.8	[4.0]	ロクロナデ	黄母	に濃い橙	—	覆土	17世紀	20%
76	土師器	内耳鍋	[23.4]	(4.4)	—	口縁部横ナデ	長石、石英、黄母	に濃い橙	—	覆土	17世紀	5% 内・外器底付着

第127号土坑 (第41図)

位置 調査IV区南西部のE 6 b3区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

規模と形状 平面形は長径1.78m、短径0.80mの楕円形で、長径方向はN-58°-Wである。底面はほぼ平坦で、深さは23cmであり、壁は外傾して立ち上がる。

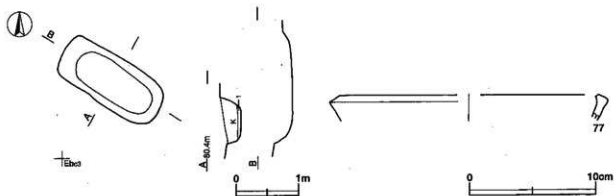
覆土 単一層である。上部を覆乱され、残存している覆土が少ないことから、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片2点(指鉢、内耳鍋)が出土している。第41図77が覆土中から出土している。

所見 第123・124・126号土坑と主軸差はほとんどなく、同じ形態である。性格は、長径2mほどの楕円形で人為堆積であることから、土壌墓の可能性が高いが、棺を伴っていたかどうか不明である。時期は出土遺物から17世紀代と考えられる。



第41図 第127号土坑・出土遺物実測図

第127号土坑出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	釉薬	出土位置	産地年代	備考
77	土師器	内耳鍋	[21.2]	(2.1)	—	口縁部横ナデ	黄母、長石	に濃い橙	—	覆土	17世紀以降	5% 内・外器底付着

第128号土坑 (第42図)

位置 調査IV区南西部のE 6 b3区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

規模と形状 平面形は長径1.89m、短径0.79mの楕円形で、長径方向はN-29°-Eである。底面は平坦で、深さは38cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

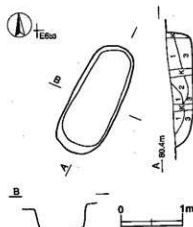
覆土 3層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | |
|---|-----|------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、礫3点が覆土中から出土している。出土した土師質土器小皿はロクロナデが施された、細片である。

所見 長径2mほどの楕円形で人為堆積であることから、土壌墓の可能性が高いが、棺を伴っていたかどうか不明である。時期は出土遺物から17世紀以降と考えられる。



第42図 第128号土坑実測図

第130号土坑 (第43図)

位置 調査Ⅳ区南西部のE 6 a3区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

規模と形状 平面形は長径1.14m、短径0.90mの楕円形で、長径方向はN-87°-Wである。底面は平坦で、深さは38cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

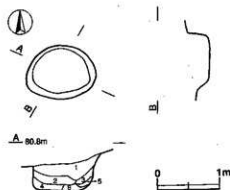
覆土 6層に分層される。ロームブロック・鹿沼バミスを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 4 | 暗褐色 | 鹿沼バミス少量、ローム粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 |
| 6 | 黄褐色 | 鹿沼バミス多量、ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)、礫2点が覆土中から出土している。出土した土師質土器内耳鍋は体部に横ナデが施された細片である。

所見 長径1mほどの楕円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌墓の可能性が高い。時期は出土遺物から17世紀以降と考えられる。



第43図 第130号土坑実測図

第132号土坑 (第44図)

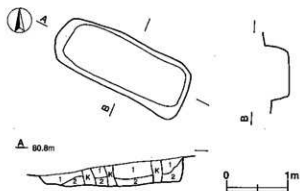
位置 調査Ⅳ区南西部のE 6 a4区に位置し、丘陵上の傾斜地に立地している。

規模と形状 平面形は長軸2.32m、短軸0.92mの不整形長方形で、長軸方向はN-64°-Wである。底面は平坦で、深さは36cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | |
|---|-----|------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム大ブロック中量 |



第44図 第132号土坑実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋)、鉄滓1点、燻2点が覆土中から出土している。出土した土師質土器内耳鍋はヘラナアが施された細片である。鉄滓は周囲に鍛冶関連の遺構が確認されていないが、流れ込んだものと考えられる。

所見 長軸2mほどの長方形で人為堆積であることから、土壌墓の可能性が高いが、棺を伴っていたかどうか不明である。時期は出土遺物から17世紀以降と考えられる。

第135号土坑 (第45図)

位置 調査Ⅳ区中央部のD6e8区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

規模と形状 平面形は径1.20mの円形である。底面は平坦で、深さは57cmであり、壁は垂直に立ち上がる。

覆土 4層に分層される。ロームブロック・鹿沼バミスを含み、層厚が平均的な堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

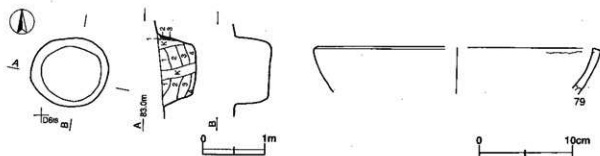
土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック少量
2 暗褐色 ローム小ブロック少量

3 黒褐色 ローム中ブロック少量
4 黒褐色 ローム大ブロック・鹿沼バミス少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋)が出土している。第45図79は覆土中から出土している。

所見 径1mほどの円形で人為堆積であることから、埋葬による土壌墓の可能性が高い。時期は出土遺物から16世紀代と考えられる。



第45図 第135号土坑・出土遺物実測図

第135号土坑出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	輪葉	出土位置	産地年代	備考
79	土師土器	内耳鍋	[30.0]	(5.0)	---	口縁部横ナア	長石、安母	煙	---	覆土	16世紀	5% 内・外面被付着

第138A号土坑 (第46図)

位置 調査Ⅳ区中央部のD6f4区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 北部が第138B号土坑と第4号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は径1.10mの円形である。底面は平坦で、深さは30cmであり、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み、層厚が平均的な堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説	
1 暗褐色	ローム中ブロック中量
2 暗褐色	ローム小ブロック少量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 径1mほどの円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌墓の可能性が高い。時期は墓城が形成されていた時期から16世紀から17世紀代の可能性が考えられる。

第138B号土坑 (第46図)

位置 調査N区中央部のD614区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 南部を第138A号土坑に掘り込まれ、東部は第4号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 西北部は調査区域外に延びることから、確認できた長径は0.73m、短径は0.56mほどで、平面形は円形または楕円形と推定され、長径方向は不明である。底面は平坦で、深さは28cmであり、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 単一層で、ロームブロックを含む人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説	
1 褐色	ローム小ブロック少量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 残存状態が悪く、性格は不明であるが、墓城の中心に位置しており、屈葬による土壌墓の可能性が高い。第4号溝を掘り込み、第138A号土坑に掘り込まれていることから、時期は16世紀から17世紀代と考えられる。

第141A号土坑 (第47図)

位置 調査N区中央部のD6h5区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 西部が第141B号土坑と第4号溝を掘り込んでいる。

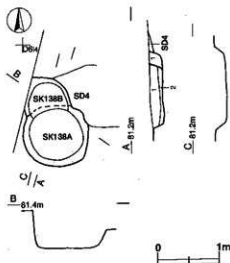
規模と形状 平面形は長径1.52m、短径1.32mの楕円形で、長径方向はN-14°-Eである。底面は平坦で、深さは78cmであり、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 3層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

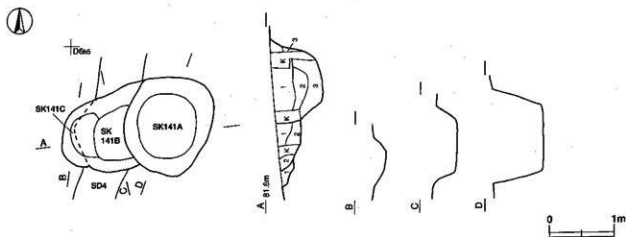
土層解説		3 黒褐色		ローム大ブロック少量	
1 暗褐色	ローム小ブロック微量				
2 暗褐色	ローム粒子少量				

遺物出土状況 瓦質土器片1点(火鉢)、陶器片1点(椀)、鉄滓1点、礫10点が覆土中から出土している。瓦質土器火鉢、陶器椀はともに細片である。鉄滓は周囲に鍛冶関連の遺構が確認されていないが、流れ込んだものと考えられる。

所見 長径1.5mほどの楕円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌墓の可能性が高い。椀を伴っていたかは不明である。時期は、重複関係と遺構の形態から17世紀以降の可能性が考えられる。



第46図 第138A・138B号土坑実測図



第47図 第141A～141C号土坑実測図

第141B号土坑（第47図）

位置 調査IV区中央部のD6h5区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 西部が第141C号土坑，中央部が第4号溝を掘り込んでいる。また，東部を第141A号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.18m，短径は0.70mほどが確認され，平面形は円形または楕円形で，長径方向はN-0°と推定される。底面は平坦で，深さは32cmであり，壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積と考えられ，意図的に埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量，焼土粒子・砂粒微量 2 暗褐色 ローム中ブロック少量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 径1mほどの円形または楕円形で人為堆積であることから，屈葬による土塚墓の可能性が高い。時期は重複関係と遺構の形態から16世紀から17世紀代の可能性が考えられる。

第141C号土坑（第47図）

位置 調査IV区中央部のD6h5区に位置し，丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 東部が第141B号土坑に掘り込まれている。また，第4号溝との新旧関係は不明である。

規模と形状 長径1.06m，短径は0.44mほどが確認され，平面形は円形または楕円形と推定される。長径方向は不明である。底面は平坦で，深さは17cmであり，壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 単一層で，ロームブロック・粘土粒子を含む人為堆積と考えられ，意図的に埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量，粘土粒子微量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 径1mほどの円形または楕円形で人為堆積であることから，屈葬による土塚墓の可能性が高い。時期は重複関係と遺構の形態から16世紀代の可能性が考えられる。

第152A号土坑（第48図）

位置 調査IV区中央部のD 6 h6区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 東部が第152B号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は径1.10mの円形である。底面は平坦で、深さは42cmであり、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み、層厚が平均的な堆積状況を示した人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

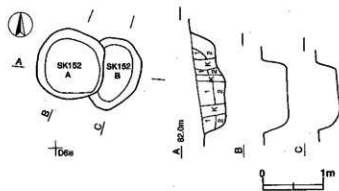
土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック少量

2 暗褐色 ローム小ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）、礫1点が覆土中から出土している。出土した土師質土器小皿はロクロナデ調整が施されており、細片である。

所見 径1mほどの円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌墓の可能性が高い。棺を伴っていたかは不明である。時期は、出土遺物と遺構の形態から17世紀以降の可能性が考えられる。



第48図 第152A・152B号土坑実測図

第152B号土坑（第48図）

位置 調査IV区中央部のD 6 h6区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 西部が第152A号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.17m、短径は0.73mほどが確認され、平面形は楕円形と推定される。長径方向はN-20°-Eである。底面は平坦で、深さは35cmであり、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック少量

2 暗褐色 ローム中ブロック少量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

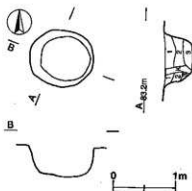
所見 長径1mほどの楕円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌墓の可能性が高い。時期は重複関係と遺構の形態から16世紀から17世紀代の可能性が考えられる。

第157号土坑（第49図）

位置 調査IV区中央部のD 6 c8区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

規模と形状 平面形は長径1.04m、短径0.90mの楕円形で、長径方向はN-73°-Wである。底面は平坦で、深さは46cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 3層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。



土層解説

- | | |
|-------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ローム大ブロック少量 |

遺物出土状況 陶器片1点(碗), 礫2点が覆土中から出土している。陶器碗は体部片で、鉄軸が施釉された細片である。

所見 長径1mほどの楕円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌塞の可能性が高い。棺を伴っていたかは不明である。時期は、出土遺物と遺構の形態から17世紀以降の可能性が考えられる。

第49図 第157号土坑実測図

第159A号土坑 (第50図)

位置 調査N区北東部のD6c8区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

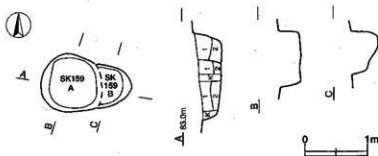
重複関係 東部が第159B号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は径0.94mの円形である。底面は平坦で、深さは32cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------|-------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム大ブロック中量 | 2 暗褐色 | ローム中ブロック多量 |
|-------|------------|-------|------------|

遺物出土状況 土師質土器片5点(内耳鍋), 鉄滓2点, 礫1点が覆土中から出土している。土師質土器内耳鍋は体部の細片で、外面にヘラナアが施されている。また、鉄滓は周囲に鍛冶関連の遺構が確認されていないことから、流れ込んだものと考えられる。



所見 径1mほどの円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌塞の可能性が高い。棺を伴っていたかは不明である。時期は、出土遺物と遺構の形態から17世紀代の可能性が考えられる。

第50図 第159A・159B号土坑実測図

第159B号土坑 (第50図)

位置 調査IV区中央部のD6c8区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

重複関係 西部が第159A号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.70m, 短径は0.47mほどが確認され、平面形は円形または楕円形と推定される。長径方向は不明である。底面は平坦で、深さは40cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み、層厚が平均的な堆積状況を示した人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム大ブロック少量 | 2 暗褐色 | ローム大ブロック中量 |
|-------|------------|-------|------------|

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 径1mほどの円形または楕円形で人為堆積であることから、屈葬による土壌墓の可能性が高い。時期は重複関係と遺構の形態から16世紀から17世紀代の可能性が考えられる。

第160号土坑 (第51図)

位置 調査Ⅳ区北東部のD6c8区に位置し、丘陵上の緩斜面部に立地している。

規模と形状 平面形は長径0.95m、短径0.85mの楕円形で、長径方向はN-17°-Eである。底面は平坦で、深さは28cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

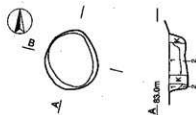
覆土 2層に分層される。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積と考えられ、意図的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム中ブロック少量 | 2 黒褐色 | ローム大ブロック少量、炭屑バミス微量 |
|-------|------------|-------|--------------------|

遺物出土状況 土師質土器片11点(小皿7, 内耳鍋2, 壺2), 鉄洋7点, 燧6点が出土している。土師質土器小皿は口縁部と体部の細片でロクロナア, 内耳鍋は体部の細片で外面にヘラナアが施されている。また, 鉄洋は周囲に鍛冶関連の遺構が確認されていないことから, 流れ込んだものと考えられる。

所見 性格は, 長径1mほどの楕円形で人為堆積であることから, 屈葬による土壌墓の可能性が高い。棺を伴っていたかは不明である。時期は, 出土遺物と遺構の形態から17世紀代の可能性が考えられる。



第51図 第160号土坑実測図

その他の中・近世の土坑 (第52~54図)

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量

第16号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量

第29号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック中量

第30号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量

第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第40号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量

第41号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量

第51号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

第54号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子多量, 硬く締まる

第55号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック微量

第58号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第62号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック少量

第63号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第64号土坑土層解説

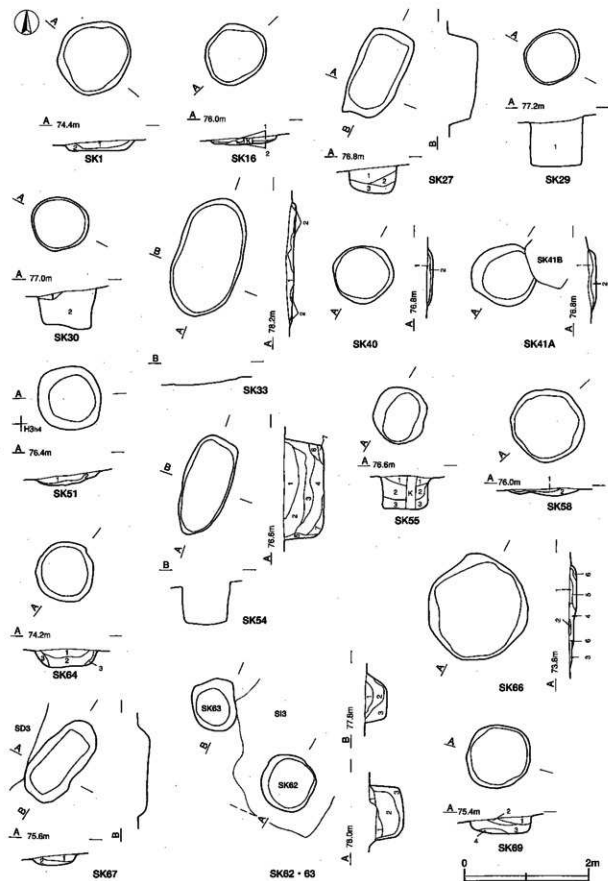
- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量

第66号土坑土層解説

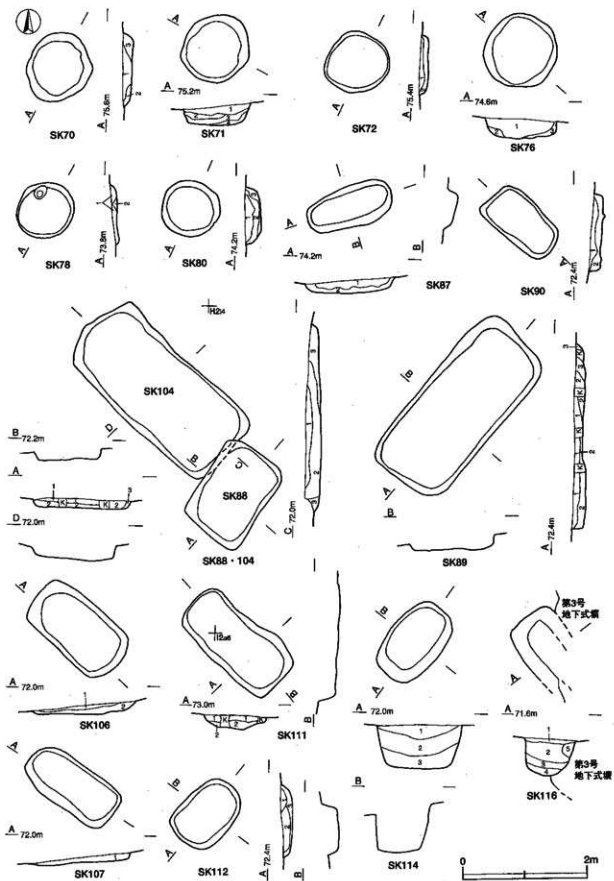
- 1 黒褐色 ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子多量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量

第67号土坑土層解説

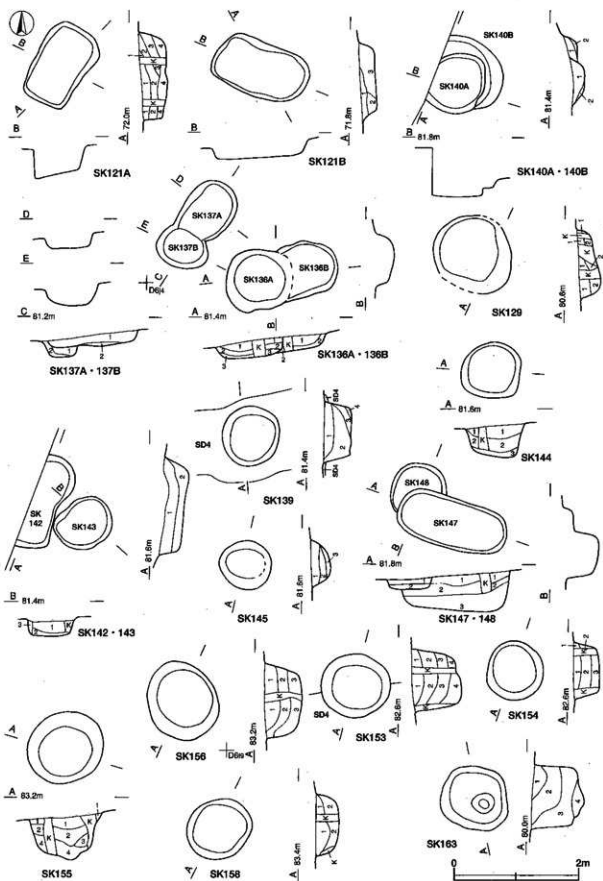
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量



第52図 その他の中・近世の土坑実測図(1)



第53図 その他の中・近世の土坑実測図(2)



第54図 その他の中・近世の土坑実測図③

第69号土壌土層解説

- 1 新暗褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第70号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 新暗褐色 ローム中ブロック中量

第71号土壌土層解説

- 1 灰褐色 ローム中ブロック少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック中量

第72号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量

第76号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量

第78号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭泥パミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第80号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭泥パミス少量
- 2 黒褐色 炭泥パミス中量, ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭泥パミス微量

第87号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

第88号土壌土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・炭泥パミス微量
- 2 黒褐色 炭泥パミス少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 炭泥パミス中量

第89号土壌土層解説

- 1 黒褐色 炭泥パミス中量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 炭泥パミス少量, 焼土粒子微量
- 3 黒褐色 炭化物・焼土粒子・炭泥パミス微量

第90号土壌土層解説

- 1 黒褐色 炭泥パミス少量
- 2 黒褐色 炭泥パミス微量

第104号土壌土層解説

- 1 黒褐色 炭泥パミス少量, 鉄分粒子微量
- 2 灰褐色 炭泥パミス中量, 鉄分粒子少量
- 3 黒褐色 炭泥パミス・鉄分粒子少量

第108号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量

第107号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭泥パミス少量, 炭化物微量

第111号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・炭泥パミス少量

第112号土壌土層解説

- 1 新褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 3 新褐色 ローム小ブロック少量

第114号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

第116号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム中ブロック少量, 炭泥パミス微量
- 3 暗褐色 粘土小ブロック少量
- 4 暗褐色 粘土中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子微量

第121A号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 新暗褐色 ローム小ブロック中量, 炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量

第121B号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

第129号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・炭泥パミス少量
- 2 暗褐色 炭泥パミス中量, ローム粒子少量

第136A号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量

第136B号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量

第137A号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量

第137B号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量

第139号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム大ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム大ブロック少量

第140A号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子・砂粒少量

第140B号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・砂粒少量

第142号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量

第143号土壌土層解説

- 1 灰褐色 ローム中ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第144号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第145号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

第147号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第148号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第153号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック中量, 炭泥パミス少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・炭泥パミス少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・炭泥パミス少量

第154号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック少量

第155号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・炭泥パミス少量

第156号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量

第158号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, 炭泥パミス微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・炭泥パミス少量

第163号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム大ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量

(4) 溝

当遺跡から検出された溝のうち、中・近世と考えられる溝は4条である。出土遺物はほとんどなく、時期判断は難しいが、地下式墳や墓塚の可能性のある土坑を囲むように巡っていることから、墓域を区画するために構築されたものと考えられ、時期は中世から近世にかけての遺構とした。

以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

第1号溝 (第55図)

位置 調査I区の北東部から南部のH3d6~I3d3区に位置し、遺構確認面の東部と西部の標高差が12cmほどの傾斜地に立地している。

重複関係 第2号住居跡の中央部を掘り込んでいる。また、第42・43・45・53・74・93号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 I3d3区から北東方向(N-28°-E)、7.0m地点から北西方向(N-44°-W)、15.0m地点から北東方向(N-42°-E)へ鍵状に延び、さらに調査区域外に至る。確認できた規模は、長さ48.20m、上幅0.48~1.70m、下幅0.20~1.31m、深さ20cmである。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形の一部皿状を呈する。

覆土 11層に分層される。全体的に暗褐色土を基調とし、ロームブロックを含む。北東部の一部でレンズ状の堆積状況を示す自然堆積であるが、おおむねブロック状の堆積状況を示す人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック少量	7 暗褐色	ローム小ブロック多量
2 暗褐色	ローム小ブロック中量	8 暗褐色	ローム中ブロック少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ローム中ブロック中量	9 暗褐色	ローム小ブロック少量
4 褐色	ローム大ブロック少量	10 褐色	ローム粒子多量
5 暗褐色	ローム中ブロック少量	11 暗褐色	ローム大ブロック少量
6 暗褐色	ローム大ブロック中量		

遺物出土状況 土師器片1点(壳)、陶器片1点(椀)が覆土中から出土している。土師器椀は平安時代、陶器椀は近代の細片で、遺構に伴うものではなく、流れ込んだものと考えられる。

所見 調査I区の北東部から南西部を横断し、第2・3号溝とほぼ並行して走る。円形・楕円形の土坑の集中区に位置していることから、墓域を区画するために構築された可能性が高い。時期は、遺構の配置状況及び重複関係から10世紀以降に構築され、15世紀から17世紀にかけて墓域として機能していたと考えられる。

第2号溝 (第55図)

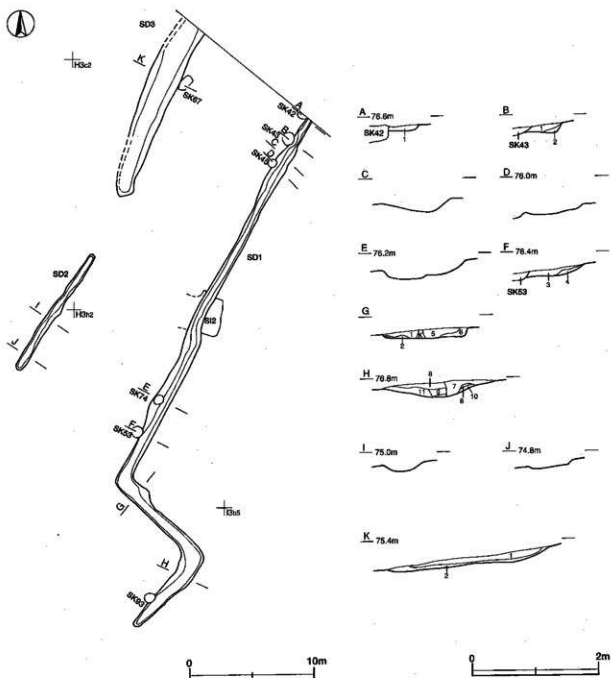
位置 調査I区の中央部のH210~H3f2区に位置し、遺構確認面の東部と西部の標高差が12cmほどの傾斜地に立地している。

規模と形状 H2j0区から北東方向(N-35°-E)へ直線的に延びている。規模は、長さ11.00m、上幅0.46~0.81m、下幅0.16~0.59m、深さ12cmである。壁はほぼ外傾しているが、一部緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形の一部皿状を呈する。

覆土 単一層で、全体的に暗褐色土を基調とし、ロームブロックを含む。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 瓦質土器片1点(火鉢)、礫1点が覆土中から出土している。瓦質土器火鉢は18世紀以降の細片で、遺構に伴うものではなく、流れ込んだものと考えられる。

所見 調査I区の中央部で第1号溝とほぼ並行して走る。第3号溝と近い方向に延びているが、幅の差が大きいことから1条の溝ではないと判断した。また、円形・楕円形の土坑の集中区に位置し、第1号地下式墳と隣接していることから、墓域を区画するために構築された可能性が高い。時期は、遺構の配置状況から、墓域が



第55図 第1～3号溝実測図

形成されていた15世紀から17世紀にかけて機能していたと考えられる。

第3号溝（第55図）

位置 調査Ⅰ区の中央部から北東部のH3 b3～H3 e3区に位置し、遺構確認面の東部と西部の標高差が36cmほどの傾斜地に立地している。

重複関係 第67号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 H3 e3区から北東方向（N-23°-E）へ直線的に延び、さらに調査区域外に至る。確認できた規模は長さ15.20m、上幅1.40～2.55m、下幅1.02～1.69m、深さ17cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は

皿状を呈する。

覆土 2層に分層される。全体的に黒褐色土を基調とし、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片14点(坏5,高台付坏1, 甕8), 土師質土器片1点(内耳鍋), 陶器片1点(甕), 粟4点が覆土中から出土している。土師器片は平安時代, 陶器片は18世紀以降で遺構に伴うものではなく、流れ込んだものと考えられる。土師質土器内耳鍋は体部にナデ調整が施された細片である。

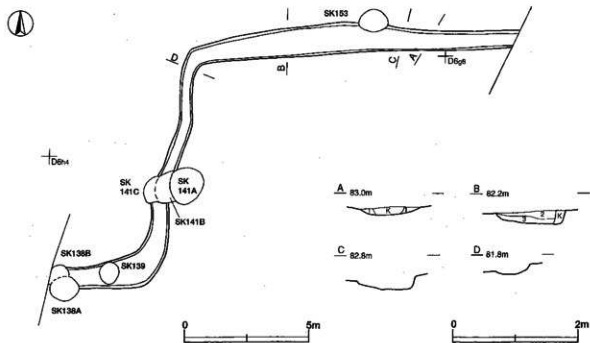
所見 調査I区の北東部に第1号溝とはほぼ並行して走る。第2号溝と近い方向で延びているが、幅の差が大きいことから1条の溝ではないと判断した。また、円形・楕円形の土坑の集中区に位置していることから、墓域を区画するために構築された可能性が高い。時期は、遺構の配置状況から、15世紀から17世紀にかけて墓域として機能していたと考えられる。

第4号溝 (第56図)

位置 調査IV区の中央部D 6 f8~D 6 f4区に位置し、遺構確認面の北東部と南西部の標高差が12cmほどの傾斜地に立地している。

重複関係 第138A・138B・139・141A・141B・153号土坑にそれぞれ掘り込まれている。また、第141C号土坑との新旧関係は不明である。

規模と形状 D 6 f4区から東方向(N-88°-E)、3.5m地点から北東方向(N-11°-E)、12.5m地点から東方向(N-88°-E)へ鍵状に延び、さらに調査区域外に至る。確認できた規模は、長さ25.5m、上幅0.50~1.20m、下幅0.35~1.00m、深さ10~21cmである。壁は外傾しているが、一部緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形の一部皿状を呈する。



第56図 第4号溝実測図

覆土 3層に分層される。全体的に暗褐色土を基調とし、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説			
1 暗褐色	ローム粒子少量	3 暗褐色	ローム中ブロック少量
2 暗褐色	ローム小ブロック少量		

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 調査Ⅳ区の中央部を東西に横断し、円形・楕円形の土坑の集中区に位置していることから、墓域を区画するために構築された可能性が高い。時期は、遺構の配置状況及び重複関係から16世紀から17世紀にかけて墓域として機能していたと考えられる。

(5) 道路跡

当遺跡から検出された道路跡は4条で、共に現在も県道や神社への参道として使用されている。特に、第1～3号道路跡は北から西方向へ向かう長さ約37mの道路跡で、現在の県道土浦笠岡線である。この道路跡は基本的に1条の道路であるが、3度作り替えられ、その位置も斜面部から平坦部に時期を追って移り変わっている。古代の官道跡にみられるような補修痕が確認されていないことから、補修しながら使用された道路ではなく、三期に渡って位置を変えながら作り替えられた道路と考えられ、第1～3号道路跡とした。

以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

第1号道路跡～第3号道路跡 (第57・58図)

位置 調査Ⅰ区の北部から西部のG2f7～H2d3区に位置し、遺構確認面の東部と西部の標高差が80cmほどの傾斜地に立地している。丘陵の裾部に当たり、低地に向かう埋没谷であることから、絡まりのない黒色土が厚く堆積しており、ロームの地山は確認できない。

重複関係 第3号道路跡が第2号道路跡を、第2号道路跡が第1号道路跡をそれぞれ掘り込んでいる。

第1号道路跡の規模と形状 H2d3区から北東方向(N-60°-E)、6.6m地点からやや北方向(N-35°-E)に向きを変えて直線的に延び、調査区域外へ至る。確認できた規模は、長さ36.6m、上幅1.86～4.92m、下幅1.46～4.52m、盛土の厚さは26～40cmである。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形で、一部皿状を呈する。

第2号道路跡の北東部中央から、長さ3.60m、上幅0.26～0.66m、下幅0.13～0.46mの側溝が確認されている。

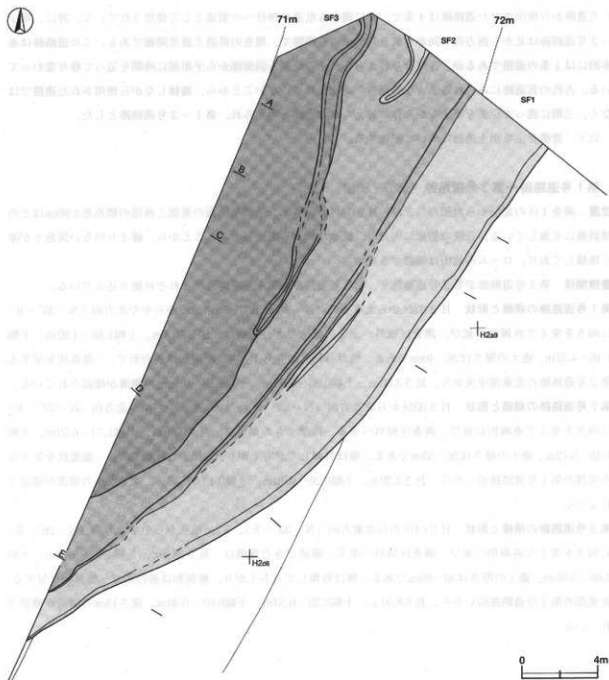
第2号道路跡の規模と形状 H2d3区から北東方向(N-45°-E)、8.3m地点からやや北方向(N-27°-E)に向きを変えて直線的に延び、調査区域外へ至る。確認できた規模は、長さ33.9m、上幅1.73～6.52m、下幅1.45～5.72m、盛土の厚さは26～53cmである。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形で、一部皿状を呈する。中央部の第1号道路跡沿いから、長さ3.30m、上幅0.26～0.40m、下幅0.13～0.26m、深さ20cmの側溝が確認されている。

第3号道路跡の規模と形状 H2c4区から北東方向(N-35°-E)、5.2m地点からやや北方向(N-26°-E)に向きを変えて直線的に延び、調査区域外へ至る。確認できた規模は、長さ28.6m、上幅4.92～5.19m、下幅2.66～5.05m、盛土の厚さは40～59cmである。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形で一部皿状を呈する。北東部の第2号道路跡沿いから、長さ8.91m、上幅0.20～0.53m、下幅0.07～0.40m、深さ13cmの側溝が確認されている。

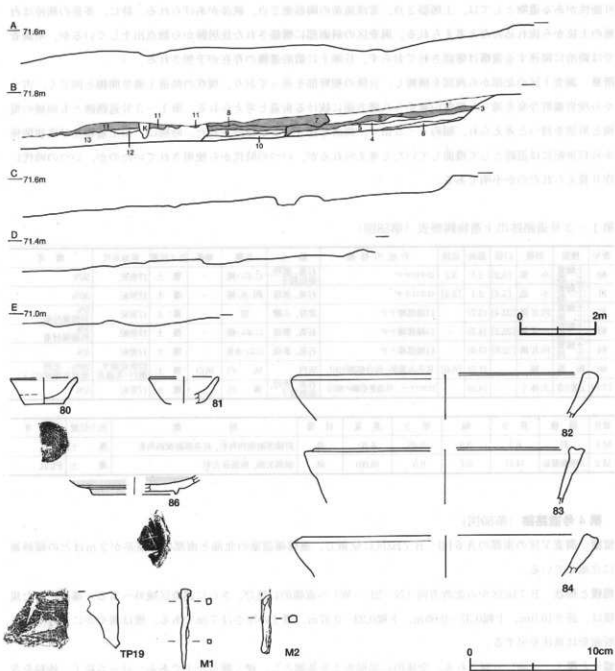
盛土と覆土 13層に分層される。全体的に黒褐色土を基調とし、締まりのある土である。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含み、地山に盛土をしてその上面を硬く踏み固めている。第1号道路跡の土層は第1～6層で硬化面は第2・3層、第2号道路跡の土層は第7～10層で硬化面は第7・8層、第3号道路跡の土層は第11～13層で硬化面は第11層である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	9	黒褐色	ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	黒褐色	ローム粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	11	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	12	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	13	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
7	極暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量			



第57図 第1～3号道路跡実測図



第58図 第1～3号道路跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片2点(坏1, 碗1), 土師質土器片10点(小皿2, 内耳鍋8), 瓦質土器片6点(火鉢?), 陶器片4点(碗1, 甕3), 磁器片1点(碗), 金属製品6点(鉄釘1, 不明鉄製品5), 鉄洋88点, 礫132点が第1～3号道路跡の覆土・盛土中から出土している。遺構は丘陵の裾野部分に位置しており, 斜面部から平安時代以降の遺物が流れ込んでいるため, 第1～3号道路跡に伴う遺物については一括して記述することにする。第58図80・81はロクロ整形・回転糸切りの小皿で17世紀代と考えられる。82～84は横ナデ・ロクロナデ整形の内耳鍋で, 器高が低くなる型式で17世紀から18世紀と考えられる。86は17世紀前半の瀬戸・美濃系志野の碗で, 高台部を削り出し, 底部は露胎している。底部外面に「×」の窯印がある。TP19は口縁内彎形の火鉢と思われる, 体部外面に菱形の鱗文が印刻されている。これらの遺物は多くが17世紀以降のものである。また, 流れ込んだ

可能性がある遺物としては、土師器2点、常滑窯産の陶器甕2点、鉄滓があげられる。特に、多量の鉄滓は台地の上位から流れ込んだと考えられる。調査区の斜面部に構築された住居跡から数点出土しているが、本調査では鍛冶に関連する遺構は確認されておらず、丘陵上に鍛冶遺構の存在が予想される。

所見 調査Ⅰ区の北部から西部を横断し、丘陵の裾野部を巡っており、現在の県道土浦笠間線と同じく、古くから現岩瀬町今泉を通り、板敷山麓から八郷方面に抜ける街道と考えられる。第1～3号道路跡とも同様の規模と形態を持つと考えられ、幅約4～5mで、側溝を伴うことが確認された。時期は、出土遺物及び重複関係から17世紀には道路として機能していたと考えられるが、いつの時代から使用されていたのか、いつの時代に作り替えられたのか不明である。

第1～3号道路跡出土遺物観察表(第58図)

番号	種類	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	輪藻	出土位置	築地年代	備考
80	土師器 小皿	[5.2]	2.1	3.2	ロクロナデ	石灰、雲母、赤色粒子	にぶい黒	—	覆土	17世紀	60%
81	土師器 小皿	[5.4]	2.1	[3.2]	ロクロナデ	石灰、雲母	明赤黒	—	覆土	17世紀	30%
82	土師器 内耳鍋	[23.4]	(3.7)	—	口縁部横ナデ	雲母、小礫	橙	—	覆土	17世紀	5% 外面僅付着
83	土師器 内耳鍋	[22.2]	(4.7)	—	口縁部横ナデ	石灰、雲母	にぶい橙	—	覆土	17世紀	5% 外面僅付着
84	土師器 内耳鍋	[22.8]	(3.4)	—	口縁部横ナデ	石灰、雲母	にぶい赤黒	—	覆土	17世紀	5%
86	陶器 椀	—	(1.5)	[6.6]	見込み露胎、高台部削り出し	灰白	灰白	灰白	覆土	17世紀前半 瀬戸・美濃系	20% 志野 底面外周露胎印[×]
TP19	瓦質土 火鉢?	—	(4.5)	—	ロクロナデ、外面菱形の露胎	石灰、雲母、赤色粒子	黄灰	—	覆土	17世紀	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	釘	6.5	0.9	0.45	6.20	鉄	釘頭部断面四角形、釘身部断面四角形	覆土	PL.21
M2	不明鉄製品	(4.7)	0.7	0.5	(6.00)	鉄	頭部欠損、断面長方形	覆土	PL.21

第4号道路跡(第59図)

位置 調査Ⅴ区の東部のA 6h0～B 7b2区に位置し、遺構確認面の北部と南部の標高差が2mほどの傾斜地に立地している。

規模と形状 B 7b2区から北西方向(N-21°-W)へ直線的に延び、さらに調査区域外へ至る。確認できた規模は、長さ16.0m、上幅0.37～0.69m、下幅0.23～0.47m、覆土の厚さは7cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。

盛土と覆土 2層に分層される。全体的に黒褐色土を基調とし、硬く締った土である。ローム粒子・砂粒を含み、上面を硬く踏み固められており、堆積状況は不明である。

土層観察

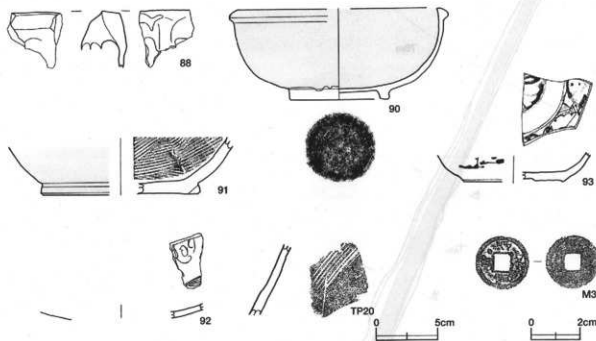
1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 2 黒褐色 砂粒少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 調査Ⅴ区を南北に縦断し、丘陵の尾根上に調査Ⅲ・Ⅳ区の脇を通りながら五所神社に至る。現在も参道として使用されている道路で、調査Ⅴ区の下に水戸線が開通するまでは旧笠間街道から直接続いていたと考えられる。五所神社の創立は明らかではないが、境内に天保15年(1844)に建立された「聖徳太子塔」があることから、19世紀半ばには参道として機能していたと考えられる。

(6) 遺構外出土遺物

ここでは、他の時代の遺構に混入していたり、表土中から採集された中・近世の主な遺物（第60図）を記載する。



第60図 遺構外出土遺物（中・近世）実測図

遺構外出土遺物（中・近世）観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	色調	施華	出土位置	産地年代	備考
88	土師器 土器	内耳環	—	(4.6)	—	横ナテ	長石、石英、 炭粒	にぶい紺	—	調査IV区 表土	—	5% 外面僅付着
90	陶器	碗	[17.0]	7.4	8.1	軸研毛塗り、高台部削り出し	灰白	橙	鉄 軸	調査IV区 表土	18世紀以降 綾子系	50% PL21 内面に5つトチン有
91	陶器	揉鉢	—	(4.6)	[12.4]	縦方向13本単位の櫛目	灰	灰 白	鉄 軸	調査IV区 表土	18世紀以降 綾子系	10% PL21
92	磁器	碗	—	(1.0)	—	象嵌	灰白	灰 白	灰ナテ	調査V区 表土	11世紀以降 瀬川系	10% PL21
93	磁器	皿	—	(2.3)	[8.2]	染め付け、内・外面草木文	灰白	灰 白	透明釉	調査I区 表土	18世紀以降 瀬川系	10% PL21
TP20	土師器 土器	揉鉢	—	(5.7)	—	縦方向9本単位の櫛目	長石、石英、 炭粒、赤色砂子	灰黄紺	—	調査IV区 表土	—	5% 外面僅付着

番号	銘名	径	厚さ	孔	重量	鑄造年代（鑄造年・西暦）、鑄造地	出土地点	備考
M3	寛永通宝	2.00	0.12	0.66	1.96	元禄10年(1697)～延享4年(1747)、明和4年(1767)～元明元年(1781)、日本	調査IV区 表土	新寛永、無背文、 鋳一支銭、四引

4 時期不明の遺構

出土遺物がないことや重複関係から時期と性格を判断できなかった掘立柱建物跡1棟、土坑94基、溝2条が調査されている。ここでは、掘立柱建物跡について記述し、土坑と溝については全体図と一覧表に記載する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第61図）

位置 調査I区南部のH3J4区に位置し、遺構確認面の南東側と北西側の高低差が30cmほどの傾斜地に立地している。

重複関係 第54号土坑と重複しているが、切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の御柱式の建物跡で、桁行方向N-31°-Eの南北棟である。規模は桁行5.90m、梁行1.70m、面積9.69㎡であり、柱間寸法は桁行2.95m、梁行1.65mをそれぞれ基調としている。

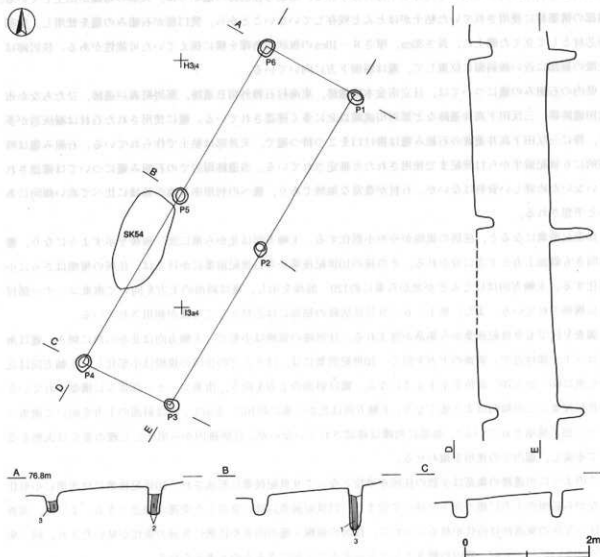
柱穴 柱穴は6か所(P1-P6)で、平面形が長径0.22~0.29m、短径0.20~0.27mの楕円形または円形である。断面形は逆台形状またはU字状を呈し、深さは28~70cmである。柱の抜き取り痕はP1・P2・P6で認められ、柱は径10cm内外と推定される。第1層は柱の抜き取り痕であり、第2~3層の層土はつき固められている。

土層解説(各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|---------|------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 柱穴の深さは不規則であるが、柱穴の規模と柱間寸法には規則性が認められる。性格と時期は不明であるが、本跡の桁行方向が隣接する第1号溝の主軸方向とはほぼ一致することから、同時期に墓域に關係する一連の施設として機能していた可能性も考えられる。



第61図 第1号掘立柱建物跡実測図

第4節 ま と め

今回の調査の結果、中山遺跡は平安時代の集落跡であり、中世から近世にかけては墓域であったことなどが確認できた。ここでは概要を述べて、まとめたい。

1 平安時代の集落変遷と特徴

今回の発掘調査では、平安時代の9世紀後葉から11世紀前葉にわたって集落が営まれていたことが判明した²⁾。住居跡はすべて斜面部に構築されて、竈を伴い、平面形は方形または長方形、面積は7.2㎡から18.6㎡までの小形の住居が中心である³⁾。全体的に覆土が薄く、遺物も住居跡によって出土量に差があるが全体的にそれほど多くはない。出土遺物はほとんどが土師器で、総数778点と全体の約93%を占める。また、多量の礫が出土しており、竈付近からの出土例が多い。これらは竈の芯材や支脚として使用されていたものがほとんどで、慣習的に住居建設の構築材として利用されていたものと考えられる。

以下、調査Ⅰ・Ⅴ区の16軒についてその変遷をたどってみたい。(第62図)

調査Ⅰ区では9世紀後葉から集落が営まれる。住居の規模は中形で、主軸方向は北から約90°東と西に傾き、竈の向きは斜面に対して大きく上方と下方に分かれる。第10号住居跡の竈からは、大形の角礫が出土している。袖部の構築材に使用されていた粘土がほとんど残存していないことから、焚口部が石組みの竈を使用し、袖部の芯材として立てた礫上に、長さ30cm、厚さ8～10cmの板状の角礫を横に据えていた可能性がある。住居跡は丘陵の裾部に近い緩斜面に位置して、竈は斜面下方に向いている。

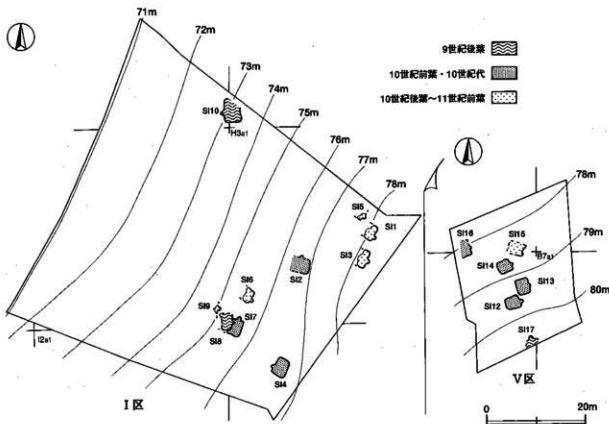
県内の石組みの竈については、日立市金木場遺跡、東海村石神外宿B遺跡、那珂町森戸遺跡、ひたちなか市武田遺跡群、三反田下高井遺跡など那珂川流域以北に多く確認されている。竈に使用された石材は凝灰岩が多く、特に三反田下高井遺跡の石組み竈は掛け口を2つ持つ竈で、天井部は粘土で作られている。石組み竈は定期的に6世紀前半から11世紀まで使用されたと推定されている。当遺跡周辺での石組み竈については確認されていないため詳しい資料はないが、石材が豊富な地域であり、竈への利用率も他の地域に比べて高い傾向にあると予想される。

10世紀前葉になると、住居の規模がやや小形化する。主軸方向は北から東に20°前後を示すようになり、竈の向きも斜面上方と下方に分かれる。その後の10世紀後葉から11世紀前葉にかけては、住居の規模はさらに小形化する。主軸方向はほとんどが北から東に約120°前後を示し、竈は斜面の上方を向いて南東コーナー部付近に構築されている。また、第1・6・9号住居跡の袖部には芯材として角礫が利用されている。

調査Ⅴ区でも9世紀後葉から集落が営まれる。住居跡の規模は小形で、主軸方向は北から西に傾き、竈は南東コーナー部付近で、斜面の下方を向く。10世紀前葉には、ほとんどの住居の規模は小形化し、主軸方向は北から東に60°から70°前後を示すようになる。竈は斜面の上方を向き、南東コーナー部寄りに構築されている。10世紀後葉にこの傾向はより強くなり、主軸方向は北から東に約107°を示し、竈は斜面の上方を向いて南東コーナー部に構築されている⁴⁾。袖部に角礫は確認されていないが、住居跡内から出土した礫の多くは火熱を受けて赤変し、竈内での使用を窺わせる。

このように当遺跡の集落は少数の住居が単位となって9世紀後葉に形成され、10世紀後葉には次第に小形化しながら斜面の上方に竈の向きを移して営まれ、11世紀前葉以降に衰退した変遷が確認できる。よって、調査Ⅰ区・Ⅴ区の集落跡は時代が移るにつれて、住居の規模・竈の向きや位置に共通の変化が見いだされ、同一集落ではないにしても同一郷内の動きとしてとらえることができるものと考えられる。

今後の発掘調査によって、周辺遺跡の資料が増加し、より詳細な学術的検討がなされることを期待したい。



第62図 中山遺跡の集落変遷

2 中・近世の墓域の特徴

調査 I・IV・V区に確認された墓域の可能性が高い円形や楕円形の土坑は、全部で80基である。これらの土坑の多くは、丘陵上の斜面を中心に、区画溝と地下式墳に隣接し、これらの周辺からは常滑窯産の甕や土師質土器の小皿が出土している。笹生衛氏によれば、東国においては14世紀から15世紀にかけて、火葬土坑や地下式墳を伴う多数の土壇墓から成る集団墓（上層農民指導型墓域と呼ばれる墓域）が形成されるとし、石塔や板碑・木製塔婆の使用を指摘している⁹。また、この頃から、山の中腹や丘陵上の景色のよい場所を「勝地」と称し、聖なる場所として墓域が形成されるようになる¹⁰といわれている。よって、当遺跡の土坑群と地下式墳などは墓域として意図的・機能的に配置されたものであり、中世の典型的な集団墓と考えられる。今後、当遺跡周辺の墓地・墓域との関わりについて、より研究を深めていく機会が望まれる。

註

- 1) 細かい時期区分は9世紀後葉が3軒、10世紀前葉が5軒、10世紀後葉が3軒、9世紀代から10世紀代と考えられる住居跡が1軒、10世紀代と考えられる住居跡が2軒、10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる住居跡が2軒、11世紀前葉が1軒である。
- 2) 便宜上、住居跡の面積が30㎡以上のものを大形、15㎡以上30㎡未満のものを中形、15㎡未満のものを小形とする。なお、平面形が残存していない住居跡については、面積を残存率から推定して計算した。
- 3) 当遺跡に隣接する福原原遺跡では、確認された住居跡4軒のうち北東コーナー部に竈が構築された住居跡が1軒検出されている。規模は、長軸3.2m、短軸3.0mの方形を呈しており、面積は約9.6㎡である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、同規模の住居跡が9世紀中葉であることから、10世紀前後と推定される。当遺跡との強い関連を窺わせる。
- 4) 笹生衛氏「東国における中世墓地の類型と変遷」茨城県教育財団歴史文化研究會資料 1996年
- 5) 小野正敏「図解・日本の中世遺跡」東京大学出版会 2001年3月

参考文献

- ・田所則夫、川又清明「三反田下高井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第128集』建設省 茨城県教育財団 1998年
- ・萩原義照「福原原遺跡」『笠間市埋蔵文化財調査報告書8集』笠間市教育委員会 笠間市福原原遺跡発掘調査会 1995年

中山遺跡遺構一覽表

表2 住居跡一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高	床面	内部施設			覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)		
				長径×短径	厚さ			竪溝	柱穴	出入口					灶	
1	H3f8	N-121°-E	[方形 または 長方形]	3.15 × (1.46)		2-8	平垣	-	-	-	1	自然	土師器19(坏4,小皿2,甕13), 須恵器1(甕),鉄滓2,礫1	11世紀前期	本(SI1)→ SK38・39	
2	H3h4	N-17°-E	[方形 または 長方形]	3.06 × (1.78)		10-20	平垣	一部	-	-	1	自然	土師器13(坏4,鉢1,甕6),石 礫2,(磁石),礫6,炭化材	10世紀代	本(SI2)→ SD1,SK51	
3	H3g7	N-118°-E	[方形 または 長方形]	3.73 × (2.12)		5-10	平垣	-	-	-	1	自然	土師器24(坏5,甕19)	10世紀後葉 ~ 11世紀前期	本(SI3)→ SK62 SK63(新旧不明)	
4	I3c3	N-96°-W	長方形	3.60 × 2.90		9-13	平垣	-	-	-	1	人為	土師器14(坏7,高台付坏1, 甕6),須恵器1(長頸瓶),礫 2,炭化材	10世紀代	本(SI4)→ SK55・93-94	
5	H3e7	N-122°-E	[方形 または 長方形]	(1.84) × (1.00)		4	平垣	-	-	-	1	人為	土師器3(甕),礫1	10世紀後葉 ~ 11世紀前期	本(SI5)→ (SI5)	
6	H3i11	N-125°-E	[方形 または 長方形]	2.74 × (1.81)		19-24	平垣	-	2	-	2	1	人為	土師器69(坏25,高台付坏1, 甕43),礫3	10世紀後葉	本(SI6)→ SK120
7	I3a1	N-25°-E	[方形 または 長方形]	3.34 × (2.30)		21-30	平垣	-	-	-	1	1	人為	土師器208(坏81,高台付甕5, 甕122),須恵器1(長頸瓶),灰燼 1(輪),鉄滓1,多量の礫	10世紀前期	SI8→本(SI7)
8	H2j0	N-94°-E	[方形 または 長方形]	3.45 × (2.70)		6-10	平垣	-	-	-	-	1	自然	土師器85(坏42,甕43),礫4	9世紀後葉	本(SI8)→SI7
9	H2j0	N-90°-E	不明	不明		6	平垣	-	-	-	-	1	不明	土師器48(坏7,高台付坏1, 小皿1,甕38,瓶1)須恵器1 (長頸瓶),礫2	10世紀後葉	(SI9)
10	G3j1	N-90°-W	長方形	4.84 × 3.56		4-13	平垣	-	-	-	-	1	人為	土師器52(高台付坏4,甕39, 瓶2,羽釜7),多量の礫	9世紀後葉	(SI10)
11	E6d2	N-111°-E	[方形]	3.28 × (3.30)		1	[平垣]	-	-	1	-	1	不明	土師器6(坏4,甕1,瓶1)	9~10世紀代	本(SI11)→ SK125
12	B6c9	N-72°-E	方形	2.86 × 2.66		3-13	平垣	-	-	-	1	1	人為	土師器18(坏13,高台付坏2, 甕1,瓶1,甕壺1),須恵器1 (甕),礫10	10世紀前期	(SI12)
13	B6b0	N-72°-E	長方形	3.30 × 2.90		3-6	平垣	-	-	-	-	1	不明	土師器9(坏2,高台付坏1, 甕6),須恵器1(甕),礫7	10世紀前期	(SI13)
14	B6a9	N-63°-E	方形	2.77 × 2.66		5-27	平垣	-	-	-	2	1	人為	土師器79(坏8,高台付坏1), 甕68),須恵器3(坏2,甕1), 礫1	10世紀前期	(SI14)
15	A6j9	N-107°-E	[長方形]	3.40 × 2.47		9-12	平垣	-	-	-	-	1	人為	土師器15(坏8,高台付坏2, 小皿2,甕3),礫4,粘土塊	10世紀後葉	本(SI15)→ SK168 SD7(新旧不明)
16	A6j7	N-72°-E	[方形 または 長方形]	3.20 × (2.21)		6-21	平垣	一部	-	-	-	1	人為	土師器78(坏8,高台付坏2, 甕55,瓶1,甕壺12),土製品1 (紡輪車),礫9	10世紀前期	(SI16)
17	B6e0	N-15°-W	[方形 または 長方形]	(1.60) × (0.92)		30-34	平垣	-	-	-	-	1	人為	土師器38(坏9,高台付坏3, 甕25,瓶1),礫1	9世紀後葉	本(SI17)→SD5

表3 平安時代の土坑一覽表

番号	位置	長径(幅)方向	平面形	規模		壁高	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長径(幅)×短径(幅)	深さ						
2A	I2f4	N-51°-W	[不整楕円形]	1.43 × (1.13)	34	外傾	平垣	人為	土師器24(坏9,高台付坏1,小皿2,甕12)	10世紀後葉	SK22B→本(SK2A)
2B	I2f4	不明	[不整楕円形]	(1.20) × (0.35)	48	外傾	平垣	人為	須恵器3(甕)	9世紀後葉以前	本(SK2B)→SK2A

表4 地下式竈一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形と規模				壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)	
			上		底								
			平面形	長径(軸)×短径(軸)	平面形	長径(軸)×短径(軸)							
1	H3g1	N-65°-E	竈坑	楕円形	1.20 × 0.96	楕円形	1.11 × 0.85	158	垂直	平坦	人為	-	15世紀代 (SE1)
			主室	長方形	3.38 × 1.95	長方形	2.90 × 1.79						
2	H2f9	N-77°-W	竈坑	楕円形	1.65 × 1.49	長方形	1.09 × 0.73	177	垂直	平坦	人為	土師質土器1(小皿)、 罐2	15世紀代 (SK79)
			主室	楕円形	2.93 × 1.85	長方形	2.92 × 1.74						
3	H2d6	N-17°-E	竈坑	不定形	0.78 × 0.77	楕円形	0.82 × 0.67	127	垂直	平坦	人為	馬骨(下顎)、罐3	15世紀代 本(SK108)→ SK116 SK118断片不明
			主室	不整長方形	2.66 × 1.73	長方形	2.46 × 1.58						
4	E6a4	N-0°	竈坑	楕円形	1.11 × 0.64	楕円形	0.77 × 0.41	104	垂直	平坦	人為	土師質土器3(小皿)、 罐鉢、内耳鍋、罐2	16世紀代 (SK133)
			主室	楕円形	2.16 × 1.77	楕円形	1.78 × 1.33						
5	D6j3	N-16°-E	竈坑	長方形	1.31 × (0.40)	長方形	1.22 × (0.29)	84	垂直	平坦	人為	土師質土器1(小皿)、 罐2	16-17世紀代 (SK134)
			主室	長方形	2.64 × (0.61)	長方形	1.75 × (0.55)						

表5 土壌墓一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
1	E6d2	N-84°-W	[楕円形]	[1.60] × 1.00	12	緩斜	平坦	人為	土師質土器27(小皿23, 罐鉢1, 内耳鍋3), 陶器1(瀬戸・美濃系甕蓋), 罐1	16世紀後半 - 17世紀前半	SH11→本(SK125)

表6 中・近世の土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
1	I 2 f2	-	円形	1.15 × 1.15	14	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK1)	
16	I 3 c1	N-47°-E	楕円形	1.05 × 0.90	6	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK16)	
27	H 3 14	N-22°-E	隅丸長方形	1.48 × 0.81	44	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK27)	
29	H 3 15	N-25°-E	楕円形	0.95 × 0.86	79	垂直	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK29)	
30	H 3 h5	-	円形	0.90 × 0.90	56	垂直	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK30)	
33	H 3 g6	N-18°-E	楕円形	1.99 × 1.05	14	緩斜	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK33)	
40	H 3 e6	-	円形	0.69 × 0.69	13	緩斜	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK40)	
41A	H 3 d5	-	円形	1.00 × 1.00	10	緩斜	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK41A) SK41Bとの新旧不明	
42	H 3 d6	不明	円形または楕円形	0.93 × (0.37)	25	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 SD1→本(SK42)	
43	H 3 d6	-	円形	0.97 × 0.97	12	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 SD1→本(SK43)	
51	H 3 g4	-	円形	1.09 × 1.09	17	緩斜	平坦	人為	-	15-17世紀 SD2→本(SK51)	
53	H 3 j3	-	円形	0.98 × 0.98	8	緩斜	平坦	人為	-	15-17世紀 SD1→本(SK53)	
54	H 3 j3	N-22°-E	楕円形	1.64 × 0.78	65	垂直	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK54) SB1との新旧不明	
55	I 3 c3	-	円形	0.87 × 0.87	50	垂直	平坦	人為	-	15-17世紀 SI4→本(SK55)	
58	H 3 d4	-	円形	1.17 × 1.17	13	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK58)	
62	H 3 h8	-	円形	0.92 × 0.92	67	垂直	平坦	人為	罐1	15-17世紀 SI3→本(SK62)	
63	H 3 g7	N-1°-E	不整楕円形	0.85 × 0.70	35	外傾	平坦	人為	罐2	15-17世紀 SI3→本(SK63)	
64	H 3 d5	-	円形	0.98 × 0.98	27	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK64)	
66	H 3 d4	-	円形	1.65 × 1.65	12	緩斜	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK66)	
67	H 3 c4	N-41°-E	楕円形	1.47 × 0.73	17	緩斜	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK67) SD32との新旧不明	
69	H 3 e3	-	円形	1.10 × 1.10	23	垂直	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK69)	
70	H 3 f3	N-27°-E	楕円形	1.20 × 1.01	19	外傾	平坦	人為	-	15-17世紀 (SK70)	

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模			崖高	底高	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ	厚さ						
71	H 3 g1	-	円形	1.10 × 1.10	30	外傾	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK71)	
72	H 3 h2	-	円形	1.03 × 1.03	17	外傾	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK72)	
73	H 3 i2	N-35°-W	楕円形	2.22 × 0.84	67	垂直	平垣	人為	土師質土器1(小皿)	16世紀後半	(SK73)	
76	H 3 d1	-	円形	1.22 × 1.22	33	外傾	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK76)	
78	II 2 f0	-	円形	0.91 × 0.91	14	外傾	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK78)	
80	H 2 g0	-	円形	0.95 × 0.95	37	垂直	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK80)	
87	H 3 b1	N-67°-E	楕円形	1.44 × 0.68	18	緩斜	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK87)	
88	H 2 i4	N-32°-E	隅丸長方形	1.56 × 1.08	15	外傾	平垣	人為	-	17世紀~	SK104→本(SK88)	
89	H 2 j4	N-49°-E	隅丸長方形	3.07 × 1.42	21	垂直	平垣	人為	-	17世紀~	(SK89)	
90	H 2 j3	N-49°-W	隅丸長方形	1.30 × 0.68	18	外傾	平垣	人為	-	17世紀~	(SK90)	
104	H 2 i3	N-44°-W	隅丸長方形	3.11 × 1.39	24	外傾	平垣	人為	-	17世紀~	本(SK100)→SK88	
106	H 2 e6	N-45°-W	隅丸長方形	1.73 × 0.95	17	緩斜	平垣	人為	-	17世紀~	(SK106)	
107	H 2 d6	N-49°-W	隅丸長方形	1.62 × 0.77	8	外傾	平垣	人為	-	17世紀~	(SK107)	
111	I 2 a6	N-45°-W	不整形長方形	1.90 × 0.90	30	外傾	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK111)	
112	H 2 a8	N-41°-E	楕円形	1.18 × 0.83	22	外傾	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK112)	
114	G 2 j9	N-39°-E	楕円形	1.37 × 0.88	69	垂直	平垣	人為	-	15-17世紀	(SK114)	
116	H 2 d5	N 35°-W	[隅丸長方形]	1.04 × 0.62	60	外傾	平垣	人為	-	15-17世紀	SK108→本(SK116)	
121A	H 2 i5	N-32°-E	長方形	1.39 × 0.90	44	垂直	平垣	人為	-	17世紀~	(SK121A)	
121B	H 2 e6	N-67°-W	隅丸長方形	1.52 × 0.89	26	外傾	平垣	人為	-	17世紀~	(SK121B)	
123	E 6 d3	N-63°-W	楕円形	1.00 × 0.70	18	緩斜	平垣	人為	土師質土器2(小皿, 内耳鍋)	17世紀代	(SK123)	
124	E 6 c1	N-64°-W	楕円形	2.10 × 0.90	32	外傾	平垣	人為	-	17世紀代	(SK124) Pit:全有する	
126	E 6 d3	N-58°-W	不整形楕円形	2.19 × 1.04	27	外傾	平垣	人為	土師質土器2(小皿, 内耳鍋)	17世紀代	(SK126) Pit:全有する	
127	E 6 b3	N-58°-W	楕円形	1.78 × 0.80	23	外傾	平垣	不明	土師質土器2(内耳鍋, 椀鉢)	17世紀代	(SK127)	
128	E 6 b3	N-29°-E	楕円形	1.89 × 0.79	38	垂直	平垣	人為	土師質土器1(小皿), 鐵3	17世紀~	(SK128)	
129	E 6 a3	-	円形	1.27 × 1.27	30	垂直	平垣	人為	-	16-17世紀	(SK129)	
130	E 6 a3	N-57°-W	楕円形	1.14 × 0.90	38	垂直	平垣	人為	土師質土器2(内耳鍋), 鐵2	17世紀~	(SK130)	
132	E 6 a4	N-64°-W	不整形長方形	2.32 × 0.92	36	垂直	平垣	人為	土師質土器1(内耳鍋), 鉄部1, 鐵2	17世紀~	(SK132)	
135	D 6 e8	-	円形	1.20 × 1.20	57	垂直	平垣	人為	土師質土器1(内耳鍋)	16世紀代	(SK135)	
136A	D 6 i4	-	円形	1.06 × 1.06	25	緩斜	平垣	人為	-	16-17世紀	SK136B→本(SK136A)	
136B	D 6 i4	N-77°-E	[楕円形]	(0.86) × 0.86	22	緩斜	平垣	人為	-	16-17世紀	本(SK136B)→SK136A	
137A	D 6 i4	N-34°-E	[楕円形]	(0.96) × 0.87	20	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	SK137B→本(SK137A)	
137B	D 6 i4	N-45°-W	[楕円形]	0.86 × (0.56)	32	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	本(SK137B)→SK137A	
138A	D 6 i4	-	円形	1.10 × 1.10	30	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	SK138B, SD4→ 本(SK138A)	
138B	D 6 i4	不明	[円形または楕円形]	(0.73) × (0.66)	28	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	SD4→本(SK138B)→ SK138A	
139	D 6 i4	-	円形	0.95 × 0.95	41	垂直	平垣	人為	-	16-17世紀	SK140→本(SK139)	
140A	D 6 h4	N-29°-E	[楕円形]	1.06 × (0.95)	17	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	SK140B→本(SK140A)	
140B	D 6 h4	N-108°-E	[楕円形]	(1.10) × (0.45)	13	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	本(SK140B)→SK140A	
141A	D 6 b5	N-14°-E	楕円形	1.52 × 1.32	78	外傾	平垣	人為	瓦葺土器1(火鉢), 陶器1(碗), 鉄部1, 鐵10	17世紀~	SK141B, SD4→ 本(SK141A)	
141B	D 6 b5	[N-0°]	[円形または楕円形]	1.18 × (0.70)	32	緩斜	平垣	人為	-	16-17世紀	SK141C, SD4→ 本(SK141B)→SK141A	
141C	D 6 b5	不明	[円形または楕円形]	1.06 × (0.44)	17	緩斜	平垣	人為	-	16世紀代	本(SK141C)→SK141B SD4:全有(不明)	
142	D 6 g4	N-19°-E	[楕円形]	1.59 × (0.53)	38	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	(SK142)	
143	D 6 g4	N-60°-E	楕円形	0.93 × 0.79	24	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	(SK143)	
144	D 6 g5	-	円形	0.91 × 0.91	52	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	(SK144)	
145	D 6 f5	-	円形	0.83 × 0.83	31	緩斜	平垣	人為	-	16-17世紀	(SK145)	
147	D 6 f5	N-73°-W	楕円形	1.79 × 0.77	54	垂直	平垣	人為	-	16-17世紀	本(SK147)→SK148	
148	D 6 g5	-	[円形]	0.96 × (0.95)	18	外傾	平垣	人為	-	16-17世紀	SK147→本(SK148)	

番号	位置	方位(軸)方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長さ(軸)×短径(軸)	高さ	深さ						
152A	D 6 b6	-	円形	1.10 × 1.10	42	外傾	平坦	人為	土師質土器1(小皿), 礫1	17世紀~	SK152B→本(SK152A)	
152B	D 6 b6	N-20°-E	【楕円形】	1.17 × 0.73	35	外傾	平坦	人為	-	16~17世紀	本(SK152B)→SK152A	
153	D 6 f7	-	円形	1.10 × 1.10	80	垂直	平坦	人為	-	16~17世紀	SD 4→本(SK153)	
154	D 6 f7	-	円形	0.94 × 0.94	37	外傾	平坦	人為	-	16~17世紀	(SK154)	
155	D 6 f8	N-67°-E	楕円形	1.27 × 1.15	71	外傾	平坦	人為	-	16~17世紀	(SK155)	
156	D 6 e8	N-17°-W	楕円形	1.31 × 1.11	57	外傾	平坦	人為	-	16~17世紀	(SK156)	
157	D 6 e8	N-73°-W	楕円形	1.04 × 0.90	46	垂直	平坦	人為	陶器1(輪), 礫2	17世紀~	(SK157)	
158	D 6 e9	N-76°-E	楕円形	1.08 × 0.95	38	外傾	平坦	人為	-	16~17世紀	(SK158)	
159A	D 6 e8	-	円形	0.94 × 0.94	32	垂直	平坦	人為	土師質土器5(内耳鍋), 鉄滓2, 礫1	17世紀代	SK159B→本(SK159A)	
159B	D 6 e8	不明	【円形または楕円形】	0.70 × 0.47	40	垂直	平坦	人為	-	16~17世紀	本(SK159B)→SK159A	
160	D 6 c8	N-17°-E	楕円形	0.95 × 0.85	28	垂直	平坦	人為	土師質土器11(小皿7, 内耳鍋2, 釜2, 鉄滓7, 礫6)	17世紀代	(SK160)	
163	B 7 d1	-	円形	1.14 × 1.14	80	垂直	平坦	人為	-	17世紀~	(SK163) Pitを有する	

表7 中・近世の溝一覽表

番号	位置	方向	形状	規模				断面形	壁面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ						
1	H306~I363	N-42°-E N-44°-W N-28°-E	鍵状	48.20	0.48~1.70	0.20~1.31	20	逆台形・直状	外傾	自然・人為	-	15世紀~17世紀	SI 2→本(SD 1)→SK42-43-45-53-74-93
2	H312~H210	N-36°-E	直線	11.00	0.46~0.81	0.16~0.59	12	逆台形・直状	外傾・横斜	不明	-	19世紀~17世紀	(SD 2)
3	H363~H363	N-22°-E	直線	15.20	1.40~2.55	1.02~1.09	17	直状	横斜	自然	土師質土器1(内耳鍋), 礫4	15世紀~17世紀	(SD 3) SK67との新旧不明
4	D68~D614	N-88°-E N-11°-E N-88°-E	鍵状	25.50	0.50~1.20	0.35~1.00	10~21	逆台形・直状	外傾・横斜	自然	-	16世紀~17世紀	本(SD 4)→SK138A・138B・139・141A・141B・153 SK141Cとの新旧不明

表8 道路跡一覽表

番号	位置	方向	形状	規模				断面形	壁面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ						
1	G2h9~H2d3	N-35°-E N-50°-E	直線(36.6)	(1.86)~ (4.92)	(1.46)~ (4.52)	26~40	逆台形・直状	外傾	人為	土師質土器10(小皿2, 内耳鍋8), 瓦質土器6(火鉢), 陶器4(輪1, 釜3), 磁器1(碗), 金属製品6(鉄釘1, 不明鉄製品5), 礫132	17世紀~	本(SF1)→SF2	
2	G2q7~H2d3	N-27°-E N-45°-E	直線(33.3)	(1.73)~ (6.62)	(1.45)~ (5.72)	26~53	逆台形・直状	外傾	人為	-	17世紀~	SF1→本(SF2)→SF3	
3	G2f7~H2d4	N-26°-E N-35°-E	直線(28.6)	(4.92)~ (5.19)	(2.66)~ (5.05)	40~59	逆台形・直状	外傾	人為	-	17世紀~	SF2→本(SF3)	
4	A6h0~B7d2	N-21°-W	直線(16.0)	0.37~0.69	0.23~0.47	7	直状	横斜	不明	-	19世紀~	(SF4)	

表9 掘立柱建物跡一覽表

番号	位置	主軸方向	掘立柱間距離	掘立柱間距離	規模		柱				覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)				
					長さ	深さ	断面形	壁面	長さ	短径					深さ	断面形		
1	H 3 J4	N-31°-E	1間	5.90	2.80~ 3.16	1.60~ 1.70	9.69	保柱	6	円形・楕円形	0.22~ 0.29	0.20~ 0.27	28~ 70	逆台形・U字状	0.10	人為	-	不明 (SB1) SK544との新旧不明

表10 時期不明の土坑一覧表

番号	位置	長さ(幅)方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長さ(幅)×短径(幅)	深さ							
3	I2g4	N-50°-W	楕円形	0.32 × 0.27	30	外傾	屈状	人為	-	不明	(SK3)	
4	I2g4	N-45°-W	不定形	0.70 × [0.57]	17	緩斜	凹凸	自然	-	不明	(SK4)	
6	I2h4	N-15°-W	楕円形	0.30 × 0.26	36	外傾	屈状	人為	-	不明	(SK6)	
7	I2g5	N-40°-W	楕円形	0.30 × 0.22	17	垂直	平垣	人為	-	不明	(SK7)	
8	I2h5	N-54°-E	不定形	0.78 × 0.56	17	緩斜	屈状	人為	-	不明	(SK8)	
9	I2h5	N-61°-W	楕円形	0.36 × 0.23	26	外傾	凹凸	人為	-	不明	(SK9)	
10	I2h6	N-34°-W	楕円形	0.70 × [0.50]	22	緩斜	屈状	自然	-	不明	(SK10)	
11	I3e3	N-67°-W	楕円形	0.30 × 0.23	34	垂直	屈状	人為	-	不明	(SK11)	
12	I3e2	N-33°-W	楕円形	0.67 × 0.52	9	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK12)	
13	I3d2	N-33°-E	楕円形	0.88 × 0.75	18	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK13)	
14	I3d1	N-37°-E	楕円形	1.16 × 0.58	6	緩斜	平垣	人為	-	不明	(SK14)	
15	I3d1	N-37°-W	楕円形	0.72 × 0.63	32	緩斜	屈状	人為	-	不明	(SK15)	
17	I3c1	N-57°-E	楕円形	1.98 × 0.82	54	垂直	平垣	人為	-	不明	(SK17)	
18	I2d0	N-25°-E	[楕円形]	1.19 × (1.14)	94	外傾	屈状	人為	-	不明	(SK18)	
19	I2c9	N-45°-W	楕円形	0.87 × 0.68	8	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK19)	
20	I2c9	N-28°-E	楕円形	(1.12) × 0.92	6	緩斜	平垣	人為	-	不明	(SK20)	
21	I2c9	N-55°-W	楕円形	2.01 × 1.22	61	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK21)	
22	I2b9	N-32°-W	楕円形	0.69 × 0.60	68	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK22)	
23	I2b9	N-32°-W	楕円形	1.01 × 0.62	50	垂直	平垣	人為	-	不明	(SK23)	
24	I2b8	-	円形	0.47 × 0.47	86	垂直	平垣	人為	-	不明	(SK24)	
26	I2b8	-	円形	0.26 × 0.26	68	垂直	屈状	不明	-	不明	(SK26)	
28	H316	-	円形	0.65 × 0.65	34	垂直	平垣	人為	礎1	不明	(SK28)	
31	H3b6	N-29°-W	楕円形	0.41 × 0.35	21	緩斜	屈状	不明	-	不明	(SK31)	
32	H319	-	円形	0.49 × 0.49	16	緩斜	平垣	自然	-	不明	(SK32)	
35	H319	N-21°-E	楕円形	1.22 × 0.78	42	緩斜	平垣	人為	-	不明	(SK35) SK56との新旧不明	
36	H319	-	円形	0.36 × 0.36	13	緩斜	屈状	人為	-	不明	(SK36)	
37	H318	N-38°-E	楕円形	0.59 × 0.42	13	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK37)	
38	H318	-	円形	0.64 × 0.64	36	外傾	平垣	人為	-	不明	S11→本(SK38)	
39	H317	N-33°-W	楕円形	0.82 × 0.67	30	外傾	平垣	人為	-	不明	S11→本(SK39)	
41B	H3d7	-	[円形]	0.75 × [0.75]	不明	不明	不明	不明	-	不明	(SK41B) SK41Aとの新旧不明	
44	H3d6	N-39°-E	楕円形	0.74 × 0.64	22	外傾	平垣	人為	-	不明	SK46→本(SK44)	
45	H3e6	-	円形	0.68 × 0.68	13	緩斜	平垣	不明	-	不明	SK46, SD1→本(SK45)	
46	H3e5	N-38°-W	不明	0.78 × [0.73]	15	外傾	平垣	人為	-	不明	本(SK46)→SK44-45-47	
47	H3e5	N-61°-W	楕円形	0.82 × 0.70	34	外傾	屈状	人為	-	不明	SK46→(SK47)	
48	H3e5	-	円形	0.46 × 0.46	56	垂直	円凸	人為	-	不明	(SK48)	
49	H3e5	N-65°-W	楕円形	0.31 × 0.36	31	外傾	屈状	人為	-	不明	(SK49)	
50	H3e5	N-54°-E	楕円形	0.35 × 0.28	39	垂直	平垣	人為	-	不明	(SK50)	
52	H3b3	-	円形	0.46 × 0.46	12	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK52)	
56	H319	N-45°-E	隅丸長方形	3.09 × 1.32	25	緩斜	平垣	人為	-	不明	SK57→本(SK56) SK38との新旧不明	
57	H319	N-41°-E	[長方形]	[3.17] × 0.88	40	外傾	平垣	人為	-	不明	本(SK57)→SK56	
59	H3d4	N-10°-W	楕円形	0.66 × 0.60	14	外傾	平垣	人為	-	不明	(SK59)	
60	H3d5	N-35°-W	楕円形	0.70 × 0.60	10	緩斜	屈状	人為	-	不明	(SK60)	
61	I3b3	-	円形	1.03 × 1.03	27	緩斜	屈状	人為	-	不明	(SK61)	
65	H3d5	-	円形	0.60 × 0.60	19	緩斜	屈状	人為	-	不明	(SK65)	
68	H3c5	-	[円形]	[0.86] × [0.86]	22	緩斜	屈状	人為	-	不明	(SK68)	

番号	位置	表裏(方)向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長さ(幅)×短径(幅)	高さ						
74	H313	N-34'-E	楕円形	0.85 × 0.69	10	緩斜	瓦状	不明	-	不明	SD1→本(SK74)
75	H3d2	-	円形	0.64 × 0.64	15	緩斜	平坦	人為	-	不明	(SK75)
77	H3d1	N-45'-E	楕円形	1.66 × 0.74	58	外傾	瓦状	人為	-	不明	(SK77)
81	H2e7	N-45'-W	楕円形	0.92 × 0.65	29	緩斜	瓦状	人為	-	不明	(SK81)
82	H2e8	N-41'-W	不整楕円形	1.85 × 1.54	41	緩斜	瓦状	人為	-	不明	(SK82)
83	H2e9	N-75'-W	不定形	1.55 × 0.63	95	外傾	凹凸	人為	-	不明	(SK83)
84	H2f8	N-41'-W	不整楕円形	2.71 × 1.02	37	緩斜	凹凸	人為	-	不明	(SK84)
85	H2h0	N-34'-E	楕円形	0.87 × 0.76	11	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK85)
86	H2h0	-	円形	0.97 × 0.97	24	緩斜	平坦	人為	-	不明	(SK86)
91	I2b8	N-42'-E	不定形	1.75 × 1.52	23	外傾	瓦状	人為	-	不明	(SK91)
92	H3j1	N-34'-W	楕円形	1.01 × 0.73	22	緩斜	瓦状	人為	-	不明	(SK92)
93	I3c3	N-71'-E	楕円形	0.91 × 0.75	24	外傾	瓦状	人為	-	不明	SI4, SD1→本(SK93)
94	I3c3	N-71'-W	楕円形	0.62 × 0.55	23	外傾	凹凸	人為	-	不明	SI4→本(SK94)
95	I2b8	N-47'-E	楕円形	0.26 × 0.21	25	緩斜	瓦状	不明	-	不明	(SK95)
96	I2c8	N-27'-W	楕円形	0.58 × 0.52	15	緩斜	瓦状	人為	-	不明	(SK96)
97	I2b6	N-56'-E	不整楕円形	2.37 × 1.27	39	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK97)
98	I2c8	N-30'-E	楕円形	0.36 × 0.26	37	垂直	平坦	人為	-	不明	(SK98)
99	I2b8	-	円形	0.31 × 0.31	70	垂直	瓦状	不明	-	不明	(SK99)
100	I2c8	-	円形	0.30 × 0.30	28	外傾	瓦状	不明	-	不明	(SK100)
101	I2a6	-	円形	0.50 × 0.50	37	外傾	瓦状	人為	-	不明	(SK101)
102	I2a6	N-45'-W	楕円形	0.60 × 0.49	62	外傾	瓦状	人為	-	不明	(SK102)
103	I2a6	N-82'-E	不整楕円形	0.46 × 0.35	60	垂直	瓦状	人為	-	不明	(SK103)
105	H2e7	N-51'-W	不整楕円形	3.79 × 0.92	30	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK105)Prを有する
110	I2a6	N-45'-E	楕円形	0.80 × 0.50	56	外傾	瓦状	人為	-	不明	(SK110)
113	H2a9	N-79'-W	楕円形	0.66 × 0.44	49	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK113)
115	G2j9	-	円形	0.58 × 0.58	50	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK115)
118	H2e6	N-47'-E	不定形	1.59 × 1.10	111	外傾	瓦状	人為	-	不明	(SK118) SK108との新旧不明
120	H312	N-28'-W	[楕円形]	(0.75) × (0.61)	10	外傾	平坦	人為	-	不明	SI6→本(SK120)
122	E6d3	-	円形	0.55 × 0.55	33	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK122)
131	E6a3	-	円形	0.86 × 0.86	22	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK131)
146	D6f5	N-19'-W	楕円形	0.71 × 0.61	7	緩斜	平坦	不明	-	不明	(SK146)
149	D6f6	-	円形	0.78 × 0.78	31	外傾	瓦状	人為	-	不明	(SK149)
150A	D6j6	N-97'-W	[楕円形]	(1.25) × (0.74)	30	外傾	平坦	人為	-	不明	SK150B→ 本(SK150A)→SK151
150B	D6j6	N-97'-W	[楕円形]	(0.60) × (0.12)	30	外傾	平坦	人為	-	不明	本(SK150B)→ SK150A
151	D6j6	N-40'-W	[楕円形]	0.85 × [0.76]	40	外傾	平坦	人為	-	不明	SK150A→本(SK151)
161	B6e0	N-52'-E	楕円形	1.21 × 0.71	15	緩斜	瓦状	人為	-	不明	本(SK161)→SD5
162	B6d0	N-74'-E	楕円形	0.86 × 0.64	26	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK162)
164	B7c1	-	円形	1.10 × 1.10	16	緩斜	平坦	人為	-	不明	(SK164)
165	B7c1	不明	[楕円形]	(1.35) × (0.79)	36	緩斜	平坦	人為	-	不明	SK169A→本(SK169) SK169Bとの新旧不明
166	B6b0	N-10'-W	楕円形	0.96 × 0.81	9	外傾	平坦	不明	-	不明	(SK166)
168	B6j9	N-20'-E	楕円形	0.89 × 0.54	40	外傾	瓦状	人為	-	不明	SI15→本(SK168)
169A	B6c0	不明	不定形	1.00 × 0.56	27	緩斜	瓦状	人為	-	不明	本(SK169A)→SK165 SK169Bとの新旧不明
169B	B6c0	不明	不定形	(1.00) × (0.61)	24	緩斜	瓦状	不明	-	不明	SK166→ 159Aとの新旧不明
170	J5c3	N-22'-E	不定形	(1.70) × 1.28	40	緩斜	瓦状	人為	-	不明	(SK170)
171	J4e0	N-8'-W	不整楕円形	1.80 × 1.35	80	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK171) Prを有する
172	J4g9	N-45'-E	楕円形	1.51 × 0.86	86	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK172)

番号	位置	長さ(軸)方向	平面形	規 模			出土遺物	時代	備 考 (遺構番号) 新旧関係 (古→新)		
				長さ(軸)×短径(軸)	高さ	壁面				底面	覆土
173	J4g7	N-8°-E	楕円形	1.71 × 1.25	30	緩斜	平坦	人為	-	不明	(SK173)
174	J4f7	N-40°-E	楕円形	2.00 × 1.80	57	緩斜	凹凸	人為	-	不明	(SK174)
175	J4g2	N-3°-E	【楕円形】	(1.81) × 0.92	89	外傾	平坦	人為	-	不明	(SK175)

表11 時期不明の溝一覧表

番号	位置	方向	形状	規 模				断面形	壁面	覆土	出土遺物	時代	備 考 (遺構番号) 新旧関係 (古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ						
5	B6f8~B7d2	N-63°-E	直線	19.06	0.22-0.58	0.14-0.41	7	皿状	緩斜	不明	—	不明	SI17,SK161→本(SD5)
7	B6a7~B6a9	N-66°-E	直線	11.00	1.10-0.71	0.76-0.69	5	皿状	緩斜	不明	—	不明	本(SD7) SI15との新旧不明

写 真 图 版





遺跡遠景, 遺跡全景



調査Ⅰ区全景，調査Ⅲ区全景



調査IV区全景, 調査V区全景



第1号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
竈遺物出土状況



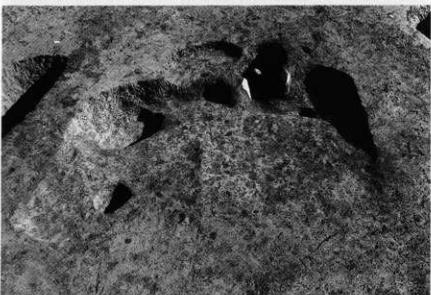
第4号住居跡
完掘状況



第5号住居跡
完掘状況



第5号住居跡
電遺物出土状況



第6号住居跡
完掘状況

第6号住居跡
竈完掘状況



第7号住居跡
完掘状況



第9号住居跡
竈遺物出土状況





第10号住居跡
完掘状況



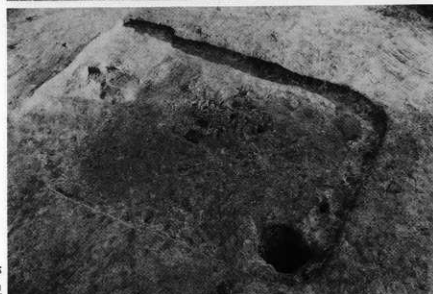
第10号住居跡
竈完掘状況



第10号住居跡
遺物出土状況



第11号住居跡
完掘状況



第12号住居跡
完掘状況



第13号住居跡
完掘状況



第14号住居跡
完掘状況



第14号住居跡
遺物出土状況



第15号住居跡
完掘状況



第16号住居跡
完掘狀況



第16号住居跡
竈遺物出土狀況



第17号住居跡
完掘狀況



第17号住居跡
遺物出土状況



第17号住居跡
竈遺物出土状況

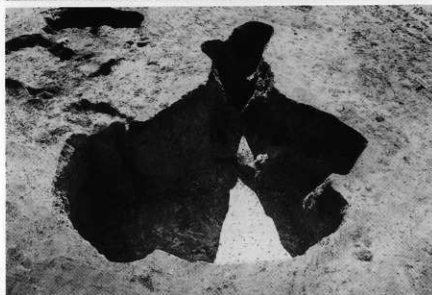


第2A・2B号土坑
完掘状況

第1号地下式墳
完掘状況



第3号地下式墳
完掘状況



第4号地下式墳
完掘状況





第1号土墳墓
遺物出土状況



第160号土坑
遺物出土状況



第4号溝
完掘状況



第2号地下式墳完掘状況



第5号地下式墳完掘状況



第73号土坑完掘状況



第124号土坑完掘状況



第1・2・3号道路跡完掘状況



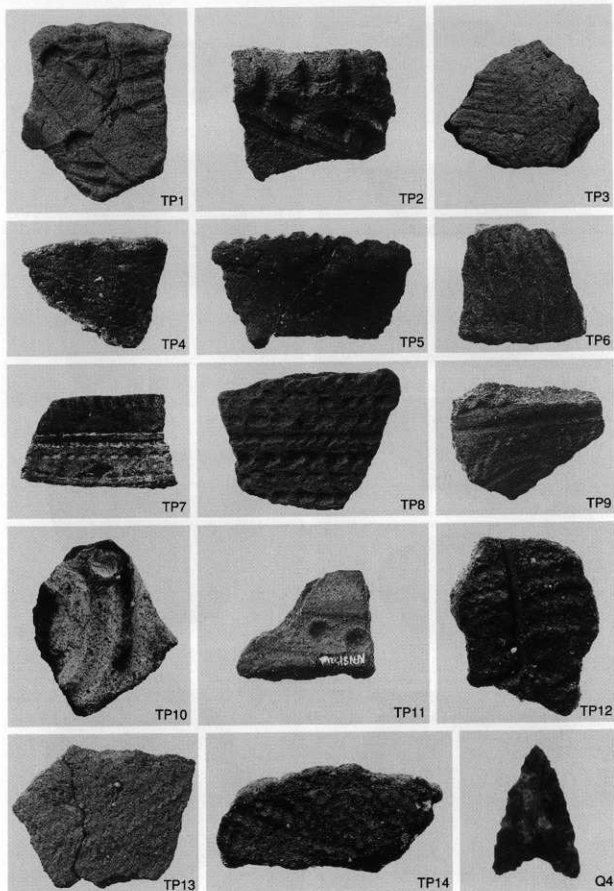
第4号道路跡硬化面確認状況



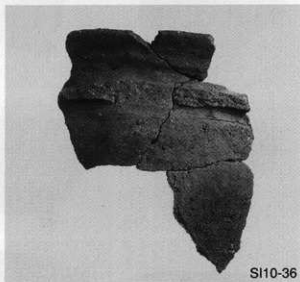
第1号溝完掘状況

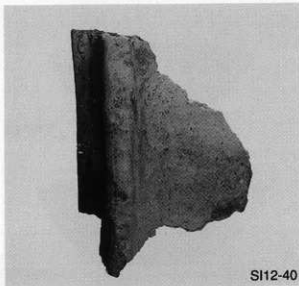


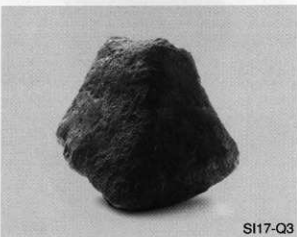
第1号掘立柱建物跡完掘状況



縄文時代出土遺物









第1号土墳墓-37



第1号土墳墓-72



第1号土墳墓-38



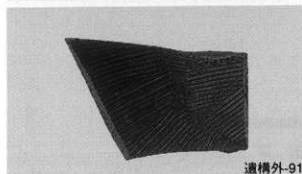
遺構外-90A・90B



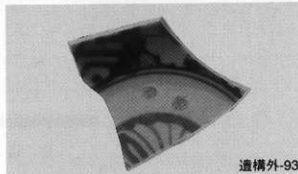
第1号土墳墓-71



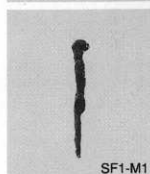
遺構外-92



遺構外-91



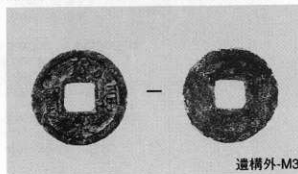
遺構外-93



SF1-M1



SF1-M2



遺構外-M3

茨城県教育財団文化財調査報告第204集

中山遺跡

平成15(2003)年3月20日 印刷

平成15(2003)年3月26日 発行

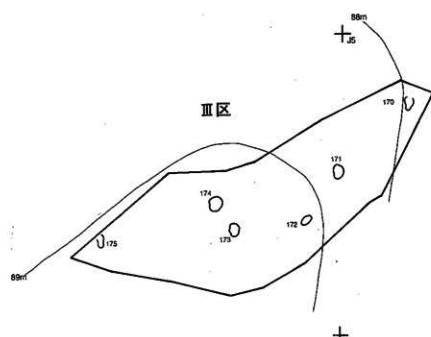
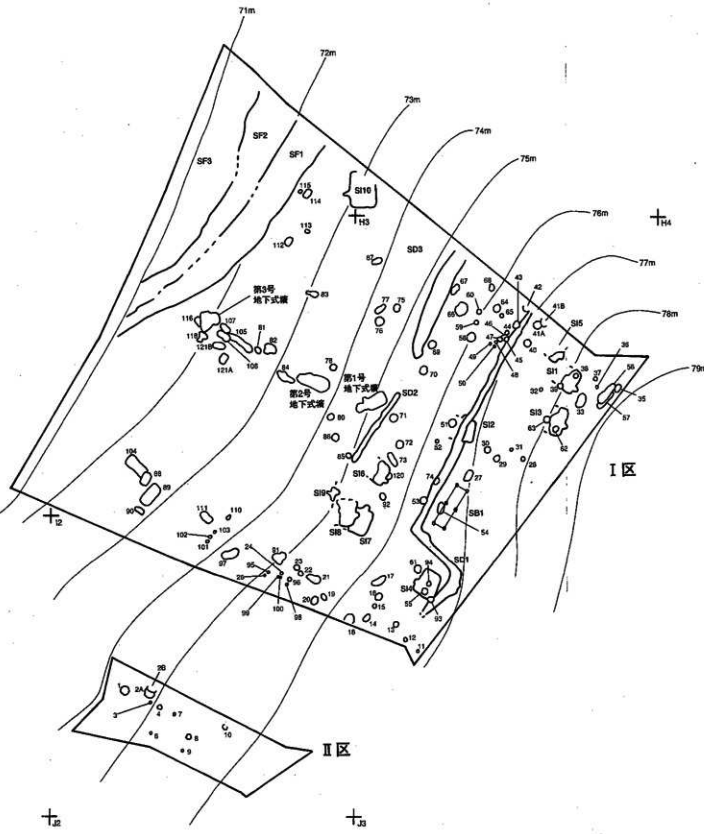
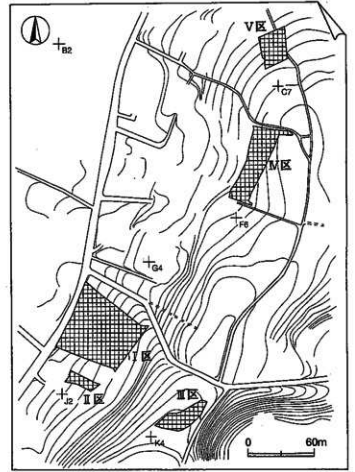
発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生産学習センター分館内
TEL. 029-225-6587

印刷 株式会社 高野高速印刷
〒310-0853 水戸市平須町1822-122
TEL. 029-305-5588

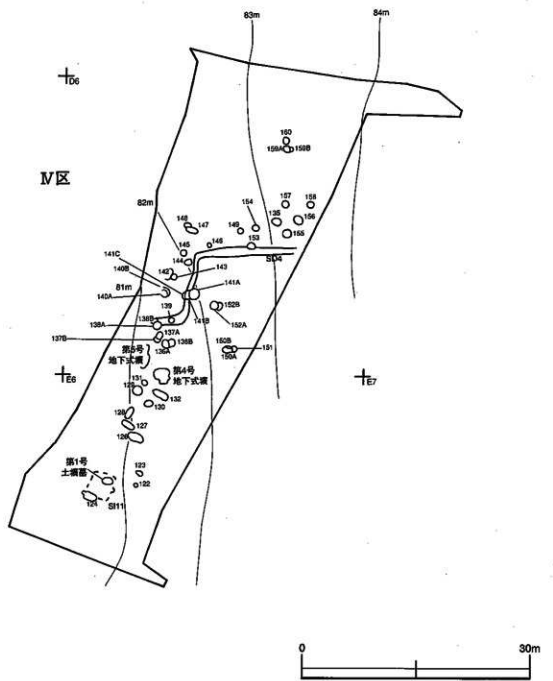
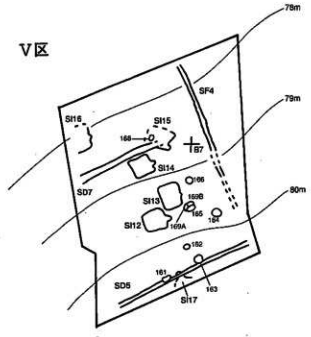
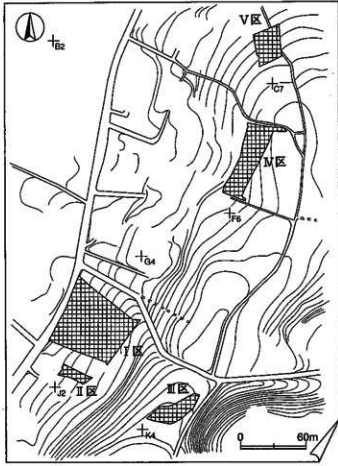
付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第204集

中山遺跡 遺構全体図



付図 中山遺跡 遺構全体図 (1)



付図 中山遺跡 遺構全体図 (2)